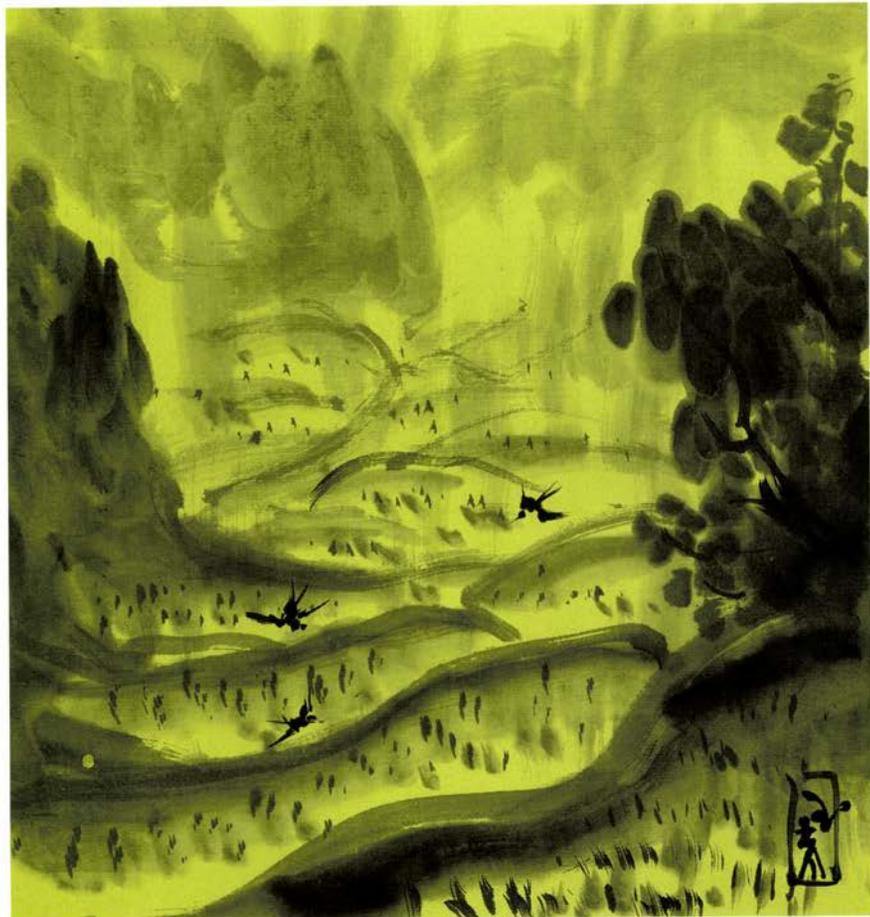


川柳塔

平成元年三月二十五日印刷
平成元年四月一日発行(毎月一日発行)
創刊大正十三年 通巻七四三号



日川協加盟

No. 743

四月号

西尾 栞 叙勲記念川柳大会

日 時 平成元年7月9日(日) 午前11時開場

会 場 なにわ会館4階 金剛の間

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 TEL 06 (772) 1441

司会 西 田 柳宏子

開会の辞

橘 高 薫 風

祝 辞……………日本川柳協会理事長 山 田 良 行 氏

題と選者(各題2句 ☆締切 12時 ☆欠席投句拝辞)

「初 恋」 小 出 智 子 選

「挨 拶」 波多野 五楽庵 選

「慌 てる」 黒 川 紫 香 選

「 絵 」 寺 尾 俊 平 選

「町 内」 広 瀬 反 省 選

「 旅 」 小松原 爽 介 選

「 顔 」 去来川 巨 城 選

「 杯 」 磯 野 いさむ 選

事前投句 「自 分」 西 尾 栞 選

閉会の辞

野 村 太茂津

事前投句はハガキに2句・締切 6月20日

(宛先) 〒545 大阪市阿倍野区三明町2-10-16

ウエムラ第2ビル 川 柳 塔 社

会 費 2,000円

祝 宴 8,000円(同会場にて午後5時~8時の予定)

主 催 川 柳 塔 社

奇祭

西尾 葉

三月四日の午後二時、大阪府立文化情報センターで、上方芸能一〇〇号記念シンポジウムが開催されたので出席した。

テーマは上方芸能の特質は保たれるかというので、権藤氏、山田氏、志賀山さん、富井氏の四人がパネラーとなり、木津川計氏の司会で始められた。最後は上方言葉、即ち大阪弁のことで終始した。

中でも面白かったのは、自由討論の段で、東京から芦屋へ来て二十年になる人が、一応、大阪弁をこきおろしたが、先般、入歯したら途端に大阪弁がスラスラと言えて江戸っ子で言うと、入歯が抜けたと言つて笑わせ、会場を和やかにした。笑いの効能を今さら云々するのもおかしいが、そもそも日本人は、「笑い」をもつてものの始めとしてきたのである。

それを古典や芸能の世界に探究してみると、「天宇受売命、ささ葉を手草に続いて、天の岩屋戸に空槽伏せて踏みとどろかし神がかりして胸乳をかき出で、裳緒を番登に押しつけたれき、かれ高天の原ゆすりて八百万の神どもに笑ひき」。

これは古事記にある有名な情景である。この高天の原をどよもすほど、神々が笑つたというその笑いこそ、日本の夜明けの笑いであつたのである。

笑いの奇祭は、和歌山県の丹生神社の笑い祭や、防府市の「笑講」等いろいろあるが、一寸面白いのが、兵庫県篠山町の「體切り祭」である。その昔、この土地に住んでいた一匹の大蛇が人々を苦しめたので退治した故事によって、體を大蛇に見立てて退治する一連のドラマを演じるのであるが、その初めの行事に鼓を打つ田楽を、食べる田楽になぞらえて猿田彦と呼ばれる所役の人が太鼓を打ちながら、即席の間答を交して回る寸劇がある。

例えばこんなやりとりがある。

「ああ、もうしもっし一寸お訊ねいたしますが、お宅の畑の白菜はよく出来てござるが、何を肥料になされた？」

「いや、別にこれといった肥料はやり申さんが、そう言えば、この間竹下さんが田んぼの傍を通るとき、どてっかい尻をこかれたがな」

「竹下さんて、あのお隣の家の？」

「いやいや、首相の竹下さんやがな。今度、リクルートで儲けなさつて、わしらよりええもん食べてなさるんで、尻でも栄養たつぷりや」

「へえ!!」

これで大爆笑であるが、その間答が、参会した村人を笑わせれば笑わすほど、祭は良しとされている。

川柳に笑いが少なくなつたと言われて久しいが、笑いこそ生活の活力であり、「生の讃歌」である。大いに笑つて川柳を作りましょう。

漫才のネタを国会今日も出し

座右の句

恋人の膝は樟櫨のまるさかな

(薰風)

私の句

桃の木に桃の花咲くつねならむ

吉川寿美

川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

奇祭	西尾 栞	(1)
類想のこと	橋高 薰風	(2)
川柳塔 (同人吟)	西尾 栞選	(4)
自選集	東野 大八	(31)
■川柳太平記 (131) 川柳の群像 泉 淳夫	田中 光夫	(34)
■連載 誹風柳多留廿六篇研究 (四十丁—四十一丁)	田中 光夫	(36)
理屈・言葉・川柳	黒川紫香選	(40)
水煙抄	河井 庸佑	(59)
秀句鑑賞	田中 叶	(63)
同人吟		
水煙抄		

類想のこと

橋高 薰風

日本川柳秀句集の校正をしていて、これはいけないと思った。

縄電車明日は親を積み残す

の作品が目に見え込んで来たからである。投句者の住所は岡山県、それで決定的になった。それというのは、私は山陽柳壇の選をして

いるのであるが、昨年の二月に、縄電車いつかは親を積み残す 三宅武夫を入選第一席としたのである。それ故、事務局に諮り、発表後に問題となるであろうその一句を削除することにした。

私にも初心時代これに似た経験があった。句集「旅人」を心魂込めて読んでいた頃、川柳塔欄への投句二十句(その頃は二十句だった)に、

寄り添へと云はぬばかりに風が吹く

を出したところ、路郎先生に、「これ僕の句やで」と言われたことがある。頭の中にあつた佳句が無意識のうちに出現して、まるで自分が作句したように錯覚して、自信めいた気持ちまで抱いて提出したのであった。私はその体験から、こういう類いの思い違いには理解をもって臨んでいるのだけれど、やはり

愛染帖

〈女性コーナー〉 茴香の花

「箱」

一路集「理想」

「始める」

初歩教室

■句集紹介 黒川紫香『むらさき』

柳界展望

本社三月句会

各地柳壇（佳句地10選／江原とみお）

63年度 各地柳壇賞受賞作品

■4月各地句会案内／91

■編集後記／93

橘高薫風選 … (60)

小出智子選 … (64)

仁部四郎選 … (66)

越村枯梢選 … (66)

岸野あやめ選 … (67)

阿萬萬的 … (68)

奥田みつ子 … (70)

… (71)

… (72)

… (76)

… (90)

座右の句

鳶が鷹生めば鷹また鳶を生み

(甲 吉)

私の句

混浴を出る時だけは身構える

相馬 一花

先輩の句は「神聖にして侵すべからず」であるのだ。

路郎先生は、類想句の処し方にも厳しい人だった。先生のお供をして林宏子さんと四条の仲源寺での川雑京都支部の月例会に初めて行った時のこと、披講の途中で先生はいきなり、「その句は、誰それの句と同じだから取り消した方がよい」と大声でたしなめられた。名のある選者に対して失礼ではないのか、小句会だから大目に見てもよいのでは、という斟酌はいささかもされなかった。先生は、いのちを削るようにして作句をされていたので、个性的で抜きんでた句を大切に扱われたものと思う。最近のことだが、

イヤリングいやよいやよと揺れている 須崎豆秋

一年の計吞みながら吞みながら 梶原一善

と同一の句を目にしたが、過去に記憶したものをつっかり投句されたのだらうと受け取りながらも、そういう過ちが重なると、それとなく注意することになっている。ペテランといえども句会で句の出来ぬときは、自分が遠い過去に発表した句に少し手を入れて出句しなくなることもある。そして、入選してもさびしさがつきまとい、没になつてはつたりもするのである。

私は、路郎先生に初心の時代から、作句者も選者も、常に修羅場を潜っていることを教えられた。



西尾 葉選

西宮市 奥田 みつ子

正義派よお前に欲しいのは情け
最後まではずせぬ面を一つ持つ

八面六臂いつか自分を見失う

愛憎に身悶えをする曼珠沙華

自己嫌悪 蛇口をいっばいにひねる

高い鼻 劣等感も持ち合わせ

下関市 石川 侃流洞

すがるのが仏と決めた気の弱り

進化論まさかと猿が木をゆする

ボケだろろう噂へ少しうとくなる

走っても木馬追越しなどしない

自信過剰だんだん酸素薄くなる

考え過ぎ四季がなくなる温暖化

和歌山市 西山 幸

気位の高さで春の靴を買う

ハンカチをたたみ直している演技

テイータイムみんな漫画を読んでいる

流されたくはない雛もいる流し雛

閑話休題 自分の位置を見直そう

鈍行に乗ると絵になる束ね髪

京都市 松川 杜的

笈摺の朱印にじんだままでよし

日記帳今日も沈丁花のことに触れ

「火の鳥」の漫画も一度読もうかな

すらすらと平成とは未だ書けぬ

リクルートの話も結構舞妓はん

肩書きのない弔電ならいただこう

兵庫県 遠山 可住

雑草に春一番が暖かし

打ち明けた歩幅で帰る月の道

頭寒足熱 北海道は猛吹雪

共稼ぎ雑巾一枚縫うでなし

はげ薬試したいのが前に行く

新しい年もやっぱり古い二人

桜井市 岩本雀踊子

賞罰のない平凡な男です

八人目の敵はうちのお母ちゃん

天狗の鼻を信じた事がない

自画像の胸に勲章ほしくなる

不眠症本当のワルになり切れぬ

鈍行の旅の人情はあたたかい

松原市 谷垣史好

女たちの虜となつて甘党屋

愛の蜜滴るみたらし団子かな

死にそこなつてこそ本当の悪党だ

社会主義の森で鳥が騒がしい

本を読め読めと梟の目が光る

追い出した猫ときどき町で遇う

松原市 玉置重人

ここからは妥協をしない砂時計

春ですね菜の花漬けにはずむ箸

酢大豆の瓶を大事にしています

シベリヤの根雪の記憶消えやらぬ

自分史の中の自分がいとおしい

ややこしいことにモノサシみな違う

八尾市 高杉鬼遊

悪を隠す心にわたしまで重い

年金のくらしへ億のコマーシャル

自由化だ分厚いテキが食べられる

鬼のるす鬼の女房は絵三味

葬式へ行くときだけの夫婦連れ

花みごろ高い二級酒だと思ふ

米子市 野坂なみ

雨のち晴ボストは手紙読んでいる

涅槃図の仲間みんなが許される(涅槃図)

対の菩提樹もう一度念をおす(〃)

そして「お早う」高二の方からいい出した

今ならばこの彩着れそう着ましようよ

初孫を見れば許してくるだろう

弘前市 波多野 五楽庵

北緯二十度暦の春になりぬれど

全館暖房パジャマでビール飲んでます

足袋ぬいで番茶が欲しくなる素足

妻が嫉くほどの火薬になるマツチ

ファンデーションお別れに行く朝でした

廃校のニュースを知らぬ桜の芽

岡山市 時末一灯

左手が動く右手の知らぬこと

負けてから千代の富士関好きになり

ビル街の五時は無口になってくる

甘い方へ向かない蟻を見て拍手

起死回生ばかり思つてはや六十路

過去は過去想いなかばに宿をたつ

大阪市 西出楓楽

雪降ってロマンチストにしてくれる

オバタリアンにいつかあなたもなるのです

長男に嫁かぬ嫁かぬと風が吹く

生きるもやゴミが溜ってゆくばかり

お隣の芝生を夜の食卓に

鳥獣戯画に心当りが多すぎる

豊中市 安藤 寿美子

政治家の名刺を不細工やと思う

永田町避けてかかった冬の虹

ダイヤになれダイヤになれと石みがく

丸いケーキ七つに切れる母の腕

段ボール積んで天王寺公園○番地

大正生れ又空瓶をしまい込む

伊丹市 檜谷 寿馬

拗ねて来た画廊に愛という名画

二世帯の家それぞれの豆を撒き

少年の大意 朝から髪洗う

ともしびという薄き書を読む風邪の床

戦友と同窓タブリ招かれる

平成の枕辺 昭和の胃薬が

豊中市 田中正坊

母さんの童話が好きな紙人形

例えばの話に乗った泥人形

竹人形ほんとはほんと嘘は嘘

薬人形耐えねばならぬ時がある

寂しくて姉様人形折っている

俗論をじつと聞いている御所人形

春の絵の中で道草考える

枯れるまで女は彩をまだ選ぶ

死ぬるまで働くミシン手離さぬ

この町に生きていつばい知恵もらう

咳一つ闇の中に居る孤独

一粒のビタミン寒の中に居る

尼崎市 春城 年代

春の小川を歌えば高瀬川の土手

ひとりぼっちがわが身一人のように言う

いい加減に生きねばわたし狂っちゃう

人に言えないなやみを抱いたまま春に

かわりもない遠い詩人にあこがれる

未練ゆらゆら椿の花が咲き出して

八尾市 鷺見 章

昭和逝く残業の夜のカップ麺

万葉も源氏も学ぶコミック誌

商才の寺に丈余の観世音

故郷と山を四股名に未だ勝てず

博学の下戸が集める洋酒瓶

不揃いの湯呑に通夜の酒を酌ぎ

西宮市 西口 いわゑ

一面の菜の花畑亡母と居る

面いくつ持って女のいくさかな

やぶ椿思い出の道坂の道

筋書きはいらぬ二つの影法師

面つけぬ同士の酒でよく弾む
拾つて来た犬が夫の愛うばう

大阪市 本間 満津子

はてえーとここへなににきたのやろ

言づけを思い出したのは夜半

笑うてはるけどあんたかて歳をとる

潔く退こうか とことん粘ろうか

すつ裸知恵より他に武器はなし

靴磨いとく誰か誘つてくれそうぞ

堺市 中川 滋 雀

平成とまだ書きなれぬ領収書

合鍵のぬくみは妻にだけ渡す

地獄までついていくとは聞かなんだ

竹をふむ足の先から洩れた愚痴

ためされてやる気にさせた夜の帳

倉敷市 野田 素身郎

ワープロを打ち間違えた物思い

定年が近く義理チョコまでも減り

入れ黒子だったとあくる日に気づき

祝い箸また取り落とす後遺症

再就職かつての部下に疎まれる

名古屋市 越村 枯 梢

おったまげたよ女房のテリトリ

札束が降つてくる湧いてくる永田町

葬儀代に戒名代を忘れてた

戦死した友はいい奴ばかりなり

テトラポットある日そっぽを向きたがる

松江市 恒松 叮 紅

内科外科歯医者老軀のスケジュール

気がつくと思痴を撒いてる老いの弁

変りませんねと老人をくすぐられ

子育てを終えた日ピアス光りだす

作法地に落ちたと嘆く箸袋

松江市 柳 楽 鶴 丸

腹のたつ昔の事は忘れよう

天皇の崩御で死語が生きかえる

オリジナルカクテルで今日も御苦労さん

男です国際結婚したかった

ロマンスティー懐古しながらのんです

松江市 舟 木 与根一

雪便りなくて暖冬疲れきり

休耕に自然がもどり露のとう

還暦の妻にも俺にもない若さ

補聴器でもとの頑固をとり戻し

余分な銭ないから悠々しています

竹原市 小島 蘭 幸

概念を捨てると伸びる若い樹よ

マンネリ打破四十歳の面を彫る

妻よりも軽いおんなをともだちに

ラストチャンスといつも思っている鬼だ

少し遅れて仏とはなしています

岡山市 土居 耕 花

里芋よあまりネチネチしなさんな

菜の花が蜂に吸わせている不倫

線香の燻ゆるあいだは未亡人

たこ焼きに並んでるのは愛妻家

週休が二日 二日も邪魔にされ

奈良市 宮口 笛生

今年また貧乏神と肩を組む

一日のドラマ駅前の花時計

魂胆がまだ読み切れぬ酒酌がれ

酒好きに白菜うまく漬かつてる

温泉の窓が曇った雪景色

岡山県 嘉数 兆代賀

地下足袋の穴から春の陽がのぞき

無にかえる時に明日が見えてくる

つまりいた女で母でいるわたし

ご免ネを何べん言った陽が沈む

春嵐心の裏に花が散る

大阪市 津守 柳伸

成り行きにまかすずるさも兼ね備え

お見舞に行くしあわせを噛みしめる

北風の試練女に歳がない

歯医者だけ切れぬ縁の健保証

ラーメンの屋台へ日参するペンツ

鳥取県 川崎 秋女

春ですネもう春ですネ風が言う
芽ぐくんだバラを妬むか春の雪

リクルート逮捕二月の小雪舞う

新聞に包む焼芋ならもらお

逃げてゆく二月へ実るものがない

冬陽が何か忘れたままおちる

雀来てこぼれ話を餌にする

雪の夜の豆腐と温い会話する

暖冬に阿呆がひとり風邪をひく

カップルの椅子から遠くひとり飲む

和歌山市 若宮 武雄

天国を目ざす気もなし煙草の輪

安らぎはお墓まいるの帰り道

鬼の計を聞いて平気な鬼心

汚れないままで消えたいシャボン玉

手を高く三回振ったいい別れ

島根県 小砂 白汀

この団地むかし雲雀の鳴いたとこ

人恋し人また恋しおぼろ月

表から裏から花嫁焙られる

音響効果抜群隣が鼓を叩き

ほろ酔いで凍る深夜の月を踏み

大阪市 江城 修史

生きるってたやすくはない義理かさね

喝采のない余生をばしたたかに

自分史に友情の数を光らせる

浮草に似たよな情を受けました

夫婦坂点となるまでのぼらねば

島根県 堀江正朗

手さぐりで音を尋ねる体当り
文明の音はせわしく耳をうつ
盃は丸くおさめる知恵を持ち
盲人の胸張る言葉おかしから
僕だって灯りをつけて妻を待つ

島根県 堀江芳子

風花と父いったきり十七回忌
気の長い挨拶もよしいずも人
失明の夫と雀は話好き
ここだけの話が好きな回覧板
故里を語れば澄んだ川の音

高槻市 辻白溪子

お喋りが過ぎておとこに隙が出る
減点を探すと審査やり易い
肚立てる程の値打ちは無い相手
団地中ニュースが知れた救急車
ライブルを招き祝いの席埋まる

美禰市 安平次弘道

順番ならあきらめましょう霊柩車
竹光を磨きわが家の自衛論
賞罰なし所詮凡夫の端くれで
後輩に抜かれて椅子が軋みだす
悠々ではないが自適の万歩計

守口市 羽原静歩

天地有情うつとり小便しています
大和路の春へ良寛出て来そう
子別れの犬が昔の土を掘る
めでたいな亀がゆっくり死にました
もう一人の自画像に神経痛などはなし

和歌山市 松原寿子

花東よ春の笑窪よ誕生日
約束の小指はなぜか桜いろ
今もって染まり切れずに人を恋う
癖ひとつ肩に優しい掌のぬくみ
花の咲く息吹きへ慕情よみがえる

奈良市 天正千梢

藪椿落ちてふんぎりつけてくれ
七十に近しされど大人になりきれず
納まらぬものあり般若心経あげてみる
円空仏荒いけずりがしたしくて
落してしまつてから大切さが分かり

今治市 矢野佳雲

焚火しているのに誰も寄つて来ぬ
乗り易い男へ妻の咳ばらい
七十の余命いくつというスリル
スキー場へ行けない程の雪が降り
人なつっこいせいが多弁になつてくる

和歌山市 牛尾緑良

一杯の水死ぬるにも生きるにも
雪やコンコン負けるでないぞ受験票

流暢な話をもたれてる胃の腑
沈黙の後の涙を怖れてる
口が立派で三猿にはなれぬ

米子市 林 荒介

友達の丸は歪で温かい
お神籤と結ばれている許される
絆に触れたのか電気が走る
お互いの歩幅で丸を描いている
尋ね人記念樹ばかり茂らせる

西宮市 林 はつ絵

内面はやはり火宅の人である
本人は真剣でいる貼り楽

ふと落とす隠しつづけた匹婦の面
雪が降る人それぞれの別れかた
雨漏りの頃はごはんを借りられた

和歌山市 堀 端三男

ネクタイにもう用のない土に生き
振り出しへ戻れと亡妻が言うている
住むところが違いれつきとした夫婦
振り向かぬうしろ姿に見る決意
子沢山住所不定の楽隠居

玉野市 小 谷 仙 山

経験を語るも男と女の差
嘘を聞く耳のいたさが胃に溜る
花鉄 花の雫をいとおしむ
本流に乗る浮草の不幸せ

五分前妻よ今なら逃げられる

平田市 久 家 代仕男

隙だらけの平和 金とは政治とは
寝不足が続く四月の美容院
高級魚地元は獲れたニュースだけ
腕の無いわけを埒輪の目が語る
倒産の軒で泣いてる伝書鳩

米子市 林 瑞 枝

捨てがたき皿に想い出ばかり盛る
生まれ場所良かった流れの中にいる
今日の絵が明日も続くように祈る
若竹の袷紗の似合う円い膝
話好き雛の朱唇に灯をともしず

富田林市 藤 田 泰 子

切れ過ぎぬように包丁研いでいる
良くみると夫と同じ笑い皺
お隣の花より紅い家の花
自分でも可愛くないと分ってる
安売りはしないでおこうチョコレート

大阪市 河 井 庸 佑

いい顔をばかりしていて気が疲れ
頑なにこだわる訳がわかりかけ
心境の変化やる気出してくる
一人前回らぬ口で文句言う
両方をたてる秘策を探り出す

島根県 榊 原 秀 子

初釜にちよつと貴賓になりすます

いつかもう私は母の年を越え

聞きにくいこときいてからつくけじめ

雪もよい何故か心にうづくもの

誰のため舞つて見せるかぼたん雪

倉吉市 奥谷弘朗

金婚へ婦唱夫随でたどりつき

あまりにも似合ひの夫婦とおだてられ

のほほんの二人に似合う共稼ぎ

胡座かく娘の唇が赤すぎる

いますこし炎えてみたくて紅を引く

倉敷市 稲田豊作

スケジュール詰めて男の貌になる

頼まれて嘘の相槌打たされる

人間不信お客へ防犯カメラ向け

週休二日届かぬ話小商人

ご静聴ありがとうで目を覚まし

唐津市 田口虹汀

斉戒沐浴仕事始めの向う槌

ふぐ鍋に一寸見えない窓の雪

子も孫も無いが尾を振るボチが居て

妻がいて喜怒哀楽を整理する

むらさき発刊を祝して

新鮮な季節の色の出たお茄子

唐津市 久保正敏

余生もう抑揚のない歌うたう

歩が無くて好きな女が詰められぬ

刺し傷の深さは愛の深さかも

友達の不倫を責めず妨げず

止り木で捜す余生のユートピア

唐津市 仁部四郎

玄関にドライフラワー敢然と

勤め人箱から出るとカゼをひく

風呂に在るつれあいよもや他人では

相席は紅い吸いがらかけうどん

病名を聞いて齡へ指を折り

西条市 片上明水

乳母車押してる顔が嬉しそう

風の上東京へ行く飛行雲

念押したことで相手が知恵をつけ

跡継ぎの踊りが派手な影法師

パンザイで花嫁さんが島へ着く

出雲市 園山多賀子

影に添う内助があつて花吹雪く

栗師の受賞を讃える
紫香師の受賞と句文集発刊を祝し

紫の香り編む手の温かく

健康である倅せをふと忘れ

濡れ落葉踏めば佗しき去来する

孫の齡繰り返し聞く去年今年

堺市 高橋千万子

書き損じくじが当つた年賀状

拇印では首もとぶまいしかと押す

酔っぱさを可憐にかくし梅の花

春よ来いもうかす汁もたべあきた

お茶がわり親娘でビール置こたつ

喜寿すぎて女まだまだ忙しい

風邪に寝て我が手に小さき束ね髪

逝つた子の年をかぞえる風二月

掘炬燵今年もなろう聞き上手

鬼は外 心の鬼をふり返る

お姑さんの背丈に合わず流し台

絵筆持つきれいな四季のめぐるよに

他人さまの目でみる△○□

風止んで辺り気になるかすみ草

退院に素敵な夢が見られそう

画用紙の外に園児の夢がある

キリストの布教師が来て街余寒

演歌には男女同権など知らず

時々は義理に逆い登る坂

消費税かからないから深呼吸

善男善女ばかりの吹き溜り

子が継ぐと信じて歩幅加減する

一生を語るに足りぬ秒針よ

島根県 錦 織 文 子

岡山市 川 端 柳 子

尼崎市 春 城 武庫坊

倉敷市 小 野 克 枝

歩調とる癖が抜けない膝小僧
人恋しうす紫の花を活け

京都府 都 倉 求 芽

家計簿を強行突破の冠婚葬

いそいそと花に水やる旅帰り

真似をするつもりはさらさらない鸚鵡

持てる国 大臣の使い捨て

新聞の値上げの仕方が気に入らぬ

呉市 林 野 甦 光

春の夢は見せたくはない松の雪

足弱にあと一階が愚痴になる

輪の外で同じ願いを持っている

皿盛の愚痴をパセリが笑顔する

悠然とつんぼ棧敷で春を待ち

島根県 西 村 早 苗

和解する嘘の一つが言い切れぬ

ジョンガラの三味も津軽の風に馴れ

焼芋を買う娘の連れにさせられる

春の風少女多感になりました

しみじみと話し春雨音もなく
米子市 小 西 雄 々

男運まあまあでした米をとぐ

火の掟 水の掟にある重荷

白足袋のこはぜも弾む祝膳

カロリーは目刺でとって古書を読む

水に浮く卵に情けかけられぬ

笠岡市 松本忠三

徳利の酒一合か八勺か

息子から仕送り泣かせるじやない

目ん玉の黒いうちはがどうする気

ソロバンがわたしの指に合ってます

それなりに理屈をつけて退散し

米子市 石垣花子

待って待って待つことに馴れ老いて行く

神棚にへそくり預けたのも忘れ

踏まれても足の温さを麦は知る

水ガメの水少しづつもれていた

ペン一本握って女強くなり

米子市 菅井とも子

おばあちゃんが来ているようで駆けて去に

大人びた便りに返事まだ迷い

頼られて自信ありそな顔をする

丁寧な言葉づかいで許される

お祭りでおレンジカード売っている

米子市 青戸田鶴

菜の花が咲くまで返事まっっている

畳替昔の新聞紙と語り

この流れブナの林をみなもとに

明日の日が読めそう枕かえてみる

ゆるしてもこだわりだけは溶けぬまま

米子市 田中亜弥

淡水化すすきもハゼもほっとする

霊柩車出合ってから運がむく
ポストある限り安心して住める

一人居も紋の重みは知っている

魔女めいた方が近所に一人いる

米子市 政岡日枝子

春の土笑いなしが盛りあがる

春の部屋で鍵が一つずつ醒める

しゃがんで聞くと鐘は哀しい音ばかり

深い眠りに嵌まらぬ様に鐘を撞く

望み通りに椿おちたに違いない

米子市 寺沢みど里

一夜明けて思いすぎしの顔洗う

夜が明ける枕の位置を正さねば

おしゃべりの味も加えた手作りパン

子を叱るすでに許した瞳の中で

まだ虫に食わす歯があり有難い

米子市 澤田千春

橋のない川にも一度舞いもどる

ころがって玉葱の芽が天を吹く

ここだけの話の渦に身をかわす

もう泣かぬ父の残した樹の下で

都市砂漠心の海を大切に
姫路市 人見翠記

盆栽と犬と話せば冷雨降る

辞書提げて孤独の戦また愉し

手さぐりで歩きつつけて光を得

アンテナを張りめぐらせて詩の種
都市砂漠色と光の下に棲み

箕面市

坪内紅葉

まな板の鯉になつて菌科の椅子

早々に雛かざりして縁を待つ

ちぐはぐな話がはずむお湯の中

いらぬ世話話して一人でおこつて

ためといひ怒り出すからとまらない

大阪市

大塚節子

ほろ酔いの童女となつて教え唄

京の旅今日はみんなが晴れ女

八十路まで四代生き抜く幸思ふ

現代も恋のお七は生きてゐる

平成へ昭和一桁遠くなり

高石市

浅野房子

平成の春に鰻のフルコース

うな重を前に説教ひとくさり

捕まえた鰻はいつか敵の手に

一族が集まると噂のその噂

春愁をもてあましてる恢復期

寝屋川市

岸野あやめ

婆さんの立ち話に西海岸などと

蟪蛄の斧かも知れぬ意地ひとつ

光背に似た肩書きが色褪せる

躓けば昨日の決意忘れそう

病窓に咲いた桜の散る早さ

和歌山市 福本英子

育児書の通り赤ちゃん咳をする

春夏秋冬話題の種にリクルート

双方で振つたと思ふお人好し

もやもやの税金結局払う羽目

税務署の声がやさしい申告期

気楽さに流されそうな二人つきり

一呼吸置いてよかつた仲直り

漬物がうまいそれだけ褒めてくれ

宝石の大きさ幸せにつながらず

喜びを見飽きぬ蝶と花時計

冗談を交えて妻の本音かも

糸を引く人が倒れた奴唄

右肩が何時も上つてゐる写真

老いらくの恋をたつぷり夢で見る

食べられてもうこれだけの幸せか

青虫も蝶もこの世の姿なる

広告を読んで週刊誌は買わず

あんぱんのような少女でやさしくて

病院のベッドで欲も得もなし

入れ歯はずして心ゆるめて夢まどか

天皇制とやかく言えど畝傍山

大和高田市

岸本豊平次

雑草の見られなくとも赤く咲く

自販機があつて一息ハイキング

建売りの窓が朝日を諦める

オートバイ麻疹に罹つたと思つとこ

宝塚市 丸山 よし津

有り余る知恵拘置所の門くぐる

錠剤を数え安心飲んでる

妻の腫が日々若やいでくるパート

雪解けを待つてからでも遅くない

四面楚歌故郷の水も甘くない

寝屋川市 柴田 英壬子

美容にはあらしコルセットをつける

ひざ痛は不肖の子かも春の冷え

沈丁花香る瞬間の気養生

日めくりの今日のひとこと胸に止め

冴えている人でせい肉寄せつけず

鳥取県 中原 みさ子

待つて待たせて恋は楽しいものですね

唇を許して春の野へ駆ける

おしくらまんじゅ温い仲間がいてくれる

ゴムの手で嫌味増ませる嫁だとさ

みな集まれ玩具の笑い声がする

奈良県 田中 紀美代

山ほどの女の話聞く勇氣

男の愚痴聞くと家出がしたくなる

気短かな夫が長寿の願かける

父の死(二句)

父ほどの度量はないが父に似る

若き日の父の姿の嶺に佇つ

岡山県 小林 妻子

寛大な老母の許しは忘れまい

雪溶けにどんどん流す冬のうつ

コンピュター平気で恐いことを言う

尋ねたき事あり思師の句碑に立つ

出征の御礼に木盃くれそうな

鳥取県 新家 完司

その角をちよつと折れると楽な道

星の降る村こんこんと水が湧く

尻尾振る芸ぐらいならわたくしも

ふらんすの鸚鵡はふらんす語をしゃべる

一時間前のことなどすでに過去

松原市 北野 久子

披露宴済めば義理を丸出しに

似顔絵を上手に描いた好かぬ人

腰痛も年も忘れてチヨコを買い

猫じやなしあなた以外は凭れない

鳥取県 土橋 螢

言うたらお終いありがたさが消える

みどりの日には夕顔の種蒔こう

唇に歌あいさつは春らしく

平成に啼く鶯もホーホケキヨ

美しい涙に春の陽はやさし

握り拳開いた力信じよう

岸和田市 原 さよ子

直送は産地のしおりも入れてある
苦しさを言うまい梅も見事咲く

操子先生を偲んで

微笑んだ師胡蝶蘭に包まれて

また来てなと言われたのにと残る悔い
師の柩句碑にも別れ告げていき

大阪市 藤 田 頂留子

バレンタイン彼氏と歯医者喜ばせ
天候異常天につばしたむくいかも

電柱の修理見上げて叱る役

打つ手まだ有ると議員の悪いくせ

消費税一円玉に陽があたり

守口市 結 城 君 子

春着の子ほめると後ろも見せてくれ

映像でみるブナ林の雪のよさ

人生の裏はのぞかぬ藪椿

節分の豆にもあった運不運

出世など念頭にない片えくば

和歌山市 桜 井 千 秀

本当のプロ葬儀屋の無表情

キンカンの種気前よく吐いて出し

身と蓋でまとめた話そつがない

物差して目先を計らないように

サラブレッドだろう胃潰瘍病んでいる

桜前線日本も広いなと思ふ

来客があるらし妻が掃除する

点滴と寿命根くらべが続く

脳細胞つまらぬことは覚えて居

被災地へ北斗七星きれい過ぎ

貴公子の内気な素顔みてしまふ

届かない思いに川を溢れさす

愛された記憶の中のとろろ汁

桃源郷母は囲炉裏の火を守り

もう先が見えてきました蝸牛

楽になることはいけないことだろうか
よう聞きや甘い言葉の裏表

渡り終って吊橋怖いものでなし

縦糸の貴方に添うて二十年

子と歩く双生児と歩く春の道

高槻市 河 瀬 芳 子

雪虫の舞うふる里へ置いた疵

律気さを買われて狂えない時計

煩惱が増える若くは無ければど

老い先の話が長く亡母の部屋

車座でひとの情けを分かち合う

羽曳野市 佐 野 白 水

リハビリの自転車踏んでも走らない

宇部市 平 田 実 男

松原市 佐 藤 藤 子

竹原市 岩 本 笑 子

年玉の返しは孫がみなもらい
豆を撒く鬼もおらない老い二人
散歩道老いの歩ゆるむ梅一輪
十周年歩みののろい亀なれど

岡山県 萩野 鮫虎狼

人生に入院という休憩所
軽快に走れ小春の車椅子
苦言を言うて婦長の目がきれい
老妻の欠伸正面から眺め
見舞客薬の宣伝して帰り

富田林市 松本 今日子

手拍子でうたえぬ歌も知っている
掌に乗せるとたわいない喧嘩
青春の汗を吸わせた日の帽子
責任が重く座布団ぬくもらず
一枚の絵葉書にある詩心

大阪市 吐田 公一

田を売ったゆとり指輪がまた違う
二度と逢うことない女と北の宿
逢いたくて逢いたくて逢う身のほてり
分類をすれば弱者に入る父
優しくも激しくもあり女川

富田林市 片岡 智恵子

春の水眩しい夢をみるめだか
結び目の凍ったままの愛つづく
追憶へ目玉うつろな冷凍魚

中流の意識へ行儀よいめだか
身に覚えあつて日記の白いまま

八尾市 宮崎 シマ子

消灯ラッパ鳴るのは午前二時になる
よその子に声をかけたら疑われ
お里の知れる苦労話はしたくない
朝寝して水道の水がやせている
濡れ落葉乾かす春がきつとくる

寝屋川市 稲葉 冬葉

春一番少し動いた亀の首
先輩に投げたジョークが届かない
プラスマイナス ゼロの答は伏せてある
振り出しに戻りたくない意地ひとつ
還暦の紅の朱さをいましめる

竹原市 森井 菁居

飽食の中で標的見失う
逆襲の思案がついた爪を切る
負け犬のジョークの裏を見せしめよう
勝負師の意地を知ってる棒グラフ

長女イギリス・次女スベイン

外国へ行かず甲斐性を羨まれ

和歌山市 神平 狂虎

飲み込んだ言葉と続く冬の旅
男の中にいつも雪降る坂がある
雪に埋れた花はそれでも炎えていた
冬と訣れるために少うし背伸びする

雪解けの水よ一緒に歩こうか

大阪市 古川 美津枝

還曆をまたず幼児になるなんて

降らんのー母の手編みの一人言

あほ言いなそれで片づきや苦勞せん

嫁と孫よかつたでーと雪まつり

点滴の手もとみつめる上手下手

静岡市 蘭 田 獺 杳

人だかり中で茶碗屋芸達者

雪道に二の字の跡が見つからず

彩のない風が好みの奴唄

殺し文句一行書いた箸袋

お隣も向いも抽せん当るのに

和歌山市 後藤 正子

猫を抱いていたから少うし氣を許す

言い訳をしたくなかつた歩道橋

長いあいだ閉じたまんまのオルゴール

鏡の中の涙見詰めたことがある

木を植える季節を待っているわたし

熊本市 永田 俊子

一拍ずつ人からおくれる宵つ張り

美しく誘ってまきこむ花の渦

木から落ちない程度で生きている

分別を捨てよと花が散って見せ

出世双六途中で定年来てしま

鳥取市 両川 洋々

唇を与える踏み絵だつてある

春や春明日のセリフを妻と書く

どうにでもしなはれ妻がクサリ解く

喪の帯が解けるとおんなきつと翔ぶ

鳥取県 松下 かつみ

からみつく落葉お前も淋しがり

追伸に金太郎飴がいつもある

外灯のそこだけ雪が降り止まず

泣く場所がほしくて田舎捨てられぬ

倉吉市 渡辺 独歩

明日の身はどうあれ三年日記買う

路地裏を流れる霧に聞く噂

春の水水車小屋までまっしぐら

病巢を問えば告知許されず

寝屋川市 江口 度

落ちそうな学生が来る天満宮

腫れ物のように左遷は迎えられ

終電のベルの長さへ駆けている

沈丁花そろりそろりと春にする

高知県 小澤 幸泉

病院へ行った帰りに飲んでくる

ギリギリの預金引き出し飲むお酒

自分史という一冊の本抱いて寝る

ハーモニカ新聞少年走り去る

出雲市 河原 恵美子

虹のいろ数えて今一人です

裏道はコートの衿をたててから
条件を一つにしぼり仄めかす
木綿地の座布団カバー秘めた胸

奈良県 長谷川 春蘭

太陽が神の山から登り初め
数知れぬ祈願の絵馬に春寒し
無人駅さざんかだけが咲いている
冬の月 父と母との旅帰り

鳥取県 森田 布堂

防空壕で産まれましたという杜長
生かされて生きてしみじみ古稀の春
軍歌とは悲しき音符敗戦歌
鏡掛けもう色あせて孫の守

土佐市 中内 朱坊

平成の疑獄となるかりクルート
ばら撒きの一億円でもめる過疎
失政を金で償う保守のエゴ
福耳の愚痴を余生は知っている

和泉市 岡井 やすお

天と地と人の恵みを享けて喜寿
下取りのテレビへ永らくありがとう
香水の匂いで判るお人柄
おいしさの二分の一は器から

茨木市 井上 森生

歳毎に大根煮きがうまくなる
そのまさかまさかの人に嵌められる

ワープロに風流ことは教えこむ
盆梅の影に教えを乞いにきた

八尾市 山下 美津留

筋書きに無い愛人がころげ込み
マスコミの自粛ラッパに踊らされ
演歌調お経をあげに僧が来る
表彰状待ってる家に帰り着け

島根県 松本 はるみ

逢えたのに何も言えないさくら草
ショートカット ブラッシングの低気圧
神さまも私も眠い花の中
風うらら春の霞のもの想い

島根県 石田 清泉

飽食の猫にふざけているねずみ
再起不能の友ありすぎ鍋煮えたざり
渡り鳥義理人情を心得る
木枯しへ明日を信じて露の臺

島根県 北川 民子

床の間で温室咲きの極楽死
折り鶴が翔んだ多残りのこぼれ雪
草原に寝ころび命たしかめる
節分やそうかと風呂につかっている

弘前市 斉藤 劾

出勤のポケット胃薬忍ばせて
胃潰瘍にされてしまった競走馬
大寒の赤い苺は嘘つきで

雪穴に落ちてしまった野兎だ

大阪市 黒田真砂

北風に心がうずく懐手

たがゆるんだ儘の夫婦ですれ違い
背く子を抱きしめて来たうすい胸
飲んでよし飲まいでもよし夫の酒

米子市 小村てい子

見解の違いを笑うロバの耳

自転車のペダルは強い味方かも
まる腰で消える雪だるまを愛す
この縄目亡父の手垢つき足そう

貝塚市 行天千代

受験の子 今年は無くて気も楽に

若草も土の温みに背のびする
花の種色々有りて庭せまし
四代の御代生き抜いた幸福よ

神戸市 仲 どんたく

寒もどり夫婦の咳のデユエット

立春の匂い見つけた羽繕い
元号が変って歴史のうしろ髪
草いきれ我青春の中に立つ

黒石市 相馬一花

先生に風邪を移され欠席し

緊張の次は欠伸また欠伸
ネクタイの男にまたも騙される
じゃがいもがナス科の意地を主張する

五所川原市 加藤彩人

暖冬へ篤農夏の水案じ

暖冬へ熊の子眠い目をあける
暖冬異変津軽の唄の味が死ぬ
暖冬異変どじょう たにしに春の歌

東大阪市 森下愛論

オロオロとオロオロと蟻一匹いる

動きもにぶい大寒のアブラ虫
ダイエット ベルトの穴を一つ詰め
竹ヤブのふくらみ春の味がする

神戸市 山口美穂

春を待つ老母のつぶやききく炬燵

春眠へ目覚し無情確と鳴る
耳の遠い老母の返事が気に入らぬ
騙されてあげようイヤリングが揺れる

大阪市 西森花村

初日の出 長屋を向いて気を使い

天も地も御先祖の国大八洲
年数の割に明治の美男美女
アーメンも南無阿弥陀仏も蝶の耳

富田林市 田形美緒

健康の幸踏みしめてゆく凍土

鉄腕アトム君を育てた歌でした
みちづれを歌うあなたが居てくれる
長いこと御苦労でした粗大ゴミ

羽曳野市 榎本吐来

別れ道だんだん謎が深くなる

マンガ読む男に女寄りかかり

消費税反対だけで飯を喰い

胸に抱く達磨が少うし瘦せてくる

鳥取県 盛山盛桜

弥勒菩薩の唇に恋してしまふ

嗅覚が麻痺し美人の鼻で居る

ひたむきな顔春に向く春に向く

真ん中の石でつぶてに擱まれる

大阪府 坂口公子

おぼたりあんにならぬようにと娘の叱言

野良犬に餌を与える愛と罪

早春の山の鬨志の痛い程

夕景を皆に見せたい里の駅

寝屋川市 宮尾 あいき

傘さしかけてあげたいお方が若すぎて

うちの梅人目ははかる程に咲き

一円貨ひろうて欲しいかよく光り

肌着ばかり乾して朝陽に気がねする

羽曳野市 田中隆二

旗二本持ってどちらか決めかねる

実直に働き余裕ないくらし

一升瓶さげて仏に会いにい

毒舌のトーンが落ちた三分粥

和歌山市 内芝 登志代

腕白が社長となってやってくる

かあさんの人柄いつも客がいる

鈴ふって自分のこころ正すよう

平成になっても嬰鑠 鯨尺

和歌山市 福井桂香

春の街ピアス取変え風に乗る

ビール一本ほどの饒舌さ

的それた矢にもそれぞれ持つ主張

直訴とは大げさなこと宣うか

鳥取県 林露杖

凍てる日のなくて平成春立ちぬ

鬼は外貧乏神も連れて行け

闇僚に巢喰うコスモス症候群

再審無罪真犯人は誰が裁く

今治市 越智一水

千大根貧しきままにそり返り

朝シャンでルールをこわす娘がひとり

女の子男言葉で恋をする

文庫さんを悔む

巨星落ちて大寒に身がひきしまる

柳井市 弘津柳慶

下着脱ぎなさいと娘に叱られる

寝酒の肴を仏壇から頂戴す

無沙汰の友から死亡通知来る

兄は只戦地を笑い話にし

町田市 竹内紫鍔

六十年の座標 国病み我も病み

またよこすシルバー企業の流れだま
隠し芸見せず囑託消えてゆく
受けて立つ中でストレスとる電話

大田市 藤田 軒太楼

迷惑は承知と迷惑もろに掛け

立春へゲートボールにこる余生

勝てば酌み負けて反省やはり酌み

コップ酒男を捨てた軽い味

岸和田市 清野 こう

操子先生の死を悼む

師の訃報思わず受話器にぎりしめ

眠るよに花に埋れた師のひつぎ

善意の灯ともしつづけて逝った人

天国へ逝く母さんの太い杖

羽曳野市 吉川 寿美

ジュサブローの念いに人形蘇生する

砂時計かるうい約束してしまふ

歩道橋風の情けに溺れまい

風に彩塗ろうぬろうと春一番

弘前市 真喜内 實

かさね皿はたらき者が上に居る

素顔では鳩とおしゃべり出来ませぬ

筆いつも真剣勝負と知っている

ケーキより美味しい言葉ありがとう

静岡市 渥美 弧秀

影法師重なって行くわらべ唄

風邪に寝てラジオから知る春の音
熱燭に本音を話す故郷詠
詩を詠みピアノ弾く身に老いの幸

高知県 赤川 菊野

釘を打つ指が嘘だうそだと泣いている

欠点をトレードマークにして生きる

平成を生きるわらじを履き替える

夢たのしアランドロンと握手する

七尾市 松高 秀峰

納得がゆかず法話聞きにゆく

黙ってる父が一番うれしそう

逝く序列近いと母のお念仏

エプロンに母の情が包まれる

諫早市 原田メイシユン

交通安全お守り飲酒運転には効かず

易者と政治家似てるところは嘘ばかり

結び目がよじれて家裁でほどかれる

口開けた寝顔に惚れたのを悔やみ

松原市 小池 しげお

教育勅語初めの方も忘れかけ

落人の里がまもった柿の種

温泉場男の下駄はそれたがり

警察が首をかしげるしゃべり過ぎ

大阪市 井上 白峰

石橋を叩いて悔いを積みあげる

嬉しくて鳴いても鴉嫌われる

これ内緒これは内緒と風に乗る
身ゼニ切り飲んで気兼ねの酒煙草

大阪市 中西 兼治郎

墓あばくの便利な考古学

七十五日ぐらいで消えぬリクルート

遠いのに一番に来た形見分け

善になり悪にもナイフ使いよう

東大阪市 崎山 美子

スタートは思わく胸にひめたまま

迎え傘来るはずもなし雨やどり

薬包紙とべる日待つ千羽鶴

双眼鏡鶴の安否を今日も追う

大阪市 北 勝美

親しめる男の顔が隙だらけ

生き字引き社長の声に似る電話

バス停に熱いコーヒの紙コップ

一ヶ月こんな早い趣味に生き

竹原市 石原 淑子

春光や恋知り初めしサクラソウ

有名も無名も同じ命です

忙中閑 万葉集に洗われる

窓口で老いの重さを受け止める

有田市 松井 かなめ

おばあちゃんも年よ成人式の孫

めでた事カレンダーより曆見る

ランドセルに試験地獄が待っている

姑の家伝の料理落し蓋

唐津市 浜本 義美

白魚の築張られいて水光る

旅支度いそいそ鴨の羽づくろい

ローカルの駅で訛りと魚籠が乗り

流石プロ葬儀屋さんの演技ぶり

唐津市 浜本 ちよ

この子らの為に母親夜叉となる

愛さめた日から女は太り出す

節料理亡姑のしきたり守り抜く

盆正月亡姑早くから仕度した

河内長野市 井上 喜醉

合格の印が欲しい絵馬の夢

偏食が病いの道へたどり着き

大臣の首が椿に笑われる

悲しいがコンピューターに見捨てられ

唐津市 山口 高明

糸図で見る御先祖様も足軽で

腹痛で休んだ御蔭事故回避

平成元年みんな日に成りましよう

筆一本山家の里で世相斬る

姫路市 都里 遊光

切ない恋をしている顔で踊ります

遠慮深い人と旅して肩がこり

星が好き貧しい時のもらい風呂

暖かい一瞬の夢寒牡丹

姫路市 大原葉香

大根の白さに迷いふっ切れる

老病死又順一つくり上がり

鶏鳴の途絶えた里に排気音

背のびして虹許り追う空しさよ

出雲市 石倉 芙佐子

帯メをさび朱に決める浅い春

花電車好きで乗りたいわけなし

めぐり会い遠い昔が堰を切る

さよならを息子に言うて味気ない

榎原市 岩井 本蔭棒

育児には欠かせぬ老いのアドバイス

雪解けへエルベの誓い生きかえる

男女みなごくりと唾を飲むシーン

甘栗の袋の嵩にある作意

姫路市 中塚遊峰

南天を鬼門に植えた寡婦の城

一病をなだめすかして又二病

宿題の臨書は読めず李白の詩

師の極意ひそかに見てる青い墨

高槻市 川島 颯云児

冗談も言えない人が傍に居る

子も巢立ち後は亭主と猫二匹

ここだけの話を風に盗まれる

あるようで無いのが金と勤め口

広島県 藤解 静風

ヒフティーヒフティーお茶は自分で淹れなさい

造花ふと自分の素顔見失う

Xデー子感ないまま来て欲しい

図書館へつづく野菊の咲いた道

鳥取県 羽津川 公乃

嘘一つ埋めるに罪を塗り重ね

嫁ぐ日は晴と決めてる母の愛

陸橋が不気味に見える老いの足

おもちゃ屋の関所は祖母の泣きどころ

姫路市 丁坪 サワ子

中流の踏台足を掬われる

耳栓が儲け話を聞きたがる

役どころ持つと呆け風よけて吹き

寒い日があって恵みの温かさ

尼崎市 奥山 美智子

わくわくと出費のかさむ春である

知らんぷりしてる心がわからない

なに不自由しない暮らして目刺し焼く

あなたならと猫を相手の雨の午後

出雲市 板垣 夢酔

カクテルの色に魅せられ女酔う

味方からつぶてが飛んで来た不覚

最後まで騙しとおして欲しかった

出雲市 吉岡 きみえ

完結編されども月はまるく出ぬ

あついうちの鉄が素直に曲がらない

思い出を美化してくれぬ十三夜

倉吉市 渡辺 菩句

枕叩いて枕に頼む夢はじめ

柱時計も休ませているお正月

なんじやらほい大寒なのにホツカホカ

倉吉市 野中 御前

ポイ捨ての罐は不服な音で鳴る

水葬の金魚きれいな虹になれ

日が暮れる一人の膳に背を丸め

高知市 北川 竹萌

逢いたいと楽しさ詰める花便り

郷土勢今年は早い折り返し

声かけて溶け合っている陽のベンチ

堺市 柿花 紀美女

枯葉燃す煙に揺れて明治の父

梅一輪平成へ時流れ出し

遠くから見れば温そな団地の灯

豊中市 上田 登志実

バーゲンのあとは春物展示会

欲望も捨てた男は魅力ない

シャープペン忘れては買ひまた落とし

鳥取県 谷口 次男

ビール飲むああこの美味さヨガのあと

珍しや政治屋さんが本音吐く
お菊さん電卓を手に皿数え

米子市 白根 ふみ

蠟梅よ糞まじりに消えないで

なれそめはその昏が光つてた

自己主張甘えることもできぬ猫

和歌山県 天満 三千代

地下足袋がちゃんと履き主待っている

手をたたく夫に一日あやつられ

時世とや宝の筈が余剰米

和歌山県 山川 克子

バーゲンへ晴れぬ心を連れて行く

会場で何しに來たか又聞かれ

堪え抜いて生きたおんなのしまい風呂

大阪市 塩田 新一郎

雪達磨座ったままで消えてゆき

音も無く枯山水に春の雨

先帝に名残りありけん大相撲

島根県 藤原 鈴江

仲の良い夫婦で話題がたんとある

病軀なお生きたし生きたし春の川

温い卵に抱かれて茶椀蒸し

大阪市 寺井 東雲

終列車魚の臭い生きている

親指が壺を押えて笑い出す

血圧が高くなっても湯は沸かぬ

静岡市 永倉 僕 川

約束の駅のベンチに居る他人

八起目も摺めぬ儘の影法師

川西市 松本 ただし

幸せですか意地悪な人に会う

掃除器も吸ってくれない粗大ゴミ

M寸の年金で飲むワンカップ

いたわりの此所から先は馬鹿な親

守口市 森川 まさお

指のけが特上寿司を買うチャンス

白い蘭満たして神と対話する

蘭と菊あふれて息が詰まりそう

風邪の子の従順すぎて気にかかり

納得のいかない靴の減り具合

その人に似ない戒名ついてあり

乾杯の時は味方の顔をする

蛇の夢見た金運を信じよう

福の神通りすがりに寄っただけ

ひとことで心足る日の母娘像

朝シャンでペダル踏む娘へ風光る

高層ビル覗いて冷たい風に逢う

肩の凝りとれたぞ昭和のコート脱ぐ

大喪の日も休まない小商い

節穴を覗くワタシの半生紀

昇り坂けだるい足は齡を踏み

菊人形小袖の裏を出して見せ

美しい声が揃った夏座敷

岡山県 二宗 吟 平

楢山へ相談に来て捨て切れず

看護婦が粧う母の死に化粧

単純で蛇は絵皿に描きづらし

陸橋を勞り合うて無人駅

リレーするようにお見舞い腰をあげ

裏表八方美人も芸のうち

岡山県 岩道 博 友

刺身よりおでんが美味しい冬の客

遠くから我が家の客と知った犬

楽しみは無料バス使える年になり

高槻市 竹内 花代子

限界に来てても妥協の道を閉じ

新任の挨拶状で誤字を読む

虚偽の礼帰りに選挙を言うて去に

和歌山市 青枝 鉄 治

昭和史へ汚点残したりクルート
軽くとも税の重みで一円貨

二度の職覚悟していた固い椅子

茨木市 堀 良江

粗大ゴミなどと私は申しません

酔い醒めに忘れたいこと甦る

けんかしていつも泣くのは姉の方

和歌山県 寺 田 裕 美

おおむしが明日へ明日へと噛むキャベツ

大根の花の愚痴から目をそらす

野良犬がひるの長さをもてあます

岸和田市 古 野 ひ で

雪コンコお好きな師の訃へ雪コンコ

祭壇の灯も揺れている哀しい日

春の花買って心温める

仙台市 川 村 映 輝

長寿者として音頭とらされる

作詞者の意にそわない評をされ

富士登山に意欲二人で一六一

和歌山市 玉 井 豊 太

下手な字で書くから絵馬は横を向く

背負うくせついで見合いに出たがらぬ

妻の目が無事を祈って送り出す

大阪市 富 岡 温 子

昭和天皇の平和伝わるみどりの日

底値にも見向きもされぬ防寒着
迷い道冷たい雨が加勢する

岸和田市 芳 地 狸 村

北風に耐えてばかりのかたつむり

わたくしと違うわたしが居る写真

窯出しの志野の茶碗に春の彩

海南市 三 宅 保 州

耐え忍ぶ女が編んだ導火線

棒切れも栄えた枝の過去がある

無駄話だから生き生きしてる妻

豊中市 辻 川 慶 子

おくれ毛のうなじが匂う紅椿

鬼ならず私も夜叉の面をもつ

眼ざめればみんな嘘です夢芝居

和泉市 西 岡 洛 醉

年金の坂道妻の愚痴も連れ

カラオケに男の紋章捨てた声

四月馬鹿になって正直橋渡る

吹田市 茂 見 よ志子

定期解約使途じんわりと窓の顔

カラオケの無い宴軍歌でもりあがり

アプローチ保険屋一も二も賞める

富田林市 新 開 千代女

服が地味だから口紅赤くひく

ふかふかに干した布団に生きている

最後まで聞かずにわかる親の勘

米子市

川上より子

肩書など要らぬ夫の温い肩

岡山市

山本玉恵

暖冬の山描く朱を買い足そう

さわやかな風が添削した噂

がまんした数だけふえていた味方

東京都

吉川一郎

変化球受け損なつてばかりいた

境港市

細木歳栄

暖衣飽食ポディラインが意に反し

指切りを寂しがり屋が放さない

島根県

松本文子

恥じらいの彩から暮春になる

鳥取県

さえきやえ

愚を捨てる旅なら早い方がいい

健康の証し献血手帖持つ

新鮮なレモンに負けぬ今日がある

倉敷市

田辺久六

親馬鹿の丸い言葉にそむけない

米子市

金山夕子

治外法権二階は全部子供部屋

よく喋る女と逢えば風邪をひく

違反切符を貼られただけの罪意識

弘前市

小寺花峯

わたくしに頼む人ありありがたし

和歌山市

山田高夫

旅先のグルメやっぱりソバにする

幸せの範囲に入る口喧嘩

正方形の形が狂う子の反抗

鳥取県

土橋はるお

おじいさんが信頼してるおばあさん

出雲市

竹治ちかし

無人駅に絆の花が咲いている

だまし舟に乗った私は悪くない

昨日姑に打たれた釘が抜けません

涙腺の奥に古里あり母が居り

長過ぎる生命線にある不安

流行になでしこもいる肩パット

奈良県

宮川古都路

節分に身代り不動札かえる
遍路また百の浄土か段のぼる
えびす橋蟹の看板道しるべ

出雲市 久谷 まこと

遮断機の向うの笑顔誰だろう
平成も歩幅変らず過ぎてゆく
春眠を許してくれる古時計

鳥取県 江原 とみお

逃げ口を作ってやって子を質す
連れ糸解くのはいつもおばあちゃん
離婚印長い話のまん中に

西宮市 瀬尾 六郎太

親子孫一目で判る瓜三つ
恒例の箱根駅伝いい刺激
巳の年は東北東に恵方あり

加賀市 細呂木 魯木

仕込まれた芸にアルファの猿の知恵
父の座を継いで適役でない気性
村おこし探せば空気の美味い里

羽咋市 三宅 ろ亭

童心に還りS.Lの停車待つ
今日もまた出過ぎた杭になっていた
おらが春少し目方が減ったかな

出雲市 園山 良子

冬の夜のともしび戦語らない

山の鳥一羽で来たのが気にかかり
きつと読むいつか読む本積んで初春

岡山市 井上 柳五郎

定年後家庭のレール妻が敷く
徒食ではないよと老いの自己主張
刃渡りの長さたのんで不覚とり

大阪市 板東 倫子

本人がボケてまへんと言う救い
お茶と本あればお金は要りません
紫煙吹きいきま女をおだてとく

吹田市 栗谷 春子

旧暦は春に入りけり酒饅頭
二度と見られぬ夢よ私の指定席
大丈夫たかが私の記憶など

寝屋川市 平松 かすみ

お野菜のラップと妻のお化粧と
パンク修理最敬礼をして帰り
原因は風邪かテレビか偏頭痛

岡山市 矢内 寿恵子

欲はまだまだ写経千巻果すまで
水割りの底で誤解はまだ溶けぬ
割れ鍋の蓋は二人の愛でとじ

鳥取県 津村 八重子

尾もひれもつけて善人たたえられ
昭和史を悲喜こもごもの詩でぬる

敬老というありがたい柵に住み

静岡市

安本晃授

耳寄りの電話に脆い片えくぼ

力むほど掌からこぼれる砂の愛

ひと刻を仏と語る平和主義

唐津市

筒井朴竜

悲しみは口を閉ざした白木箱

食扶持を律義に稼ぐ弁当箱

出雲市

小白金房子

栄転へ漬物石の重み抱く

健康な嫁で我が家の灯が明い

岡山市

池田半仙

今日一日るるん気分さすみくじ

へそくりも家計簿しかと合っている

岡山市

花田たけ志

祝い樽提げてその気の左ぎき

ふる里に雪のあの日の道が無い

鳥取県

乾喜与志

三宝に載せ大根も尊げに

値上げた地上げ屋土にけつまずき

大阪市

宮下とし

饒舌の主婦にセールスカぶとぬぎ

売れた雛どんなお内で暮すやら

米子市

光井玲子

華やぎをすこうし残し落椿

十指みなわたしの味方ありがたや

鳥根県

小田川智重子

数学は解けぬが器用な指を持ち

陽あたりが良すぎて困る台所

寝屋川市

堀江光子

近道にいそぐ裏町ホテル街

負けそうになると味方のくるドラマ

河内長野市

植村喜代

張りつめた風船爆ぜる心配し

通じ合う心は戦争越えて来て

鳥取県

田村きみ子

男結びすんなり解けるコツがある

六十六大正琴を友として

大阪市

山田妙子

未来図は貴方の色で塗り潰す

検診へ十年位保障され

岡山市

直原七面山

値切って買わされる

気配りの酒を酌ぎこぼし

お願い

川柳塔・水煙抄への投句は、選句と整理の都合上、必ず「川柳塔用箋」を使用、締切日(毎月15日)を厳守してください。地名は、市の場合は市名、町村の場合は府県名を書き、雅号は、姓も明記してください。(編集部)

自選集

工藤甲吉

平成へ昭和の靴を穿いて出る
人間だから一短も許される
雑草といえどそれぞれ氏素性
盃を持てばエンジンすくかかり
過ぎし日の白い美容も齡をとり

大矢十郎

内閣も名付けがうまい緑の日
難一つ抱きこの家も灯が揺れる
無理偏に拳骨だった兄も呆け
本を読むように自販機札を言う
中国も人民服を脱ぎたかろ

小出智子

肩を揉むぐらいの愛になつてから
主婦であることは忘れてない束子
えらいことになつたと花を活けながら
桜咲く頃は留守番でもしましよ
騒々しくて好きな二月の絵が描けぬ

小林由多香

絵馬吊つてもう合格の顔でいる
まぶしくて天など向けぬもぐらです
戦友会 軍歌の好きなやつばかり
猫の恋春を外泊して回り
おや今日は祖母が口紅塗っている

山内静水

ひたすらに馬鹿とあほうと言われよと
奥行きの深さが見えて来たあかり
万雷の拍手に鬼が泣いている
叱られました娘の下駄ひっかけて
けんもほろろ窓から首出して

金井文秋

足腰の痛みだましている懐炉
文字はもう書くものでないワープロ派
死神を時々連れてくる炎
いい女になりたい勤めやめません
恋知った日から日記に鍵が要る

正本水客

あごのせて枕は雨を聞いている
素人離れしてると軽くあしらわれ
もえてきてふつと優しい眼にもどる
渡り鳥 流木のゆれ楽しんで
笠の台がとぶと笑っているのは男

八木千代

躁から鬱 妻の暦は幅広い
うすいカーテンで泣き寝入りもできぬ
石を置かねばわたしの地図に風が吹く
溶鉱炉の隅に炎えのこりの私
不意討ちの癖も暦は持っている

児島与呂志

薔薇園のばらは不自由かも知れず
コーヒーの嫌いな男の遠回り
妻が背をすこし伸ばして薄着する
天皇の崩御で悔む善行証
直立の度に己を自尊する

本田恵二郎

八十路坂ステッキ連れて漫歩する
宿下駄を履くとのどかな顔になり
未完のシナリオさしてどっちへ進もうか
苦も楽も丸めて呑んで知らぬ顔
南風瀬戸の島島背伸びする

水粉千翁

ゆつくりとわがものにする下り坂
明るさという取り戻すことも出来
水透けて深さを語り尽くせない
鐘楼に諸行無情の重い雪
うたかたのあの日へ会える雪化粧

野村太茂津

勝った負けたと炬燵 睡魔におそわれる
八方破れで高がたかがと矛取め
丸抱えされよう何でも聞きましよう
一人が添うひとりは何故か小石蹴る
呆けたなと思う地下街贗の川

月原宵明

河は流れて昨日のことは語らない
反論の日のネクタイはしかと締め
善人の妻は少うし翹びたがる
年寄にそれぞれの癖 日向ぼこ
シクラメンの隣で猫がよく眠る

有働芳仙

出世には遠い瞳が澄んでいる
ストレスを買物籠へ頼張らせ
おじいちゃん孫の魔法によくかかり
その辺の嘘がつけないお人好し
平成へ拒否反応の血をなだめ

藤村 女

立春の風が運んで来た噂
小春陽ころころ想い出を包む

日日好日そんな味するレモンテイー
筆まめですねとポストが微笑する

手を握るだけで炎やしてくれぬひと

藤井 明 朗

春よこい花に酔い事ばかり
欲望もほどほどリクルートが教え

頭脳犯罪多し国民も自衛策

平和に酔うて罪の意識を忘れ

いい友に恵まれ幸せをもらう

黒川 紫 香

出来たての句集ブツブツ言っている

春や春私の家はむらさきに

大正のロマンを憶う華宵展

六甲は夕焼け明日も出かけよう
吠えた犬帰りは尻尾ふつてくれ

阿 萬 萬 的

高原暮色芒の穂先だけ白く

残月が絵にする一軒家のけむり

冬枯れへ鋭い鷺の目の光り

雪白く湖北まだまだ寝ています

海峡有情雨には雨の詩がある

第十三回 全日本川柳大会

日時 平成元年6月11日(日)午前10時開場

場所 日昇館ホテル(長崎市西坂町二〇一)

宿題 第一部(事前投句) 5月10日締切)

「男」 小林 一声 選

「つなぐ」 森本 清子 選

「旅」 池田 可 宵 選

投句 5月10日必着で、35×18cmの句箋一枚に

一句記入し、投句料一、〇〇〇円(定額小為替、

現金書留)同封、〒五四二 大阪市中北区谷町

七丁目一三九 新谷町第二ビル二〇六 日本

川柳協会大会係へ。

宿題 第二部(当日出句、締切正午)

「再会」 高橋 春 造 選

「天気」 亀山 恭 太 選

「高い」 蔵多 李 溪 選

「祈り」 高谷 梵 鐘 選

会費 二、五〇〇円(昼食・記念品共)

主催 日本川柳協会

川柳の群像

泉

淳夫

東野 大八

つばくらめ都會の河は濁りゆく
夏野炎え子らの機銃の鈍く光る

に近寄りすぎてはならない。適當の距離を置いて、作品全体から醸し出されてくるものを

蚊帳の顔小さく母は秋を待ち
如月の街まぼろしの鶴吹かれ

全身で受けとめなければ、彼の世界にはいることはできない。

如月の野を馳けゆきて戻らざる
雪の深さに沈める壺が音もたず

淳夫さんの作品は風韻の詩である。しかも徹底している。作品のきめのこまかさは、彼の天与の資質から来ていると私はいつも思っている」(『風話』序文鈴木九葉抄録)

『平日』と『風話』のそれぞれ最初の三句の対比である。読みくらべて一番目立つことは、『風話』において、淳夫さんの芸術至上主義が一段と徹底していることである。

合同作品集『藍』(昭60)の書評を書いた時、淳夫さんの作品に触れて私(九葉)は次のように書いた。

「淳夫作品はいつも人の好みの顔縁の中にある。だから彼の作品を鑑賞する時は、作品

の文語川柳である。字余りもときに気にせずには作っている。格調を尊び、感興の高揚を崩さずに伝えようとする作風が、文語を採り入れるようになったのだと思う。多少の屈屈さを感じる時もあるが、すでに確かな淳夫氏の作品の基調を成している。字余りもまた

川柳語法、約束から、感動の純粋さが欠けるを逃がれようとしているのかも知れない」

右は淳夫の第一句集『平日』の房川素生の序文である。淳夫をよく知る素生の八頁にもわたる序文は、巻末の椋元紋太の跋文とともにしみじみとした知友の愛情に溢れている。

この句集は、ふあうすと誌の名編集人である出岡竹夫のレイアウトで、叢書判の表紙は麻布で題字は朱、見返しはブルートーン。著者とこの装幀者の息の合った句集作製は半歳を要したとあるが、句集そのものの出来栄は数多くの句集本中の名句集に作り上げている。

句集題目にふさわしい淳夫作品は、「彼が常に川柳文学上、尊敬の頂点におく名作家大山竹二の主張した『生活川柳』の意義と一致している」(片柳哲郎)

素生の序文によると、博多ッ子の淳夫が小倉に住んだのは戦後間もない頃で、三人の子と愛妻に、七十の坂にある両親を持ち、水産関係の職にあり、漁夫、漁船、漁臭にも詩心を寄せて倦まなかったという。

喫い捨てて貨車押す肩の位置決る 淳夫
子と友になる日もう幾とせと想う
七十を越えし父母持ちひとにいう

妻の頭に上厨燈点る十三夜

「淳夫と竹二は仲がよかった。淳夫が神戸に住んでいたらとおれがいうと、ふあうすとももつと面白くなっていますよと竹二が応えたことがある」(『平日』紋太跋文より)

泉淳夫の著書目録は、第一句集『平日』(昭40)、第二句集『風話』(昭47)、第三句集『風禱』(昭62)、戯作句小冊『女絵師』(昭40)、戯作句集『楽屋酒』(昭53)、題詠句集『市井逍遙』(昭56)、郷土史句集『博多祭事記』(昭58)である。第一句集『平日』に、著者略歴を付けている。篤実な彼らしい配慮である。

「本名太郎・明治41年2月25日福岡県博多に生る。職業若く水産業界に入り、60歳で眼前にこの道に果つる日を信じている。柳歴昭和11年番傘同人安武九馬に師事し同氏主宰の博多番傘会に倚る。其後、当時九州に唯一人のふあうすと同人であった原泰治氏を識り、その清新な句風に惹かれ指導を得つつ昭和13年よりふ誌に投句。昭和23年同人となり今日に至る。師系安武九馬、椛元紋太、房川素生、三条東洋樹、鈴木九葉、故大山竹二、故釜永睡花の諸師。なお渡辺青吉(福岡)、銚谷京糸(日田)両氏には、初心期に文芸一般に亘り作句指導以上の教示を受ける」

淳夫は昭和43年ころ、ふ誌第三雜詠欄『新

絞抄』の選者をつとめた頃の所感がある。

「ふ誌が第三雜詠欄を作ったのは昭和13年ころで、この欄は人情の「個」から全へ移行する大切な運動であった。私も当時若く、新詠集『移峯閣』に拠り、抒情をこよなきものとして生命をかけたが、竹二、睡花両師の指導は厳しさの一語に尽きた。(中略)

訴える心との対話がよかつた時代から、急速な文芸全般の変貌は、見えないもの、きこえないものとの対決を強いられるようになりそこから現代川柳の多岐さが始まったといえる。理知に形づくられた比喩の世界に難解さを感じて立ち止るときもあるが、選者は否定するものがあつてはならず、作家たちの出会いを通じて識ることを深めてゆくよりほかにはなく、改めて私は竹二を目標として、現代を悩む作家たちと新しい美展開に第三選者の責を果たしたいと希っている」(『川柳平安』)

句集『平日』の後章に「課題一郭」があるが、これはふ誌にも発表した「私篇柳多留」に関連している。彼のいうこの種の戯作は、ふるさとの地や、そこにある父母妻子への手放しの人間回帰の憩いの遊びである。デッサン力の冴えと素材への眼の確かさは、戯作集『女絵師』『楽屋酒』『博多祭事記』によく示

されている。これらのミニ本の前二誌は、門下であり親友である平田のほるの作製にかかると、彼は『楽屋酒』の跋で、『平日』に併せ『女絵師』を別冊に付し、東京の大本笛我の手で安藤鶴夫、本牧亭石井英子席主に贈ったところ、「大へんな才能だ」と激賞され、近世庶民文化研究所主宰の岡田甫も、芸と通にきびしい淳夫の分身に驚嘆したことを記し、「消えゆく読み本として書き続け、興到れば一日に八〇余句」の淳夫の余技の確かさを賞揚している。

鳥追のふるいつかせる括り頭 (楽屋酒) 江戸中を白い夜にする芒売 (〃)

「写実に始まり私の伝習は心象作品を望んでいるが、写実のもつ具象性と、心象のつくるゆらめきをどう結ぶかを念じて現在があり「見える」もの即ち「在る」が句に生命を与える信念に変わることはない」(『風禱』あとがき)

喉疾患で声帯を失うかわり生命を得たと訴えた淳夫は、第三句集『風禱』を出し、昭和63年7月19日没・享年80。淳徳院釈惠朗居士主宰する藍グループ(創立40・8・35号)の遺作

正に河童瘦鬼のわれを歩かしむ 淳夫
鏡中の瘦鬼よ亡母が来ていたり 〃

★次回は「尼 緑之助」

俳風柳多留廿六篇研究

(四十丁～四十二丁)

684 くつ冠髪ゆひ足の爪を取り

大屋「くつかぶり」は「くつかむり」ともいい、俳諧や和歌の折句のひとつ。ある語を各句の初めとおわりに一章ずつ読みこんだもの。

本句は、「くつ冠」というちよつとかわつた文芸遊戯の用語を川柳風に詠んだだけの句で、冠↓髪結い・くつ↓足の爪と結びつけただけの句であらう。

八木「贊。川柳の「くつ冠」は、元来の和歌の技巧の意のこぼから少々ずれた意味に使っている。折句の意でなくなっている。

多田「贊。

685 麥の穂て腹を突きく追出され

大屋「野良出合、麦畑。

麦畑ざわ／＼くと二人逃げ 末一4

もがくなよ麦がいこくとしれるハな

安四松4

八木「贊。裸か。

鈴木「同。半裸でしよう。

石田晋「同。帯を結んでいない姿でよいのでは。

は。

小野「贊。帯ひろどけの姿態。

多田「贊。

大屋六郎・八木敬一・鈴木 黄
石田晋一・南 得二・小野真孝
本多正範・石田成佳・多田 光
故岡田 甫

686 鬧がしい片手間に下女はらむ也

大屋「川柳に登場する下女は、おおむね教養低く、つまらぬ事をギヤアギヤとさわぎたてることになっていて、身持ちもあまり芳しくない。

本句もその例にもれず、あれこれこきつかわれ、自分でもこちゃこちゃとまことに多忙な中で、チャンとすることは忘れなれどみえて誰の子か知れぬが身もつたという句。

南「贊。

ひきがある立させたやうに下女孕み 二七19
奉公の片手間に下女孕む也 五七13

687 時去り時来ッて後家承知する

大屋 夫を失なつて後家になつた当座は、悲しき義理と世間の手前もあつて、朝夕仏前に香を焚いて夫を憶んでもいようが、四十九日もすぎ、半年もすぎると、そろそろ空闇の寂しさが身にしみてくる。これは生き身の悲しさというもの——そんな折り、やさしく言い寄ってくる男でもあると、やがて時来ッて承知するといふのである。

「時去り時来ッて」は成句であるが、出典が見当らない。

八木 謡曲「狸々」にありました。「さてもわれ親に孝あるにより、ある夜不思議の夢を見る。楊子の市に出てて酒を売るならば、富貴の身となるべしと、教のままになす業の、時去り時きたりけるにや、次第次第に富貴の身となり候……」

多田 贊。

四十一丁

688 若松染の綿入レで礼の供

石田晋 年礼の供の句。年礼の供が小袖を着

ているが、それが若松染と正月らしく、おめでたいことだの意か。

石田成 贊。単なる若松と年礼との縁語仕立ての句。

若餅を一ト臼すける礼の供 明元智2
多田 贊。

689 かみなりの内で買てる子の太鼓

石田晋 浅草寺の雷門を入つたところに玩具屋のあつたことは、先に
しほふきや天狗水茶屋にらんでる

の句で述べたところ、『江戸名所図絵』等の図に見えるところである。潮吹面(大男面)や天狗面以外にも太鼓も売つていたのであろう。子供の土産に太鼓を買つたのであり、それが太鼓と関係のある雷(門)のところであるといふのである。類似句には、

雷のうちへ太鼓をかに行キ 四八6
多田 贊。

690 禿の力もの、ふを引キとめる

石田晋 馴染の他店に行くや帰るを禿がとめている。弱者が強者をとめることのおかしさ。

もつよひと茶屋ハ禿を引はなし 拾六28

振りもぎる所へ禿又一人 安九礼3

八木 待伏せ又は伏勢の句と思つ。理由は、「ものふ」で軍談用語から伏勢を匂わせている。

多田 (1)客の帰るのを止める (2)待伏と二つであるが、私としては(1)のように考へていた。

691 小判のはしを連して出る中の町

石田晋 阿達義雄氏は「川柳江戸貨幣文化」でこの句に、

「小判のはし」は仲之町道中に於ける禿のこと。「おいらん」を小判に見立てての句構

と解しておられる。私もこれ以外の句解は考へられない。

八木 「小判の端」は、当時註釈も不要な位の成語である。しかし、現在どういふことなのか、正確には分らない。

多田 贊。

川柳塔柳箋

一冊二〇〇円(下二四〇円)

理屈、言葉、川柳

田中光夫

「川柳に理屈は要らない」とはよく耳にする戒めの言葉である。これはごくおおよざっぱな心得を説いたもので、頭の中で捻くっただけの句はよろしくない、という程の意味かとも思うが、「理屈」などという言葉がどうも僕には気になる。気に懸かりだすとちよつと込み入った詮索を試みたくなる。

「理屈」という語はそれ自体定義に馴染みにくい。「屁理屈」といえば軽侮や非難の意味が籠もるし、「なるほどそれも理屈だな」になると多少肯定的な調子を帯びる。何れにせよ「理屈」には「あたま」という言葉が付きまといっている点に変わりはない。ではこの「あたま」とは何と対置して用いられるだろうか。恐らく川柳の世界では、「実感」、ある

いは「詩情」に対して用いられているに相違ない。人間の外的、内的体験からは多少浮き上がった印象を与える句は、一般に「理屈の句」として排するといういわば暗黙のルールのようなものが存在していそうである。

ところが詩情にせよ体験にせよ、果たしてそれらは生のままに表出し得るであろうか。残念ながら人間はそれらをそのままの形で吐露することは出来ない。川柳の場合は、必ず言語という一種の記号を用いて表現するしかない。ところでこの言語が、いわば理屈の兄弟なのである。兄弟である以上、両者には共通の生みの親がいる。ログスがそれである。ログスというギリシャ語は理、言語、秩序などの意味を包

含した、甚だ適用範囲の広い言葉である。簡単に言えば、論理と言語に跨る統一原理である。それからあらぬか、「理屈」と同じく、「言葉」という語もしばしば、「言葉だけの約束」とか、「口先だけの好意」のように用いられると、特に日本人にとっては具合が悪い。

さて、川柳が言語芸術である以上、川柳を川柳たらしめているのも無論言語である。生の感情や体験が、そのままの形をとるのでは決してない。必ず言語という表現手段を必要とする。いや、言語は単なる手段の地位に留まることなく、ややもすれば自己目的化する。そして言語が絡む以上、そこに理屈が配剤するのは避けられないのである。言語そのものの自己目的化が高じて生まれるのが、川柳の場合は、いわゆる言葉遊び、地口、洒落などに則った、一見無内容な句である。例えばこんな句がある。

タカノナニオハナオチヨワキツイコト
(末摘花、二四)

『柳多留』二五編以下が兎角退けられ勝ちなもの、この種の遊びの句やばれ句のたぐいはびこつてきたからだということであるが、こんなバズルめいた句を極端に忌避するのも、いささか牽強附会に過ぎるだろう。

一直截で生の詩情に乏しいとされる句の今一つの方向は、歴史や伝説に取材した川柳であらう。

雨やとり迄ハふこつなとおとこなり

(二〇篇 一六丁)

いうまでもなく、若き日の太田道灌のエピソードに捻りを加えた句で、特に謎めかしてはいないが、山吹の挿話をふまえたちよつとした機知の閃き、すなわち趣向の好が際立つ句である。「見立て」の世界では、現実の道灌に必ずしも立脚させる必要はない。見立てには見立ての「理」があり、弱年期の道灌は「山吹」の歌を詠む少女に出会うまでは、武辺一点張りの田舎武者だったというのは、いかにも人を唸らせる「理屈」となり、その「理屈」から趣向が生まれる。こうした川柳は、独得の軽妙さとウィットの閃きを持つゆえに、僕らに小さな知的快感を与えてくれるのである。知識をひけらかす術学趣味すれすれの危ない綱渡りに、この種の句の妙味があるといつてよからう。

「遊び」を基調とした詩の伝統は、西洋にも古くからあった。取り分け十八世紀の文人たちは、仲間内で謎々の詩(リドル)を交換して、互いの機知を競い合っていた。文学史

の文脈からは周縁と見なされてはいるものの、大真面目な理性崇拜と、秩序主導型の十八世紀文学の思わぬ副産物として、このリドルは軽々に退けるには惜しい様式である。東西呼応するかのように、「遊び」中心の詩の形式が栄えたことを思うだけでもどこか心楽しい。

要するに川柳には、「遊び」の要素が不可欠であり、その「遊び」はやはり言語による遊戯の形をとるということを強調したいのである。この傾向の川柳は、田辺聖子氏が、『でんでん太鼓』でいみじくも「たはは川柳」と名付けたものとはやや趣を異にする、罷り間違えばペダンティックにもとられかねぬものであるが、術学趣味すれすれに、趣向と見立ての冒険が開花する時の知的快感こそ、「遊び」の川柳ならではの面目ではないだろうか。一度読めば直ちに「身につまされる」句とはひと味違った遊びの句、川柳が言語芸術であることを確認し、意識化するという、作句上必要なメカニズムを思う時、この広い意味での「謎」を秘めた句の一層の見直しを、現代川柳にも期待したい気持ちの沸き起こるのを、僕は禁じ得ない次第である。

(文学博士・同志社大学講師)

市制百周年記念協賛

和歌山市民川柳大会

とき 平成元年5月28日(日)正午開場

(昼食はすませて来て下さい)

ところ 和歌山市役所14F大会議室

(和歌山バス市役所前下車)

課題と選者

〔和〕 岩倉天彦選

〔歌〕 大矢十郎選

〔山〕 北川紀世選

〔市〕 菅井智水庵選

〔制〕 高松康勝選

〔百〕 野村太茂津選

〔周〕 淵田寛一選

〔年〕 南出陽一選

席題 なし (欠席投句拝辞)

出句 各題2句 締切午後1時半

会費 500円(記念品・発表誌呈)

賞品 和歌山市長賞・和歌山文化協会賞・シルバークロニオン和歌山賞

連絡先 和歌山市野崎三番地 島田正己

Tel(〇七三四)五五一五〇一(代)

主催 和歌山川柳愛好会

後援 和歌山市・和歌山文化協会

シルバークロニオン和歌山

ニュース和歌山



黒川紫香選

鳥取市 小谷 美つき

ウインドにあるのは春の夢ばかり
久濶の出逢いカーテン風に揺れ
泥をかぶって読みの甘さを悔いている
恋人が彷徨うている春の芝生
自分史に背伸びし過ぎて肩が凝る

和歌山市 山口 三千子

潮時かも知れぬ抜け道探さねば
貝になる前に最後の砂を吐く
書いてすぐ出せぬ遠くにあるポスト
反復をしつつ戸締まり確かめる
全身をバネに愛犬出迎える

名古屋市 藤井 高子

わらべ唄 母の音符がよみがえる
虹ばかり描き足している筆のあと
とっても優しい春の鼻欠け地藏さん
出来すぎた話は風に送らせる
難問が解けるとお腹すいてくる

富山市 舟渡 杏花

法灯へ吸い寄せられる気の弱り
逆転を果した椅子でよく回る
裏門をひっそりくぐる孤独感
堂々と抱負を語るかたつむり
丹念に家紋を磨く日向ぼこ

今治市 野村 京子

裏切った影を裁いたくすり指
足跡が残せぬ不安抱いて冬
炎えきつて雪染めて行く落ち椿
恋ゲーム行きつ戻りつ春の道
幻想へ白梅の精 化身する

熊本県 大川 幸子

手荷物へタクシーが目をつけて来た
野次馬根性人垣みると走り出す
薬指貴方の愛を信じてる
セルフサービス甘えてばかりいられない
捨てがたい昔を語る古箏筒

八尾市 高杉千歩

錠剤に素直な鬼になり果てる

反骨を貫き薬に負けている

大仰に赤青黄の薬包紙

弱い星でお月様と仲がいい

落花舞う身につまされる春の蝶

富田林市 池森子

いくつもの冬と出逢って仏の眼

安物の小説の中に住むわたし

わたしの中の女反乱してやまぬ

恋しくて抱けば風花すぐ溶けて

年だからと言われて履くゆるい靴

広島市 流奈美子

平成を占うてみる福袋

逃げてゆく刻を見送る万華鏡

自我を消すレモン沈めるティーカップ

いたわりの心をくれる菜の花よ

いまもなお追いかけている亡母の影

熊本市 宇野昭代

願うことばかり仏間の灯を点す

ライバルの栄転送ったコップ酒

玄関が開いていたのでつい空巢

医者は何聞いたか看護のまめまめし

深々と下げた頭にある打算

尼崎市 児玉歌子

胸の内読んで貰っている月夜

火の中の栗が挑戦状を書く
笑い合うみやげ話が別にある
だんまりを決めて二月の月を追う
朽ちてなお栄華の匂う屋根瓦

西宮市 秋元てる

矢面に立たされて知る父の酒

いっばしの口きく孫の面構え

古里の雪に埋れた灯がやさし

雪女郎立って居そうな雪囲い

その下にラーメンとつく町が好き

京都市 松川芳子

まあまあとおだてに乗った酒の量

雨の宿海女の磯笛遠く聞く

化粧品次々変えてまだ女

水たまり月がきれいで跨げない

以心伝心捨て犬がついて来る

尼崎市 森安夢之助

公園の裸像は風邪を引かないか

初パートその夜ペチャクチャよく喋る

二枚舌糸がもつれてほぐせない

一番に強い味方の金がない

相談に乗った甘さを悔いている

大阪市 上田柳影

それまではカプセルにある欲の種

呑気だが僕にも秘めた辛い過去

筋書になかった梅の山に鐘

ワープロで叩く別れの固い文字
み仏の豊かな頬にさとされる

長岡京市 木本如洲

霧雨のはげしくなりぬ滝の道

能登の冬鶴の姿が海にある

駄馬でよし孫が許してくれている

畳替して美しい絵を飾り

これからの余生と生きる本を買う

東子市 小山悠泉

童唄聞えて来そう里の道

恋したか輝いている娘の瞳

ドアチェーン締めて女が一人住む

射程距離に男が居ない嫁きおくれ

倦怠期隙間を埋める孫が来る

草津市 久保和友

平成になって軍歌カラオケやめました

成人式はなかったガード下に寝てました

焼夷弾のかけら拾ったのも昭和

十九歳の日記に路郎水府紋太いる

銀の匙余生は光ることもない

久留米市 鶴久 百万両

雛まつり噂の女も来てくれる

パフォーマンスへ淋しがりやの影をみた

充電がしたくて憂国論を読む

ジャパゆきさんを妻に迎えて揉めている

いい日旅立ち成田の空は澄みわたる

鳥取県 山根八重

雪解けの音をあつめて春の川

約束を信じて待った紅椿

年上の女は優しい聞き上手

苦労性唇を噛むことばかり

約束を破り冷たい風に会う

朝釣りの魚焼く焚火輪が出来る

孤独から逃れる詩集持ち歩く

宝石を見つめ指折る預金高

鳥根県 高野律子

つぎはぎの過去に思い出多すぎる

耳底に涙のつまる声を聞く

寒椿見れば絵筆が誘い出す

冬の海夢滔々と盛り上がる

藤井寺市 中島志洋

花束にとんと無縁の三枚目

満開の桜迎える無人駅

ポスターが誘いをかける花の春

みどりの日先帝徳び庭いじり

出雲市 金森知恵子

健康な寝息あしたを予約する

信じねば霧の樹海を抜け出せぬ

貧しさが遺産立志の人となる

生かされて喜寿の盃初春に酔う

鳥取県 西浦小鹿

花嫁が新しい風連れてきた

枝分れしても心は土にある

陽があたる白磁に今日の顔がある

居眠りをしてる母が好きになる

子育ての重荷を分けてから夫婦

午年の妻に蹴られてばかりいる

石投げた故郷それでも帰りたい

予算には気持の寄付も入れてある

北風に押されて入る縄のれん

妙法に背き椿の首が落ち

三味が出て今日の主役は安来節

二月もうとぎれとぎれになる日記

自分史へ記憶をたどる古日記

急に声落として話すいい電話

味噌汁の匂いが二階呼び起し

強くなる薬を飲んで立ち直る

オーバーのポケットでよい小銭入れ

またの世は契らぬ逆説的な愛

長生きをしようと歩く靴の音

甘えては居れぬと気付く背を伸ばし

遠ざかる人追いかける窓の月

熊本市

黒田 緑

静岡市

沢田 きん

出雲市

金村 青湖

米子市 新 正子

許す目が甘くていつも影を踏む
豆播きで春をささやく鬼瓦
生かされて生きる日記の日をつなぐ

どの子にも一寸小さい亡父の靴

紙屑を飯に廃品回収車

母と娘のころふくらむ岩田帯

派出所で補導少女とみかん食う

北風に乗せてやりたい火の女

そば殻の枕で安心して眠る

捨て兼ねる古着に小さな愛がある

泣き事は嫌いで高い木に登る

倅せな胸に抱かれたかすみ草

春一番くすぐったいな孫を抱き

にこにここと時にはピリで行くもよし

身の上を語ろう霜の降りるまで

口実を並べて逃げる町の役

なつかしい駄菓子見つけた峠茶屋

相談をまとめる猪口が忙しい

輪の中で当りさわりのない話

ささやいて笑って恋の長電話

大阪狭山市

香川県

上 藤多 織

上 藤多 織

上 藤多 織

上 藤多 織

尾宮 弘治

のっけから笑い電話の花便り
風するり亡児が遊ぶれんげ畑

岐阜市 渡 辺 杏 村

暖冬に体感温度狂いだす

入学式着飾りママのコンクール

学帽をまぶかにかぶり子が帰る

洗濯ものいっぱい持って父帰る

京都市 木 村 たけし

朝起きも筋書にない筈もつ

母に逢う楽しみ故郷に墓がある

山荘の床几に秋が落ちている

花屋から檜をもらって出るモデル

熊本県 岩 切 康 子

強い口調そこに真意が有るのかも

一言に信じる事の怖さ知る

柔順に生きて腹立つ勤め先

情報早さにぞっとする朝

尼崎市 山 田 保 蔵

気がつけば十日も日記書いてない

五十年希望の丘をさがしてる

つまずいた石も何やら怒ってる

慌てても電車は早く着きません

西宮市 松 本 一 郎

一日を終えて湯舟で明日のこと

大樹から離れ無情の風に遭う

定年のその日脇役から主役
右ひだり幼児の列が蛇行する

熊本県 高 野 宵 草

皆さんと憲法守る新陛下

老母の手をガラス細工のように引く

退院を見送る部屋が広くなり

車間距離真面目にとれば割りこまれ

河内長野市 大 西 文 次

全自動のようにには妻は動かない

喧嘩する火種絶やさぬ老夫婦

豊かではないが冬には冬の幸

勉強をせぬ子に勉強室を建て

徳島県 宮 武 まつ 女

平成へゆっくり妻の曳く手綱

混浴へときめく春の夢をくれ

人生の哀歌曳きする長い川

針千本呑んだ強さで生き残る

佐賀市 江 口 万 亀 子

丁稚からスタートしたと言う社長

くどくどと呪文のようなことときく

母にくる手紙大きな文字でくる

一気飲みのラムネもやはり上手下手

寝屋川市 宮 崎 菜 月

すっかりと使い果たした脳電池

子は廿歳横に並べばキラキラと

菜の花ヘラインダンスで寄せる波
行きずりに墓碑訪ねるも縁かな

尼崎市 鈴木良征

当選をしてから嘘が上手くなる

すみません今夜もホカホカ弁当で

猿回しだんだん猿を持って余し

冷えきった夫婦銀婚式迎え

岡山東 千原理恵

かくれんばかくれたまんま寺の鐘

弾まない毬ばかりある冬のうつ

独裁者金を味方に生きのびる

水割りにレモン浮かせて中流か

和歌山市 堀畑靖子

時折りは一人の時間持つもよし

ひとひらの葉書あなたの無事を知る

なら山の裾野わたしの今の位置

バレンタイン遅すぎましためぐり会い

貝塚市 池田寿美子

思いつき火花散らして反省す

かしこそうな顔して漫画読んでいる

タレントも得意な顔の育児論

習い事春の歩幅は慌てない

堺市 宮本かりん

こいもころころ私の味に煮え上がり

ソロバンドおりに育った息子味気ない

回らない舌で辛辣なる言葉
車窓からパントマイムで別れよう

鳴門市 八木芳水

ふるさとは静か過ぎてても寝つかれず

親と子で歩幅が合った日の安堵

寝不足をほぐしてくれる散髪屋

風止んで世間話が耳を打つ

藤井寺市 高田美代子

たった一人の子が外国で住むという

プロポーズ主人がしたと言っておこ

温泉がとつても好きなゆで玉子

歯車が狂ってからの物語

尼崎市 木下義嗣

古里はいつも夢あり紅椿

銀世界窓から眺め寝正月

若い日の日記は若さが書いてある

あの坂をこせば古里近く見え

尼崎市 野瀬昌子

時々手足出したいダルマさん

遠い日を想い出させる孫の雛

福寿草今年も咲いた早春賦

鉛玉をふくんだまんま電話口

伊丹市 山崎君子

今朝もまた声かけながら花の守り

隣の子挨拶さける声がわり

雨あがり裏町で見た紙芝居
湯けむりが隠してくれた脱衣場

大阪市 亀井円女

内緒のはなし孫より犬の方がいい
自画像に増える小皺がいと嬉しい

熟年娘電話で世話をやいて来る

冬の宿母と娘はよく喋り

酒田市 永沢裕子

片道の切符で帰る家がない

人生のドラマ広げる春の駅

ぼけ防止言うペン先が滑らない

クラス会くらしの本音黙ってる

和歌山市 田中みね

気がかりは友のひとりか今も病む

たまさかに悪女になりたい長い道

三キロ痩せたいそんな二十歳の願いごと

最後まで本音に会えず来た訣れ

吹田市 山本希久子

制服を着れば職場の顔になり

晩学に目覚めて白き朝の露

よこしまを月の光に見透かされ

未来都市赤い光とたわむれる

尼崎市 吉永伊三郎

尋ねるとますます痛い孫の傷

忘れぬように書いたメモを置き忘れ

残り火の火照りを知っていたこはぜ
出戻りが土産を置いて又出掛け

熊本市 北川一進

色々のバスが揃った観光地

常連になって案内要らぬ部屋

空き腹に三分待たすカップ麺

割勘になれば振ってる空財布

相生市 中塚礎石

古稀迎えやつと夫婦の歩がそろい

幸せがあるから丸木橋渡る

お隣も二人になった花むしろ

コーヒーを湯飲みで飲んでいる三時

尼崎市 明壁敏之

出しゃばりが笑い話にのってくる

酒癖の悪さ任地へ先につき

悪い癖ばかり親から貰い受け

辞典から借りて差出す挑戦状

田辺市 染道佳明

耳打ちをされてからの失語症

ドッグフード夫に渡して出発す

スナックで夫と踊る恥ずかしさ

告白を聞いているのは砂時計

旭川市 朝倉大柏

毒舌をなくした友の背が淋し

舗装して先祖の墓が眠れない

まだ酔っていないと呂律回らない
自分史を書く時ペンが甘くなる

出雲市 岸 桂子

凶みくじ老母は背のびをして結ぶ
ギザギザにバランスがある心電図
カタツムリ苦労話はしたがらぬ
時々他人の顔になる夫婦

南国市 窪 田 和 広

沈黙をして潮時を考える
手応えがありカーテンを開け放つ
泣いている女に訳を聞いてやる

兵庫県 奥 野 テ ル

紫の帯ゆったり締めて逢いに行く
嫁姑暮しの知恵をつぎ合わせる
ほどほどに呆けて母の瞳笑ってる

和歌山市 田 中 輝 子

進路変更見守るだけの親の位置
梅見頃誘い合わせていく絆
一部始終話す覚悟は出来ている

寝屋川市 井 上 す み れ

五年ぶり会った彼氏はアデランス
聞き上手に余計なことを喋り過ぎ
観光バスお参りはせず集印帳

和歌山市 森 茜

とりたてて不足なものはないメモ帖

旅立ちへ風邪のビールス邪魔をする
思いつづけて手製の晴着美しい

富田林市 大 澤 三 四 子

凍っても春を信じる二人です
よい思案ないからむれるめだかたち
飴玉をなめたばかりに苦い汁

堺市 井 上 た かし

迂闊にも手をあげたのは僕一人
窓際で波風たたぬ異動月

タンゴにはタンゴで揺れるイヤリング
兵庫県 酒 井 靖 子

落し穴掘って大事な人が落ち
執念と一緒に渡る丸木橋

水はけが悪くて昨日の愚痴溜まる
高槻市 芦 田 静 江

村おこしソバとイワナにあった知恵
枝ごしの春の魅力が動き出す
積み藁に春が動いた草の彩

京都市 小 林 英 子

紅殻の古都に遙かな童唄
終焉を未完のままに花鉢
燈台と岬に旅のロマン追う

鳥取県 太 田 幸 枝

鼻すじのまっすぐ話好きであり
釣書の無口なとこにある魅力

酸欠の脳を森から浄化する

鳥根県

松本 聖子

確かめてまたたしかめて裁ち袂

岡山県

福原 辰江

ミーティング一人異なる意見吐き
空模様私の心を塗り変える

持たされた新鋭事務機に監視され

鳥取県

西原 艶子

誤解ひとつとけてきれいな花の色
野いちごの真っ赤に熟れて人を恋う

松江市

原 長三

二重橋母ならきつと跪く

デートには姑にわからぬように出る

骨休み欲しくなったら愚痴が出る

寝屋川市

豊福 路子

退屈を天井裏が聞いている
耳痒し少しよい事きけそうなる
七草の粥で昭和も過去となる

鳥取市

萩原 美雪

騙された夫婦茶碗を拭いている

自尊心の底がみえてる影法師

退院の夫と甘酸っぱいお炬燵

八代市

増田 一乗

鬼瓦旧家の誇りのぞかせる
善人の私も鬼を飼っている
エピソード入れて祝辞があたたかい

静岡市

柳 沢たま

転校も五度目国家公務員

見れ見れと看板 轍が道塞ぎ

道路の骨休みです道普請

尼崎市

中澤 向西

忘れてた笑顔が戻る退院日
髪洗うゆとりへ今日も暮れて行く
新婚さん明るいニュース置いて行く

豊中市

三宅 つえ子

遠い国テレビニュースで近くなり

平成まで四代生きる人となる

元旦に絵日記くれた孫娘

伊丹市

小熊 江美

逝く母と指切りをした寒い夜
車椅子足から寒さ平手打ち
片方は何処に落したかイヤリング

大阪市

吐田 純子

寒いなぞ言っておられぬ様ぎ月

柵越えた危険な場所は良く釣れる

善後策わからぬままに馳け付ける

年越しの豆端数だけ食べとこう
昼と夜顔を替えてる化粧箱
思い出が残るデートのマツチ箱

鳥取県

西川 和子

路地裏のおもちや屋さんは老いている
万歩計に運動不足をしかられる
ホームにも春には春の花が咲く

岡山市 中嶋 千恵子

入歯から漏れる話で噛み合わず
新市街通り抜ければ過疎の村
チャックされ時々顔出す浮気虫

岡山市 牧野 秀香

崩御の日何も手つかず唯テレビ
曾孫が出すクイズが解けぬ現代語
平成の内外壁あり嵐吹く

岡山市 後安 ふさえ

新築に釘一本をまよいぬき
一日の疲れをほぐす湯舟唄
取れるなら取ってほしい顔の皺

奈良市 米田 恭昌

しぶちんもつられて買った福袋
成人式青いリンゴのたくましき
ワイシャツの糊のこわさのペナルティー

宇部市 中村 三良

ゴマスリ器使いこなせず平で止み
大木になっても街路樹は孤独
障子の穴から人の幸せ見る不幸

島根県 今川 三津江

雪の子報宿にぎやかにスキーヤー

らしくない冬にとまどう渡り鳥
定退のない野良着を干しておく

静岡市 滝田 たけ志

なさぬ仲円く住んでる親子鷹
煮え立てば亡妻の手際が目につぶ
厚顔という重宝な武器がある

鳥取市 岩原 喬水

一枚の辞令で渡り鳥にされ
手土産が足らぬか軽くあしらわれ
嫁いびりされた姑の歳になり

鳥取県 田村 千絵
(高二)

未来図は赤く染めたい何もかも
さばらずにフルート何時も吹いてます
川柳の道はわたしの日記帳

守口市 森川 春子

掛軸を変えればお客がありそうな
串柿の固さ驚く齡になり
口止めをうっかり喋って誤解され

枚方市 森本 節子

紅梅の霞む向うに天主閣
ツインビル今頃に知る新名所
晩酌の相手をしたい時もある

枚方市 山崎 彩子

リルリルリおしゃべり好きなシクラメン
すぐ怒る悲しい性がよく似てる

紫はあやしき色よ師の好む色

鳥取県 黒田 くに子

戻り税ちよっぴりお洒落しましようか

若い気であれこれ服を替えてみる
梅だより聞けば外出がしたくなり
月下美人開く夜誰に電話しよう

バーゲンの囷にされた熟女たち

岡山県 富坂 志重

富坂 志重

寒餅を切って手に豆五ッ出し

富坂 志重

夜の顔作る女の三面鏡

富坂 志重

口数が増えるはどこかに出る訛り

愛媛県 八塚 三五島

八塚 三五島

世話好きのついでに噂までつくり

愛媛県 八塚 三五島

うす墨のなくさめようのない手紙

愛媛県 八塚 三五島

玄関で信楽狸とばけさす

米子市 小塩 智加恵

小塩 智加恵

落ちそうな夕陽が恋を燃やしてる

米子市 小塩 智加恵

愚痴を言う娘に耳を一つ貸す

米子市 小塩 智加恵

六十が峠で荷車急ぎだす

岡山県 土居 ひでの

土居 ひでの

親バカの期待重たいランドセル

岡山県 土居 ひでの

のり出した話の裏で風邪をひき

岡山県 土居 ひでの

孫ひとり増える話の春炬燵

静岡市 三井 三津子

三井 三津子

紅一点やっぱり男の的にされ

静岡市 三井 三津子

眼帯がとれて人間らしい顔
義理チョコをもらい錯覚してしまふ

静岡市 三井 三津子

静岡市 山中 竹野

山中 竹野

脇役で越えてはならぬ線を引く

青森県 荒田 つる

青森県 荒田 つる

プライドが邪魔で演歌が唄えない

青森県 荒田 つる

晩酌の量は変えない消費税

青森県 荒田 つる

冬ごもり野良着も納屋に吊るされる

青森県 荒田 つる

谷あい生きて人情すたれない

青森県 荒田 つる

湯があふれ水があふれている過疎地

静岡市 宇佐美 寿美

静岡市 宇佐美 寿美

バス旅行握るマイクに迫る富士

静岡市 宇佐美 寿美

温室の野菜が匂を忘れさせ

静岡市 宇佐美 寿美

ぎりぎりに堪えた女の眼が光り

静岡市 宇佐美 寿美

川柳もマラソンも男もつと頑張れよ

広島県 森川 抜智

広島県 森川 抜智

便利すぎた世は佗びしかろ

広島県 森川 抜智

目的があるのか化粧が長すぎる

広島県 森川 抜智

だあまって喜怒哀楽を呑むポスト

岡山県 伏見 すみれ

岡山県 伏見 すみれ

零困気で悪口言うてたナと分り

岡山県 伏見 すみれ

無茶苦茶に叫びたい日のおくれ髪

岡山県 伏見 すみれ

岡山県 伏見 すみれ

岡山県 伏見 すみれ

岡山県 伏見 すみれ

逃げの一手を考えているお役人
野放しの野に罪ばかり風ばかり
泣きごとは言うまい木の芽伸びている

静岡市 小木久子

歯科に行き眼科に寄って小半日
賑やかで寂しがりやの友がいる
一泊で娘忙しく顔を見せ

和歌山県 森三枝子

パパの見るテレビは朝のニュースだけ
片手間の茶園うるおす台所
大物は知らぬ存せぬ記憶なし

岡山市 河野青銅

制服で夕餉の支度パート妻
妻であり母である日の美しく
酒パック自販で買って松が明け

鳥取市 武田帆雀

持ち駒の歩兵に篤と言いつ聞かず
敗軍の将で無口な棒グラフ
倦怠期解けてお代りする茶碗

大阪市 松永すすむ

花がある事故があったか交差点
朝寒によりそうように猫がくる
香箱に秘めた思いがこめてある

岡山県 後安江山

人柄を包む和服の似合う女

赤ちゃんの可愛い顔と福寿草
待たされる時間の長し隙間風

唐津市 野田旭恒

飽きもせで一途に玉を磨いてる

また雨か天気予報が良く当る

吠えぬのは飽食過ぎたグルメ犬

枚方市 中山おさむ

瑞々しい嘘を素面で撒いておく

オーナーになったつもりキー叩く

スコールに洗われてきた復古調

和歌山県 岩崎瑞穂

正確に鳴って目覚し叩かれる

お若いと言われ思わず気を許す

ウインドー ヤング目当に奇をてらう

羽曳野市 麻野幽玄

編物に程良き暖さの環状線

美しくなり度い二十歳も七十も

礼状が来る忘れてた程の些事

川西市 野村静雄

初めてのデイトに歩幅合にくい

美しい人から席を譲られる

大企業のそばに小さな社長達

鳥取県 乾隆風

黒い霧たべてお腹をこわしてる

言い訳をするのに少し鼻を掻く

円高のスリッパですか消費税

八尾市 向井しづ子

休日も夜明けにさっと起きるくせ

働かず遊んだ蟻の凶は見ない

好況の風はどこだろ首のばす

羽曳野市 福田満洲子

任地との絆を繋ぐ通話料

出不精のわけを知ってる膝の皿

ぼっくり寺知らぬ傘寿の針仕事

藤井寺市 楠昭子

ストライキ出来る平和がありがたい

売りつくしセールといっても毛皮では

医者よりもくわしく知って病んでいる

大阪市 島路太郎

事故現場人だかりする春の闇

かたかたと小箱の中は子の宝

始めるととまらなくなる子のゲーム

藤井寺市 菊地繁男

出来るだけ叱言届かぬ距離を置く

速度違反お巡りハンターの顔で寄り

口笛を吹いて帰ろう勝ちいくさ

静岡市 中西雅

願いごと笹に託して書ききれず

振袖をもてあましてる車の娘

星くずのいずれが亡夫か寒い窓

家中をビリビリさせる受験生

慣れなれしい笑顔でセールス声をかけ

二ヶ月や塾のチラシが増えてくる

静岡市 久保きぬ

息ぬきが不倫の火とは気が付かず

仲人の飾る言葉で虹を架け

口先と違う心に裏切られ

岸和田市 岩佐ダン吉

終電車詩人のような顔になる

おばちゃんが福耳でしたクジを買う

平成になってもウサギ小屋に住み

豊中市 小林一夫

そういえばしばらく虹を見ていない

過去帳に二歳で死んだ者がいる

自画像のこんな優しい眼ではなし

八尾市 片上英一

蛇だけがワルモノにされ蟹満寺

それなりに見つけたボクの青い鳥

自分史にひとこと欲しい別れの辞

堺市 山本半銭

節のある指でまだまだがんばれる

低気圧理由は知らない母の鬱

宝石に縁のなかつた母の指

静岡市 浅子まつゑ

薄化粧気分も少し若くなり

見違える程の化粧はデイトかな

親は子に自分の希望掛けている

新潟県 高野 不二

医者にさえ自己診断を持って行く

貯金する金はないから宝くじ

雪のない苦勞書かれる雪まつり

和歌山市 前田 美子

合格の文字くつきりと絵馬の数

口下手になぜか火の粉がとんで来る

ひと言を堪える妻いて平和です

奈良市 米田 芳子

ドレスときどきどってみても兎小屋

なに着ても着ばえせぬのに思案して

血管がつまったような昨日今日

高知市 山崎 一求

三浪が発表を待つやるせなさ

球団がキャンプ入りして春を呼び

読むだけで作りはしない料理本

静岡市 大石 たき

孫曾孫楽しく囲みゲーム取り

一人寝を起こす寂しい隙間風

過ぎし日の記憶を残す日記帳

吹田市 山田 里子

新婚の部屋に溶け込むバラの花

パワーだけが頼りの新社員
春寒や半天羽織る長電話

大阪市 今西 静子

熱燗の冷えてまだ蟹せせつてる

あこがれた都会で哀れ孤独の死

びんつけが匂う手鏡亡母がいる

島根県 梅木 梅園

しんしんと一夜で変る雪の朝

若者の注目高級車の値下げ

話また過去につながる老夫婦

豊中市 村上 とく子

似顔絵に少し不満な女客

補聴器をはずし諍い暮し

お手植の今は淋しい記念樹よ

大阪市 榊 本路 児

赤いシャツ老妻が選んでくれました

古風だがうちの女房の小豆粥

竹垣の家からピアノ聞こえそう

富田林市 浦田 トシエ

シクラメンよりも息子の嫁きれい

古時計昔の名残りに掛けておく

病人の入歯洗いぬ平成に(伯父を見舞いて)

今治市 渡邊 伊津志

浄土らし亡父の影が西へ行く

厚化粧歩き方まで気にかかり

名優の息切れを聞くかぶりつき

寝屋川市

河合時弘

その先を言わぬところにある魅力
とんちんかん言つて笑わす知恵袋

岡山県

福原悦子

駆け引きに長けて拾つた事故係
諦めて皺も白髪も同居する

蒐集癖置き場に困る古道具

東大阪市

大平 太一郎

正直な答を写す水鏡
味噌汁がこんななうまい旅帰り

大阪市

川原章久

八十路越え開き直つて気を若く

ロボットは顔に似合わずドル亡者

心配は聞く耳持たぬと先手打ち

静岡市

増田扶美

風邪というふて寝を隠す二枚折
なるようにしかならぬなら懐手

鳥取市

森山豊子

犬が駆け兎が駆け冬の海光る

薬売り話も弾む春隣

倉吉市

青砥菊枝

名月にしばしのキッス見られてた
目を閉じて母の港は今もある

静岡市

大村正雄

流してる曲も好みの美容室

御主人の葬儀にスキの無い化粧

鳥取県

鈴木芙美

都合上ノークメントで押し通し
御自慢の指輪やたらに見せたがり

富田林市

楠美子

鼻のきく犬もきれいな女が好き

二重橋白鳥しずか喪に服す

箕面市

岩津岳夫

初詣めだかのように流されて
ここだけの話がやがて渦となる

大阪市

山北三三三

左遷とは思えぬようなご挨拶

隔離部屋のように部長の一人いる

京都市

渡辺圭坊

地価高騰ビルが益々天に伸び
日日好日妻は料理で留守ばかり

富田林市

山原昭水

時折は頭切りかえ美術館

寒い日は南の島の紀行文

松江市

豊田巡歩

うちの庭鶯きたと回覧板
橋の名を沢山知つてる浪速つ子

大阪市

喜多佐津乃

消費税呑み込む秘訣マンガ買う

茨木市 藤井正雄

老いた今力はないが業がある

振り返る昭和の歌に湧く涙
風船も百個飛ばせばおめでたい

伊丹市 猪原石荘

合格が親父秘蔵のワインあけ

青森県 波ただお

健康の証いびきの高いこと
大根が一番美味しいおでん鍋

岡山県 杉本伊久栄

カラフルな新聞なんかなじめない
ヒヤシンス水だけ飲んで赤い花

唐津市 中村順子

飾らない男の皺に味がある
相合傘ぬくみをそつと折りたたむ

堺市 神原文

樹齢七〇〇生きぬく梅の花をつけ

吹田市 西岡豊

古着売る老婆の顔の深い皺
窓開けて春の日差しをほしのまま

静岡市 西村千代

世話好きでいい人だった通夜の席

鳥取県 木下芙葉

文庫本しこたまつんで春が行く
神様へ百円だけの命乞い

鳥取県 伊吹富恵

男です唇かんで我慢する

神戸市 石神草風

学校も寺も消えゆく過疎の村
千二百年香煙絶えぬ鑑真廟

岡山県 江口有一朗

嬉しさは癌でなかった帰り道

鳥取県 久野野草

主婦五人で飲めばエッチも許される
会社での素顔は妻に見せられぬ

流山市 神田治

淋しさにライバルの声聞いて見る

鳥取市 西村黙光

種播きが下手でいつこ芽が出ない
三日目に煙草をやめたことを悔い

姫路市 谷清柳

天辺で叩く太鼓が聞こえない

鳥取市 西村黙光

種播きが下手でいつこ芽が出ない
三日目に煙草をやめたことを悔い

唐津市 福島紀一

暖冬で山野の草木痴呆症

福は内うちなる鬼はまだ住めり
寒行の太鼓に合わず足の幅

十和田市 阿部 進

爛もよしカニも味よし北の宿
エリートの課長常識欠けている

唐津市 入江 喜久夫

夢に見るあなたは何時も後ろ向き
乳母車押して老婆の医者通い

大阪市 尾崎 黄紅

素颜美という美を忘れてる女ども
無人駅忘れ疲れた傘ひとつ

豊中市 額田 明吉

カレンダーに平成元年朱書する
元旦の抱負を笑う老婆の顔

豊中市 みきわきみ

地酒呑むここにもあった「鬼ごらし」
喋るだけ喋って補聴器はずして

川西市 西脇 富美

定員の無い献血の列に入る
温かい言葉に余分の品も買い

神戸市 岩田 信義

この先も独りと決めた設計図
発火点高い二人に気がもめる

檀原市 西本 保夫

まだ怒っているのかと探りの電話くる

じゃまになる一円玉を妻にやる

大阪市 乾 哲静

入閣に身元調査の要る始末
理髪師の話上手に夢うつつ

岡山県 大石 あすなろ

方便の嘘で上手にお断り
逢えるかも知れぬ子感に燃えている

藤井寺市 武部 敦子

独身がみな優雅とは限らない
独身が今日も日替り定食で

泉佐野市 大工 静子

里はよし無言で大根抜いてよし
芋粥を炊いたその朝南風

河内長野市 岡崎 実

強情の父が泣いてる晴姿
戎さん酒と美人を頼みます

静岡市 三浦 つね

暖 冬でたんぼぼ覗く散歩道
カビはカビだけど糞に花が咲き

八戸市 島田 昭治

恥知らぬ高官どもにただ呆れ
スーパード照れてる卵一パック

唐津市 浜本 治幸

日本晴今日はいい事ありそうな
山門をくぐれば此処は別世界

春一番花粉症まで連れて来る
静岡市 青柳金吾
世界地図さがすニュースが多過ぎる
鳥取県 武田照女

割り切ったつもり足を踏みはずし
遠慮した口が好物食はずし
堺市 近藤豊子

巢立つ日の髪たつぷりと肩にあり
屋台酒株情報もこぼれます
大阪市 漬水絹子

片わで生きていけない二葉の松
残り物食べているから健康体
倉吉市 橋本さつき

永田町トンネル工事急いでる
通せんぼする先輩は落ちこぼれ
豊中市 滝北博史

本心は本人だってわからない
出張といつわって来た熊野の湯
川西市 田中喜俊

絵画展寒いが義理で賛めに行き
花作り好きな嫁子は気が優し
岡山市 平田たけよ

もう嫁が起きているらしい朝の音
積木くずれる音がする老いの夢
泉佐野市 真崎浪速子

鯨骨のアーチ遙々来たツアー
繋がる犬にもあった恩と義理
大阪市 堀口欣一

梅咲いて大阪城へ夫婦連れ
今日も晴れわたり小さな蝶に逢う
泉南市 坂根流水

つかのまの日の出拝みて丘にたち
若者に交り余生のお茶する
鳥取市 松本伊都子

積る貯金孫への愛に消えてゆく
親ごころ転ばせて見る歩き初め
兵庫県 倉垣恵美

ことわざへすぐ当てはめる姑という
妥協してどこもかしこも染直す
呉市 岡田寿美礼

初春の生花希望みちてます
三代を生きた八十二の丸い腰
島根県 兒玉幸子

わたしのプラン今年も旅のこと
早春の陽に見つけたよもぎの芽
大阪市 平井露芳

昭和史の隅に記帳の名が残り
節分の鬼を追わずに喪に服し
奈良市 井上大

永遠に不滅昭和の巡幸記

昭和史をCM抜きで見える半旗

富田林市 加藤 ミツエ

急死の夫を偲び

亡夫二年ふっ切れぬ私笑って下さい
五十年暮した過去は忘れない

兵庫県 円 増 貞子

根気よく煮る黒豆の甘い香よ
古い寄ればいつか話は死上手

和歌山県 岩 崎 穂

人見知りしない赤ちゃんよくもてる
悪友と妻をだましてネオン街

静岡県 丹 羽 定 次

まだとれぬ学生気質愛される
呆けたかな書く字忘れてカナにする

広島市 名 和 喜一郎

夢運ぶ人となるかもこの電話
椅子取りのゲームの渦に入れない

寝屋川市 北 岡 波留吉

逃げられて暇に残る好きな人
喜寿すぎて寺の誘いが多くなり

出雲市 高 橋 きよし

子算なく寄付を見込んでいる幹事
健康だみんな揃って出る職場

米子市 服 部 朗 子

一声に波長合せて円くなる

待つ身にはあらぬ子感がしてならぬ

大和郡山市 渡 部 トキワ

沖繩の旅

七色の海が心に映えた旅
七色の海を愛でつつ歩もゆるみ

和歌山県 田 中 隆 積

解らない草書に心魅かれ出す
王羲之の行書はやはり素晴しい

島根県 岩 田 三 和

ささやいてくれる梅の木たずね行く
稲株にゴルフボールを乗せて打つ

青森県 木 村 喜 衛

胃の故障耐用年数過ぎてます
ライバルの意識が出ない幼稚園

大阪市 清 水 利 武

紀州路の春は一足早く来る
女性とは死ぬまで化粧忘れない

島根県 山 根 峰 雪

次々と出る手料理の味に惚れ
不動尊車で詣る人が増え

大阪市 平 山 登 代

そりやまあ僕にもあった出来心

芦屋市 根 来 敬

一人吟

秀句鑑賞

—前月号から

河井庸佑

手相見のすこし氣になるわが手相

福浦勝晴

運勢を判断するのに欠かせぬ手相。良いこと氣になることを見極め断を下す。自分の手相に不穩な相が、何でも知り尽くしているだけに心配である。他人事でなく氣にかかる。公立が私立が悩むのは親で

石川侃流洞

進学期を迎えた子どもを持つ親の悩み、子どもは子どもなりに考え、進むべき方向は決めている。子には子の、親には親とそれぞれ違つた悩みを持つている。どこへ進学させるべきか悩む親の様子がよくわかる句です。

悪友がずらり並んだ保証人

遠山可住

共に喜び共に悲しむのが真の友達。互いに悪友と呼び合い、助け合つて生きています。窮地に陥つた友へ差し伸べる多くの温かい手、友達がありがた味がよく表現されています。

適材適所君でなけりやという左遷

吉岡美房

異動期を迎えてよく見られること。結果的には意に副わない異動であつても、人物を見込み、君でなければならぬポストと、意欲を欠かさぬよう話す、管理職のつらい仕事の一面が読み取れる句です。

覚えてるけれど軍歌は唄わない

藤田泰子

戦争に対する思いは人それぞれ、楽しいものではない。時が移り平和な日々を送るにつけ思い出したくない日「覚えてるけど」に再び歌うことのない願いがこめられている。煙草吸うぐらい氣兼ねをしなさんな

玉置重人

最近、愛煙家に対する風当りは厳しいようだ。煙草愛好家にしかわからぬこの味。この人たちの権利も認めなくてはとも思います。紫煙ゆらゆら頭の中を空にして

堀端三男

目の回る忙しき、仕事をしておつた煙草の火、ほつと一息ついた。何も考えずに吸う煙草のうまさ。これこそ次の仕事への最大の活力源といえよう。

卒園の眼鏡の底に光るもの

羽原静歩

手塩にかけて育ててきた幼い子、心身ともに大きく成長し、めでたく迎えた卒園、希望に胸をふくらませている子どもたちの姿を見

て別れる悲しき、また務めを果たした満足感と喜び、複雑な心境に思わず出る涙、その氣持が巧みに表現されていると思ひます。

反抗期母のタクトが氣に要らぬ

森井菁居

子どもが成長する過程で、必ず迎える反抗期。良いにつけ悪いにつけ、逆つてみなければ氣のすまない時期、親も自分の通つてきた道を振り返り、上手に応えることも大切ではないかと考えさせられた句です。

子ばなれのせりふは巧く言うつもり

石垣花子

親はなれの出来ぬ子どもは困つたものですが、それにもまして困るのは、子ばなれの出来ぬ親。子どもの将来を思い上手に子ばなれこれこそ真の親心というものでしょう。

初耳ということにして聞いてやり

藤田軒太楼

ビッグニュース、何より先にと得意顔で話してくれる。知らぬ振りで感心して聞いてやる。相手の氣持を汲んだ心のやさしい聞き上手な人。人をそらさぬ苦勞人だと思ひます。

省略の言葉が生きている夫婦

渥美孤秀

くどくどと一部始終を話さなくても、以心伝心わかるのが夫婦。他人には理解できない短い省略の言葉で結構通じ、ことが足りる。愛情あふれる、ほほえましい夫婦像が感じられ、うまく表現された句です。

愛染帖

橘高薫風選

岡山県 土居 耕花
淋しくて茶漬けの音を立ててみる
もういいかい言うて揺れてる木守り柿
米子市 八木 千代
花暦今は椿の花の幕
岡山県 萩野 鮫虎狼
掛け曆きのうへ倒れそうになる
逆境の酒頭からさめて来る
神頼み赤いマニキュア塗ったまま
弘前市 相馬 銀波
錆おとす時盃を回し飲む
答弁の上手い男に敵が増え
米子市 川上 より子
蜘蛛の子のはじめての巣に春の雨
顔汚し渡る寒月母はどこに
大阪市 小出 智子
夢ならば醒めよ桜の咲かぬ間に
ことの序でに隣の花も咲かさんと
大阪市 西森 花村
カラくじの数より女多くなし
立小便故郷の空の方へ向き

橋本市 岸本 木魚
例えはのうちに本音をちらつかせ
ひな祭り時の流れのないお顔
今治市 越智 一水
君が代でないぞ君が代歌わな
「ふるさと創生」ああ山崩し山つぶし
豊中市 三宅 つえ子
手のひらの草の名を聞き捨てがたし
六十路もう薬にかえて酒を飲む
青森市 工藤 甲吉
雪の降る街デパートへ先ず入り
大寒の中だらしなしい雨が降り
鳥取県 土橋 螢
俺よりも嘘が上手で字がうまい
おもちやではない私は女です
大阪市 尾崎 黄紅
老いの春妻の初恋さいている
家紋だけ遺してくれた先祖です
吹田市 栗谷 春子
言うべきや言わざるべきや日も暮れ候
きんつばも半分ずつて足る茶の間
大阪市 神夏磯 典子
一流になつて一流の顔になる
富田林市 藤田 泰子
鳩時計気楽に鳴くから止めておく
君が居る極彩色の夢の中
赤信号ばかりの道を会いにゆく
今治市 渡辺 伊津志
秀才が自動ドアを通り抜け
肩書が変わり足音まで変わる
竹原市 信本 博子

美しい花へ殉死をした造花
金を出す魔法を孫がかけに来る
川西市 野村 静雄
長生きを喜ばれてる仕合わせさ
CMで見ぬ胃薬に躊躇する
唐津市 仁部 四郎
生活の知恵でさわらぬ玉手箱
生活の知恵にはずるい黒眼鏡
神戸市 岩田 信義
指一つ多い手袋編んでみる
吹田市 山本 希久子
羽衣をとられて舞えぬ主婦の鬱
和歌山市 後藤 正子
一日がなんと短い充実よ
岡山県 松本 元江
冷たさも温さも知って咲くさくら
香川県 上藤 多織
鉢巻きをするとめくらになる民だ
広島県 田村 新造
飲んでるうちに昭和が幕を閉じ
大阪市 榎本 露児
熱爛のむこうに故郷が横たわる
唐津市 浜本 ちよ
猪口重ね仮面が落ちたのも知らず
米子市 新 正子
十八の息子が駒になる入社
豊中市 滝北 博史
花嫁の父にハンカチ貸したまま
西宮市 林 はつ絵
座禅では押さえ切れなく夢にでる
大阪市 山北 三三三

二人居た夢が一人となる目覚め

今治市

矢野 佳雲

玉手箱煙も何も出なかつた

唐津市

福島 紀一

酒好きと見えて徳利が墓に在る

唐津市

山口 高明

日向ぼこ過去は可もなく不可もなく

唐津市

入江 喜久夫

熊野路の木洩れ日海の底に似て

堺市

近藤 豊子

ネクタイの色で行先聞かされてる

唐津市

浜本 義美

貧にして鈍せず今日も生きてゐる

鳥取県

新家 完司

裸木の孤高いくさを蓄えて

和歌山市

西山 幸

どんじりに来て真っ先に去に支度

鳥取県

ささき やえ

お月さまは一途な芸をくりかえす

鳴門市

八木 芳水

やさしさの湖になる海になる

岡山市

川端 柳子

ひよつことおかめに太い骨がある

鳥取県

河合 時弘

冬の陽は石と石との間も透す

岸野 あやめ

高野聖の背中に亡父を見てしまつ

和歌山市

神平 狂虎

仮りの世にせつせと積んだ砂の城

枚方市

山崎 彩子

てにをはの一つ狂うて皆狂い

弘前市

波多野 五楽庵

縄電車父母が居たその昔

堺市

井上 たかし

暖冬に誘われ侘助おちよほ口

和泉市

西岡 洛醉

守礼門お心残りが一つある

倉吉市

奥谷 弘朗

菜の花がママの素顔で活けてある

和歌山市

田中 輝子

四月馬鹿ちよつと道草してみよか

倉吉市

渡辺 苦句

満点でなくても人間味が光り

岡山県

江口 有一朗

つつましき墓石に似合う花探す

豊中市

小林 一夫

陛下逝きそれからこ託並べおる

堺市

高橋 千万子

ペンをとる今日の私に会うために

藤井寺市

中島 志洋

捨てる神拾う神あり世は楽し

大阪市

山田 妙子

新聞の隅にも人の声があり

堺市

青戸 田鶴

立ち読みの財テク本じや儲からず

出雲市

板垣 夢酔

浪々の人が泣きながら行く

豊中市

上田 登志実

春の陽は雑木林をざわめかす

堺市

山本 半銭

新元号妻も恩赦を出すという

田辺市

染道 佳明

横顔が好きで結婚あますぎる

富田市

松本 今日子

シヤム猫の恋の行方が一大事

和歌山市

福本 英子

仕事着で選ぶおばちゃん達のチヨコ

鳥取県

土橋 はるお

作業衣の写真ばかりの友が逝く

広島市

名和 喜一郎

許すのが先か別れるのが先か

相生市

中塚 礎石

婆さんの黒い髪毛を抜いてやる

奈良市

米田 恭昌

利き腕でなくても持てる酒のビン

青森県

相馬 一花

本当の愛でなかつた花ことは

名古屋市

藤井 高子

海猫は岬を護る防人か

米子市

田中 亜弥

悔いしきりつまみ洗いですまぬ傷

芦屋市

根来 敬

咳一つ二つ言うべきことは言う

鳥取県

松本 文子

虹の橋渡るといかに帰れぬぞ

島根県

小砂 白汀

社会党男も金切り声になり

唐津市

田口 虹汀

陽のかけが斜めに路地のもと廓

島根県

西村 早苗

島根県 堀江 芳子
柏手の強さに気付くお朔日
有田市 松井 かなめ

置業あなどりながら使っている
名古屋市長 越村 枯梢

マッチつけて私の影を見てしまっ
高槻市 河瀬 芳子

福井さんの背広段だん派手になり
堺市 神原 文

見栄張りの財布はいつも震えてる
米子市 小西 雄々

ロボットがひょっこり首を縮めにした
米子市 政岡 日枝子

花は望みを人に洩らしことがない
枚方市 森本 節子

鶴のニュース見ればその夜は鶴の夢
鳥取県 西浦 小鹿

捨てられたおもちゃに蝶が飛んでいる
姫路市 大原 葉香

雲は詩人見事な詩を空に書く
大阪市 北 勝美

十二年分の塔誌と我が身の置き処
大阪市 板東 倫子

痛いとも痒いとも言わぬ孤独癖
八尾市 向井 しづ子

牛鍋とすき焼の差で口げんか
笠岡市 松本 忠三

清貧に賄賂の入る隙がない
和歌山市 桜井 千秀

造花にはすげない春を待つ花瓶
真面市 岩津 岳夫

印籠はずるいと思つた民主主義

赤いほっぺもすぐに遙かな毯になる
米子市 小村 てい子
伊丹市 樫谷 寿馬

白梅の白へ鋭く翔ぶ初音
高槻市 川島 颯云児

浮気した傘をゆっくり折りたたむ
唐津市 山門 タミ

ロボットが人間様の靴をとり
唐津市 野田 旭恒

吹きすさぶ心の隙に東風
和歌山市 森 茜

ある時は少年になるひたむきに
姫路市 中塚 遊峰

目かくして吊り橋渡る思いの日
藤井寺市 高田 美代子

耐えたこといわず綺麗な花が咲く
岡山県 土居 ひでの

子が嫁ぎ夫と二人の恵方巻
茨木市 藤井 正雄

かしてみな力ではなく技がいる
和歌山県 寺田 裕美

去るものは追わず裸木凜と立ち
静岡市 渥美 弧秀

教の子の菓子です妻が茶を入れる
島根県 榎原 秀子

照る日曇る日二人の道を五十年
弘前市 真喜内 實

平成元年冬快晴ばかりです
和歌山市 山田 高夫

輪廻とや影つきまとう走馬灯

大和高田市 加藤 松次郎
真白な髪で逢いたい人がいる
松原市 小池 しげお

鳥籠のかなしいポーズ見てしま
西宮市 瀬尾 六郎太

鄙びたる村にも一億どうすべ
広島県 森川 抜智

漢字が読めカタカナの意味わからない
大阪市 兼松 宏安

方言を聞いて車内は旅の味
羽曳野市 吉川 寿美

一言を呑んだ喉元が寒い
豊中市 辻川 慶子

人は皆生きてる限り風の中
* 豊中市 中桜塚三丁目13-15

投句先 千560 橋高薫風苑(ハガキに3句)

NHK川柳募集

課題 「チャンス」 選者 橋高薫風

締切 4月10日

(ハガキに三句以内)

投句先 大阪市東区馬場町3-43

NHK大阪放送局 ふれあいラ

ジオセンター 川柳係

発表

4月30日(日) ラジオ第一放送
午前11時5分から

水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

田中 叶

はいはいととても便利な妻がいる

小谷 美つ千

給料が銀振りになってしまった今たとえそれが妻のポーズにしろ、はいはいと返事をしてくれるのはありがたい。ましてや便利な妻ではなおのこと。しかし、ご用心。子育てを終えた妻は女に変身し自立するそうである。底抜けに明るい女酔っている

三井 三津子

作者は忘れたが、こんな句もあります。

笑い声絶えざる人の失踪す

三津子さんの意に反するかもしれないが、あわせて味わうと句の底に流れているかなしみが胸を打ちます。

大声を出すな補聴器つけてある

榎 本 蔭 児

こんな句があればこそ人生が楽しくなります。すばらしい補聴器なのに、聞きにくい話の時はきこえなくなる。

真夜中の時計が止まるおもちゃ箱

河野 青銅

おもちゃのチャチャチャの作詞が野坂昭如とは意外な感じもするが、そうでもない。時計が止まり動き出したおもちゃを見ているのは子供ではなく、たよりないお父さんでありする。

病院へこんなに軽い母背負う

小山 悠泉

啄木はたわむれに母を背負い、悠泉さんは病院へ母を背負った。時代が移り女性の平均寿命は延びたが、やはり母は小さく軽くなつてゆく。

石垣の隙間に春を待つ生命

宇野 昭代

春を待つ球根一つ植えている

森 三枝子

作者の思いそれぞれと思うが、春を待つ心にかわりはない。暖冬異変が続く二月というのに、私の住んでいる社宅のまわりにもふきのとうが芽を出した。

ポケットには明るい夢だけ詰めておこ

藤井 高子

生きている限り喜劇へ目をむける

酒井 靖子

たしかこんな歌もあった。

「あしたという字は明るい日と書くのね。」

倅せを封じこめたい赤を着る

酒井 靖子

遠くはノラもいる。一度きりの人生。結果はどうあれ、今は真紅のバラの花。

相談を受けてもボクもカネがない

山田 保蔵

年代によっていろんな情景が浮かんで来ます。とりあえずはビールで乾杯。次は、このコップで日本酒といきましょう。冷めないうちに召し上つて下さい。ボクにしてあげられることはこれだけです。

速達にします返事ほしいから

野村 京子

普通返事がほしいと書くところ、返事ほしいと十六字にしてあり、熱くせつない思いが伝わって来ます。

あせらずに待とう割符がきつと合う

野村 京子

でも時々、頬杖をついて軽い溜息をつくことはありませんか。とてもいい顔をしています。

折りたたむほどに小さくなった夢

池 森子

夢を描いた一枚の紙があります。半分に折り、二枚四枚八枚十六枚……。息を吹きかけると紙吹雪になりました。

伝えたい事があるから酒を注ぐ

小熊 江美

似心伝心とはゆきません。少しお酒を注がせて下さい。そして、聞いて下さい。伝えたいことがあるのです。

爽やかに大人を自覚するはたち

小林 英子

油断した蛇口小声が漏れている

岩切 康子

首音のむ

小出智子選

還暦になったらものが言えるかな
松原市 佐藤 藤子

いつまでも財布に鈴を付けている
西宮市 林 はつ絵

他人ごとのように余命が延びていく
結果論 わたしを責めるのはよそ者
茨木市 堀 良江

旅帰り旅立つ人とすれ違い
茨木市 堀 良江

風花は娘の町からのメッセージ
羽曳野市 吉川 寿美

こともあろうに自分の影に蹴躓く
吉川 寿美

明日あり今日あり腹は八分目
吉川 寿美

猫のことがわからないのを幸いに
尼崎市 春城 年代

金持ちといつも話がくいちがう
鳥取県 さえきやえ

吉報がすべての雑音消してしま
和歌山県 中尾 政子

弾み癖ついてる毬で手におえぬ
和歌山県 桜井 千秀

無人駅 蛇口の水が漏れている
宝塚市 丸山よし津

笑い皺強い味方でいてくれる
大阪市 西山 楓染

心の門少しゆるめて春を待つ
岡山県 山本 玉恵

サルビアの朱鮮やかに二度童子
岡山県 矢内寿恵子

こつこつにもの見事にしてやられ
大阪市 古川美津枝

パッチワーク恋のかけらを継ぐよう
西宮市 西口いわゑ

夢から覚めてしみじみさむい羽ふとん
和歌山県 西山 幸

諦めが静かな湖に変えていく
和歌山県 山口三千子

旧友がいる安全地帯もっている
八尾市 宮西 弥生

寒星の手頃を一つ指にはめ
寝屋川市 宮崎 菜月

相応しいことばをさがす雪催い
和歌山県 後藤 正子

肝心なことばを今日も言いそびれ
大阪市 鈴木 節子

かわいなおんな私の中に居て弾む
富田林市 池 森子

哀しみを耐えてる人と気がつかず
藤井寺市 高田美代子

退職の一日秋の空のよう
堺市 三浦 和子

友が背に残してくれた手のぬくみ
吹田市 井上 照子

色鉛筆 主役は赤と思ひこみ
守口市 結城 君子

暖冬へ寒中見舞出しそびれ
大阪市 山田 妙子

霜の朝ぬくもりがある人の声
有田市 松井かなめ

孝行にとつても弱い涙つば
和歌山県 田中 みね

さつそうと北風背なを押ししてくれ
島根県 松本 文子

ひなあられ置くと三月らしくなる
和歌山県 染道 佳明

泣けるだけ泣いて明日にしてしま
和歌山県 田中 輝子

ハンカチが乾きかなしみもうすらく
堺市 高橋千乃子

豆炭の意地で大豆が煮えている
和歌山県 寺田 裕美

いずれ来る別れに荷物軽くする
米子市 服部 朗子

神様のお力添えを待つばかり
富田林市 藤田 泰子

抱いた子の重さは愛の重さかも
高槻市 笠嶋恵美子

無言電話向こうに確か人がいる
西宮市 奥田みつ子

柳誌なお私の駆け込み寺があり
岡山県 土居ひでの

亡父母が節目節目に來て座る
香川県 上藤 多織

生も死もあなたまかせのもらい水
八尾市 高杉 千歩

かあさんの合せ鏡を見て育ち
 万一を思い肌着は替えて行く
 逃げるのがとても上手な蟹気楼
 雨続き神経痛が喋り出す
 肩パット男がみんな小さく見え
 平成へ明治の姑の手を引いて
 枯芒明治生れは寂しがり
 譲られたシルバースhirtにうろたえる
 ライバルが心をゆるすところにいる
 有為転変 私ひとりが瓶の底
 仁王門くぐると風が温くなる
 早春の桜の幹の内緒ごと
 残り火を消してはならぬ化粧する
 防音窓ときどき開けて音を聞き
 黒豆が艶よく煮えている自信
 頑なに昭和を綴る父のペン
 危険信号出たから軽い靴にする
 出不精の靴を履かせた電話ベル
 だれに逢うあてもないのに靴をはく
 傷口が小さくちさくなる小指
 強い口調 そこに真意があるのかも
 もう一本良いではないか松の内
 春の子感絹のブラウスでも買おう
 寒椿の白へやましいことひとつ
 もうひとりの私恋をしています

寝屋川市 稲葉 冬葉
 松原市 北野 久子
 堺市 神原 文
 大阪市 稲本 凡子
 和歌山市 坂部紀久子
 青森県 福士 トキ
 河内長野市 植村 喜代
 大阪市 島村美津子
 米子市 白根 ふみ
 岡山県 千原 理恵
 米子市 石垣 花子
 堺市 近藤 豊子
 米子市 茂理 高代
 大阪市 本間満津子
 堺市 小西 小雪
 和歌山市 福本 英子
 米子市 光井 玲子
 羽曳野市 福田満洲子
 米子市 青戸 田鶴
 和歌山市 森 茜
 熊本県 岩切 康子
 和歌山市 砂山千枝子
 米子市 政岡日枝子
 高槻市 河瀬 芳子
 鳥取市 小谷美つ千

ほほえんで自分自身を和らげる
 ゆきずりの風のなさを真にうけて
 寒椿 別れてからの長い冬
 ちぎり絵にちいさな春ちぎる
 老妻の無神経にはかなわない
 すぐ踊る阿呆に蝶が群れている
 米櫃の軽さ重さのものがたり
 饒舌の寂しさを知る影法師
 B面がやっぱり好きなあまのじゃく
 側室の墓に一輪椿置く
 言い訳が出来ずいるのは長所かも
 ここちよき旅のつかれの寝息きく

和歌山市 堀畑 靖子
 堺市 桜沢あかり
 姫路市 都里 遊光
 兵庫県 倉垣 恵美
 大阪市 上江洲勝子
 大阪市 津守 柳伸
 大阪市 神夏磯典子
 姫路市 丁坪サワ子
 大阪市 松尾柳右子
 静岡市 増田 ふみ
 堺市 板野 美子
 奈良市 米田 芳子

ゴシックの一句目。還暦ぐらいの年になったら、一人前にもが
 言えるようになるだろうかとの自省の句。年を取ることへの期待も
 あっているのです。二句目。毎日しなければならぬことがあり、
 張りのある生活をしているから、まるで他人事のように余命が延び
 たと感じられるのでしょうか。三句目。入れ替り立ち替りして、世の
 中はずまくいっているのだと改めて思ったことでした。四句目。人
 生にはいろんなことがあるからおもしろい。失敗をしては立ち上り、
 そして強くなってゆくのです。五句目。知らないことは知らないま
 まが幸いなこともよくあること、もし猫の言葉が解つたら、きっと
 知らん振りの出来ない作者でしょうから。

ハガキに雑詠3句。毎月10日締切。

投句先 干544 大阪市生野区勝山南1-18-10

小出智子

箱

仁部四郎選

平成の夜明け菓箱の雛が翺ぶ 朴竜
 しわくちやの札混じつて募金箱 正坊
 うつ憤を強くぶつける投票箱 木魚
 ありがたや救急箱に用がない 豊
 眞実は極の中で言おうかな 理恵
 銀行の箱はどれにもカギが要る 明水
 過ぎたことよくよしない弁当箱 颯云児
 踊り子の涙染みてる衣装箱 高明
 コーヒーの釣りをあゆみの箱に入れ 正敏
 景品は箱とリボンで見栄を張り 幸夫
 一円貨寄り添いおうて貯金箱 義美
 コンテナの荷役に消えた力瘤 勝美
 玉手箱あけて五年が過ぎました 智加恵
 単身の荷へ針箱を入れておく 美子
 それらしく見てもらいたい化粧箱 治
 おもちゃ箱取り上げられて塾通い 本蔭棒
 ふるさとの味折返しみかん箱 螢
 ばあちゃんにむつかしすぎるおもちゃ箱 満津子
 箱庭にこの家の趣味が咲く暮し 島
 箱入りのふりをしてるジンフィズ 正子
 節くれ手箱の指輪が欠伸する 遊峰
 ボロボロの歩兵操典本箱に 落児

赫々の武勲収まる箱の中 旭恒
 ドル箱を持つ黒幕に操られ 高夫
 揚げ底がさまになつて土産物 明吉
 化粧箱作戦プラン詰めてある 博子
 その割に苦情がなかった投書箱 白漢子
 箱の私語聞きつづけてる宅急便 典子
 かりそめの恋をしまつてかたく蓋 文
 重箱の隅をほじくる職に生き 芳仙
 菓子箱を一度疑う椅子に居る 可住
 飛び箱が飛べたと孫が書いてくる ろ亭
 玉手箱こころであけてみて見たい 紀一
 皇室の箱をテレビが開けてくれ 喬水
 くやしきは箱一杯のラブレター 博友
 箱詰めになる日へ鮭のただ泳ぐ 大柏
 玉手箱あけた太郎のように老け どんたく
 住
 箱入りと添うた男の市場籠 鉄治
 びつくり箱をたくさん持っている息子 重人
 箱詰のいちご序列を意識する 都姫子
 トロ箱に銭をぎつしり選挙戦 次男
 まだ鳩が出そうで箱をとつておく 多織
 人
 しこりまた残し投票箱しまう 雄々
 地
 風呂敷に白木の箱を包んだな 喜与志
 天
 重箱の隅で意見がすれ違う 白峰
 軸
 背広族箱から出るとカゼをひく

理想

越村枯梢選

世に狎れて理想は少しずつ瘦せる あやめ
 まっ白なページが理想抱いている 重人
 パソコンで理想の嫁を打つてみる 杏村
 亡夫想うやっぱり私の理想像 理恵
 理想少し下げると楽な風が吹く よし津
 理想とははるかに遠い人と居る 三千子
 老眼鏡かけて理想が見えますか 艶子
 あきらめも半分ほどの理想追う 狸村
 潔癖が裏目になつた理想主義 智加恵
 仲人が理想の夫婦らしく見せ 幸夫
 コンピューター俺の理想が分かるかい 幸夫
 絵にかいた理想やっぱり絵のままに タミ
 児が描く似顔絵 理想の母の貌 義美
 理想境 先祖は平家の落武者で 雀踊子
 父さんのようなら嫁くと言ふ 寿美
 理想像 描けば白馬の騎士となり どんたく
 若者の理想淋しく聞くばかり 落児
 理想追う少年の瞳へ雲が飛ぶ 新造
 かけぬけた風が理想を消したがる 遊光
 自画像の理想 鏡にバフ叩く 洛醉
 理想像描き続けて病んでいる 素身郎
 あの頃の理想母校の大銀杏 宵明

路 集

齢相応の理想で旨い酒の味
 理想郷やっぱり蛇もやって来た
 理想には遠く冷たい回り椅子
 遠い日の理想は何処 モンペ履く
 還暦の遺影は理想を抱いたまま
 定年の理想の像が点になる
 理想などとうに忘れたコップ酒
 理想もとうくに捨てた紙バック
 理想郷逆さに覗くから見える
 履歴書に理想を記す欄がない
 理想とは別に女は毛糸編む
 理想論コンパの酒が聞き飽きる
 理想論並べて今日も襪のれん
 理想とは所詮女の夢芝居
 レモンティーまだまだ続く理想論
 理想には遠いが三度の飯を食う
 理想まだ捨てず長屋でサンマ焼く
 霧晴れて野良はたのしいユートピア
 理想などついぞ語らぬ欠茶碗
 十人が十の理想で村を出る
 カトリアを理想にしてた夫ふぐり
 退職へ二人で探す趣味二つ
 退近しいまだ理想の絵が描けぬ
 喜寿近くかけろうてゆく理想像

始める

岸野 あやめ 選

揃うまで待てず始める花見酒
 始まっています皆さんお静かに
 松飾り外し「平成」始動する
 本心を始めて明かす花あかり
 結婚は旅行が済めば始めます
 平成へ始めて貰う母子手帳
 胎動のうれしい足が蹴り始め
 始めての節句祖父母の笑顔来る
 よっこらしよ歩き始める紙パンツ
 包丁の音で始まる母の朝
 トップ集団に始めはつけている自信
 始めだけ力んで後が続かない
 二次会になって本音が出始める
 中流のつもりゴルフも始めたよ
 裏切りをしらぬセーター編み始め
 新天地もとめ旅立つ始発駅
 六十路から始める趣味は鈍行で
 親戚へまずセールスの売り始め
 相談を始める前に樹をゆする
 始めから次期をねらった演技だ
 子離れの代りベットの餌を飼い始め
 お付合い始めてケチな人と知る
 通彦
 雀踊子
 義美
 玉恵
 四郎
 慶子
 喬水
 兼治郎
 高夫
 清芳
 悠泉
 軒太楼
 保州
 克子
 志重
 娘が又語り始める鯨尺
 朝シャンで妻が羽搏き始める日
 始めから出直しします春の風
 ジョーカーを持って始めは負けておく
 始まりは何でも二個の新世帯
 片道切符だけで始めるのも若さ
 仕送りが始まる臍に添え木する
 思いきり食べて明日からダイエツト
 エンジンの音で始まる島の朝
 顔造り始め無口になるピエロ
 清張を読み始めると動けない
 始めからの仲間に残る君と僕
 リハビリを始めた両手に血が通い
 引出しで腕き始める一円貨
 何始めはったか隣気にかかり
 始めるにあたっての一言多すぎる
 斉戒沐浴仕事始めの向槌
 禁煙を始める君と破る僕
 始業ベルまずは社訓を読まされる
 咲き始めた時からバラは燃える性
 始めたら頂上がない五七五
 冷戦がはじまるきざし妻無口
 変化球投げることない始球式
 手も口も清めて選を始めます
 多賀子
 浪速子
 豊
 佳雲
 やすお
 三五島
 智加恵
 都姫子
 明水
 京子
 博子
 不二
 旭恒
 可住
 喜一郎
 虹汀
 本蔭棒
 新造
 高子
 正敏
 公一
 坊

初歩教室

題 — 花

阿萬 萬的

今月の課題「花」は、四月号に発表されるのですが、皆さんの作句は一月末から二月早々でしたので、季節的に多少ずれがあったように思われます。そこで先ず梅の句から

- 山の辺に人待ち顔の梅の花 政子
 梅の里帰っておいでと花が呼ぶ 美子
 盆梅の脹らみ湖北に春近く ミツエ
 (盆梅の脹らみ湖北に春近く) 松次郎
 鶯がとまって梅は花急ぐ
 (鶯のささ啼き梅は咲き急ぐ) 三千子
 梅咲いて鳴く鶯へ遠眼鏡 好笑
 境内は憩うところに水仙花
 (境内の憩いへ梅が匂うて来) 時弘
 暖冬に出番も狂う梅の花
 冬から春へ移り変るときにも花があつて
 冬を語り山茶花一つひとつ散り ダン吉
 山茶花の蕾生命のある限り 隆雄
 (山茶花の蕾はぐくむ冬の雨)

木枯しの花毛氈に泣く熊手 章久

(散り山茶花に少うし熊手の手を休め)

雪の庭紅一点の寒椿 志洋

(雪の庭椿一輪血の如く)

花一輪雪融け道に春を告げ 明吉

(露の臺雪融け道に春を呼ぶ)

花時計暖冬異変へ耳澄ます 方子

(暖冬異変花時計さえ狂いがち)

ツア一馴れ花見へ予約寒にたて 登代

(異常気象が花見の予約を慌てさせ)

春を待っているのは人だけでなく、花も又

寒空に花の蕾も春を待つ 志げ子

雑草の花の蕾も春を待つ みね子

春近し花の蕾に聞く苦勞 芙美子

北風に愚痴もらしたい矢草車 光子

下五をあっさり「花もあり」としては。

野に咲く花には、愛おしさを感ずるもので

一輪の野に咲く花に香りあり 職

驕らない野菊で人に愛される 富恵

何の花名もない花に魅せられる 清柳

(野の花は野の花なりに春を知り)

控え目な野の花の美に教えられ 静子

気に入らぬ風もあろうに花の種 すみれ

(気に入らぬ風もあろうに風媒花)

蒲公英が体を張って春謳歌 太一郎

(野の花も生きる生命の実を結ぶ)

ひっそりと季節知っちゃう過疎の花 三洋江

片隅で悴せの花は小さく咲く 遊峰

よく見れば蝶にも花の好き嫌い 円女

菜の花に二匹の蝶が戯れる ミツエ

(菜の花に戯れる蝶春匂う)

お茶、お花、そこに日本の本当の美が 喜代子

茶花活け点前よばれて春を待つ

(茶花一輪茶室を春の色にする)

菊一輪切るに戸惑う花鉢 みね子

枝ぶりに一鉢入れ花活きぬ しんじ

(枝ぶりに鉢を入れる師の正座)

花活けて和服が似合う淑やかさ 実

(花活ける和服正座の美しさ)

花の美を知り尽して花器の彩 サワ子

(花の美を活かす備前の淡い艶)

だが、こんな娘さんも 義

けいこ日の花はテートの邪魔になり

娘ごころとはデリケートなもので

押し花を封書に愛のメッセージ みね

押し花に淡い恋路の思い出が とく子

(押し花に思い出がある本のしみ)

人恋し花も恋しく厄参り 遊光

沈丁花の香に誘われて回り道 静子

花占い空しい願いと知りながら 照子

花言葉の謎解きせぬまま去った人 信義

暖かい誘いの雨に迷う花 サワ子

そしてやるせない心を夢二の絵に託して

水仙は夢二に似てか淋し気に 信一

壁の花宵待草のやるせなさを 圭坊

(夢二の繪宵待草に似た女)

亡き人を偲ぶ時にも花は心の糧として

菜の花を供えて亡夫にも春を告げ 志華子

命日に花だけを買った店の つえ子

花踏んだ足で仏に会いに行く 多織

(花びらを踏みお彼岸の暮参り)

供花して祖先に詫びる罪一つ 敬

(ご先祖へせめてお花の水替える)

級友を悼む机上へ花飾る 美恵子

道の供花露の命がいとおしい 香子

花束を投げる海今日は波静か 保夫

(花束へ小雨そは降る事故現場)

無縁塚そばの雑草淋し花 昭治

(無縁塚の名もない花へも春の雨)

佳助の婿やかにして姉は逝き すみれ

時節柄、花博の句もありました。

花博も避けて通れぬ消費税 露芳

花博に力を合わす好きやねん 道胤

そして世の中、片仮名の花が増えましたね。

カタカナの花がめつきり多くなり 金吾

花屋さんひときわ目立つ輸入もの 登代

ジャンボ機で洋花もやって来る日本 保夫

(ジャンボ機で洋蘭日本へ翔んで来る)

四季外れ花の季節も忘れがち 高雄

温室の花は明日を知らされず 和子

(温室で季節離れた花が咲き)

花作りも私たち素人には大変なもので

カタログの花美しい注文書 志重

猫の額程の庭にも花咲かせ 艶子

(団地サイズの庭にも春の花を植え)

さてもろもろの花を

暖かい雨に葉牡丹のびざかり しづ子

(暖かい雨に葉牡丹のび過ぎて)

大きな目のランドセルから花が見え 小鹿

(桜ひらひら入学の日のランドセル)

花籠の宅急便へシャッター押す 三千子

(宅急便の花籠祖母の誕生日)

花鳥風月なぜ酒がない草だんご 治

(花鳥風月日本人にはうまい酒)

短命が人喜ばせ散るさくら 呼風

(落花紛々歴史の里に散る桜)

満開の花も愁いに沈む花 美子

(満開の花にも愁いの影を持つ)

湯の郷へ冬の客呼ぶ薔薇の花 喜与志

下五は薔薇ではなく、寒牡丹では如何です。

ご晶順の花輪で映える開店日 芳水

(選挙目当ての花輪もまじる開店日)

水上に見事に咲いた花の舞 志洋

シャッターチャンス咲く瞬間を見逃さず 露芳

春一番花粉症まで連れて来る 金吾

許してはならない花に触れてみる 宏安

何となく花が散るので慌て出す 正子

福寿草正月過ぎて忘れられ 信一

花賞でて妻の愚痴には耳かさず 数彦

これが花アロエを植えて六年目 勝美

いじわるな花貴女がもつと知りたくて 治

花一輪人の温みの無人駅 一耕

草引く手董の花は残しとく 喜与志

花それぞれ自分の散る日を知っている 円女

花の絵が世を騒がせるモノ・ゴッホ 良三

ひと枝を猫に会釈をして貰い 和子

正直が話の花をしほませる 信義

気紛れな俺に似ている木瓜の花 高雄

天皇のご逝去白い花を買う 菊枝

今回は作句の時が季節外れのせいもあって、

むずかしかったようですね。ではまた、来月

を期待しています。

◇

題「傘」 4月10日締切(6月号発表)

ハガキに5句以内

「草」 5月10日締切(7月号発表)

宛先 〒598 泉佐野市中庄一〇八一九九

阿萬 萬的

▼訂正 三月号の愛染帖(56頁)の栗原春子は栗谷春子の誤りでした。

(編集部)

■ 句集紹介

黒川紫香『むらさき』

奥田 みつ子

川柳を始めたばかりの貴女に、とても素晴らしい御本を紹介しましょう。

川柳塔副主幹、そして私たちの西宮北口川柳会会長として敬愛してやまない黒川紫香先生の句文集『むらさき』です。川柳はむずかしい、何をどのように詠んだらいいのか判らないとこぼしていないで、じっくりこの一冊を読んで御覧なさい。

どの句も少しもむずかしくはありません。けれど何でもない日常的な事柄がなんと温かく、しみみりと微笑ましく感じられ、時にはその音が聞こえ、その場にいるような緊迫感さえ胸に深く伝わってきます。特に奥様を亡くされた時の句などは、本当に胸を打ちます。そして北海道から沖縄まで、また香港、シンガポール、ハワイなどにも及ぶ旅路の句は日本全国が川柳に彩られ、居ながらにして旅行している気分になります。

尼崎市文化功労賞受賞のおよろこびの先生のお写真にも、序文「紫香を語る」座談会にも、最後のむらさきの章のいずれにも、先生

の誠実な温かいお人柄が溢れています。

麻生路郎先生の「いのちある句を作れ」のお言葉通り、五十有余年にわたって川柳を作り続けられた情熱、また周りの人々に対するこまやかなお心くばり、「続三八」を出したかったと言われる深い友情が胸に迫ります。

作句を始めて日の浅い私たちに川柳の良さ、川柳を続けることの大切さ、喜びを教えて下さる貴重な御本と思い、御紹介します。

お 礼

去る三月五日、尼崎市文化功労賞受賞並びに句文集『むらさき』発刊を記念しまして尼崎市サンシビック大ホールで川柳大会を催しましたところ、東から西から多数のご参加を得、事前投句者四一〇名、出席者二六〇名という盛大な会となりました。賑やかにそして和やかに催すことができましたのは、皆様のご支援の賜物と感謝しております。有難うございました。

なお、句文集『むらさき』ご好評を頂まして残部がなくなりましたので、目下増刷いたしており、四月中旬に出来上がることとなっております。ご迷惑をおかけしたことをお詫びするとともに、ご予約をお願いできれば幸いです。

黒川 紫香

川柳サークル卯の花

5周年記念川柳大会

とき 5月17日(水) 正午開場

ところ 高槻市民会館4F 402号

(阪急高槻市駅下車南へ徒歩7分)

会費 1000円(粗品・発表誌呈)

柳話 「辞世・名吟あれこれ」

古下 俊作氏

題と選者(三才呈賞)

「五」 黒川 紫香選

「丸い」 奥山 晴生選

「華やか」 墨 作二郎選

「集う」 岩井 三恵選

「貫禄」 西尾 栄選

*席題なし 投句拝辞

締切 午後2時(各題2句以内)

照会先 辻 白漢子

〇七二六—96—四〇二二

川島諷云児

〇七二六—96—二七六五

主催 川柳サークル卯の花

後援 高槻市教育委員会

高槻市文化団体協議会

日本川柳協会

川柳塔社

柳界展望

集録一敏・武庫坊

★日本川柳協会は、藤島茶六理事長死去に伴い、このほど新理事長に山田良行、副理事長に広瀬反省・渡邊蓮夫、事務局長に広瀬反省の各氏を決定した。

★国民文化祭文芸大会は、今年度は埼玉県、平成2年度は愛媛県、同3年度は千葉県、同4年度は岩手県で開くことに内定。

★大阪川柳クラブは2月18日、総会を開き、西尾菜会長の木杯授章を祝うとともに、川柳功労者9名を表

新同人紹介

神保拓生

薫風・登志実・清芳推薦

彰、本社関係では西尾菜・正本水客・高鷲亜純・大坂形水の4氏が受彰した。

★番傘川柳本社は、奥田白虎理事長の死去に伴い、次のとおり新役員を決めた。

主幹 磯野いさむ(現)▽
副理事長 亀山恭太(新)▽
副理事長 梶川雄次郎(現)片岡つとむ(新)

★川柳塔わかやま吟社は、昭和63年度の4賞を決定。各賞第1位は次のとおり。

〈あおい賞〉 小出智子選
葉桜の下の広さは老いのもの
若宮 武雄

〈たちはな賞〉 松原寿子選
蹴りたけりや蹴りなわたしは丸い石 岸本 静生
〈菖水賞〉 高杉鬼遊選
風邪ひいて自分の位置が見えてくる 田中 輝子

〈課題吟賞〉 牛尾緑良選
棘抜いてあげよう痛みわかるから 福本 英子

★時実新子「有夫恋」川柳と写真と書道の展覧会」が次のとおり開催される。

4月20日―28日 梅田セ
ンタービル別館(大阪市
北区中崎西2-4-12)

5月15日―26日 三交ビル一階(名古屋市中村区名駅3-21-7)

▽同人消息△
■大原葉香氏(姫路市・同人)は句集「谷間のささやき」を刊行。頒価は送料とも千円。希望者は姫路市西延末266-1大原信好へ申し込めばよい。

故 尼緑之助先生一周忌 追悼川柳大会

日時 5月21日(日) 午前10時開場
会場 高松公民館(出雲市松寄下町)

(出雲市駅から白枝交差点を大社街道へ五百米)

お話し
兼題 「雲」
「ふるさと」
「酒」
「慕う」
「努力」
「夕陽」
「風情」
「身内」

西尾 梨選
柴田 午朗選
橘高 薫風選
野村太茂津選
小林由多香選
津川 紫叻選
八木 千代選
未定

各題2句・席題なし

会費 三、五〇〇円(小宴・昼食・発表誌)
欠席投句〆切り 5月10日必着(用紙適宜)

◎欠席投句の方は投句料五〇〇円添え
左記の大会係まで郵送してください。
(発表誌呈をお送りします)

☎693 出雲市松寄下町二八四

吉岡きみえ方 川柳大会係

主催 いずも川柳会

本社 三月旬会

三月七日(火) 午後六時

メンスズファツヨンセンター

前々日の五日、尼崎市文化功労賞受賞・句文集『むらさき』発刊記念川柳大会を盛会のうちを終えた黒川紫香氏をはじめに謝辞。

おはなしは河内天笑氏。去る昭和五十四年八木摩天楼氏から堺川柳会を引き継いでからちょうど十年にあたることから話をはじめ、音楽家志望のハーモニカ少年が戦災で家を焼かれて大工志望に転向、大学を出た時はマスコミにあこがれたが志成らず、印刷・紙工などの仕事にかかわれている中で川柳にめぐり会ったというところで惜しくも時間切れ。

初出席は鍋島十歩氏(柏原市)、月間賞は阿萬萬の氏が獲得。

(進行) 岳人 (受付) 泰子・美緒
(記録) 射月芳・月子

出席者 紫香・美智子・笛生・メ女・杜的凡九郎・すすむ・鬼遊・太茂津・泰子・美緒幸・敏・小路・狸村・作二郎・白漢子・栗・

千秀・みね・佳秋・十歩・英子・悦郎・勝美
眉水・しげお・柳宏子・三男・重人・満津子
典子・天笑・颯云児・射月芳・仙吉・勝晴・
吐来・文子・いわゑ・みつ子・利武・喜風・
柳伸・英一・翠公・薫風・冬葉・文秋・金太
恭昌・正坊・楓楽・憲太郎・章久・頂留子・
外吉・英壬子・安藤寿美子・悟郎・元紀・八
斗酥・歌子・藤子・美津留・昭子・美代子・
智子・白洋・吸江・度・岳人・萬的・東雲・
月子・一二三・雀踊子・寿美・寿子

席題「耳」

墨 作二郎選

難聴へささやくような梅使り
離婚する噂へ耳が寄ってくる
スナックの耳はエコーに馴らされる
父さんは耳で見て来た嘘を言う
耳をつまんでゆっくり策を練り直す
耳の日で一日耳を休ませる
とんちんかんに聞いている父の
補聴器の耳もとときき栓をする
花だより聞いては春の耳になる
慈悲分かつ仏大きな耳を持つ
念仏を聞く耳母はもっている
寝められる時盆裁に耳がある
聞く耳は右で左は予備にある
咀嚼することを知ってる父の耳
雪どけの音がきこえる春の耳
馬の耳にも消費税が聞えます
今もまだ騙されている母の耳

小路 颯云児
天笑 東雲
寿子 月子
文子 しげお
幸 笛生
眉水 天笑
翠公 泰子
美代子 敏
笛生

鼻と耳だけはピエロが念を入れ
耳寄りな話焚火に輪がでける
標的にされる耳なら大きめに
喝采を夢にみている耳である
贈取贈厄温そろそろ耳が病んで来た
身勝手な音ばかり聞く白い杖
雑音も聴こえるようにする耳鼻科
野仏は耳をときとき赤らめる
ええ耳をしてると仲居寄ってくる
耳に暇出して同居をしいます
福耳をときときつまむ癖がつき
耳うちの欲に奈落がまちうける
再会に耳の形がよく目立つ
片方の耳で海鳴聞いている
王様の耳落ちていた砂漠
エンドレステープが好きなボクの耳
耳に泣く風雪国はまだ醒めず
不幸せばかり小耳によく入る
悠然と語る和尚の丸い耳
王様が兎の耳を所望する
茫洋と風吹く視野に耳を置く
行き止まりの耳でかけ口が消える
イヤリング今日不機嫌に揺れている
耳なんか要らない何度だまされる
わが耳に雪崩春風生きている

席題「笑う」

山本翠公選

私に笑ってくれる絵馬がない
吹き飛ばす笑い男を信じてる

佳秋 颯云児
岳人 美智子
寿美 天笑
英一 天笑
十歩 歌子
重人 歌子
しげお 頂留子
みつ子 智子
藤子 白洋
萬的 萬的
外吉 外吉
美智子 杜的
美智子 美智子
美代子 美代子
柳宏子 柳宏子
外吉 外吉
作二郎 作二郎

あいまいに笑つて風をやり過ぐす
 箸こけて笑う少女は病んでいる
 筆まめですねとポストが微笑する
 父還る母の笑顔はホンモノだ
 お見合の可愛い笑顔が好きになる
 心配を軽く笑つて往なされる
 泣きぼくろある娘がとともよく笑つ
 心からはほほ笑む母の割烹着
 あやとほに赤いホッペがよく笑つ
 初恋の昔をくすぐり笑いななど
 サクラサク笑いを絵馬も待ちわびる
 退院の近いベッドがよく笑つ
 よく笑うおんなが配るチョコレート
 笑い顔絶やさず恋をせぬ女
 笑い袋男の影を軽くする
 伏せてある病気笑いも枯れてくる
 立読みの客の笑いが氣にくわぬ
 微笑仏に触れたくなったのは詐欺師
 野仏は欠けているけど良い笑顔
 マネキンを脱がして笑う試着室
 よく笑う女で釣銭間違えぬ
 ひとりでも泣くがひとりて笑えない
 まだ大丈夫社長さんが笑ろてはる
 雑踏のひとり笑いが気味悪い
 笑顔が消えて胸にかさかさ枯葉鳴る
 妻がよく笑う土曜日恐くなる
 フルコース笑い上戸は誘わな
 ライバルの目が笑つて不整脈
 どん底で笑い袋を縫いあわす

楓 楽
 岳 人
 眉 水
 い わ る
 歌 子
 英 子
 美 智 子
 み つ 子
 小 路
 重 人
 白 溪 子
 幸
 小 路
 萬 的
 歌 子
 鬼 遊
 十 步
 作 二 郎
 憲 太 郎
 杜 的
 満 津 子
 度
 射 月 芳
 悦 郎
 典 子
 外 吉
 正 坊
 柳 伸

母を笑わす母は補聴器かけている
 秘書にして女房にして山笑う
 無位無冠腹の底から笑い合つ
 山彦も一緒に笑う女連れ
 笑わない男が一人いて困る
 笑い羅漢笑うと蜂が飛んでくる
 補聴器がはずれて笑顔ばかりする
 笑つてる男はいない兵馬備
 八方破れ阿太大笑をする一手

兼題「古い」

江口

度選

作二郎
 英一
 楓 楽
 千 秀
 正 坊
 冬 葉
 作二郎
 正 坊
 翠 公
 古本屋にこりともせず釣をくれ
 古くさい義理を通して左遷され
 古箏笛母の涙に軋む音
 ボディブローのように古傷妻が突く
 二代目にすこし煙たい生字引
 キヤリアだけ古く出世に遠くいる
 古いと言うなお前もいずれ古くなる
 なつかしのうたに古傷埋めてある
 老舗の前で古い思想になつて
 明治の父がでんと構えている老舗
 ふところ手古い話は大好きで
 春だから私をリフォームしてみよう
 真つさらの本もまじつて古本屋
 古い敵ゆっくり和解考える
 古い男が峠をおりて行つたまま
 古傷に触れられてる遠回り
 御利益がありそう古寺のたたずまい
 下駄箱を古いコントが出て行かぬ

尼崎 春の川柳大会

とき 5月7日(日)11時半開場
午後1時半締切

ところ サンシビック尼崎
(阪神尼崎駅から南西徒歩5分)

お話し 古下 俊作氏

題と選者(各題2句) 投句拝辞

「帯」	小出 智子選
「緑」	田頭 良子選
「銀」	鳥本 泰選
「旗」	田淵 定人選
「杭」	森田 栄一選
「峠」	黒川 紫香選
「跡」	伊東 静夢選

会費 六〇〇円(作品集郵送)

主催 尼崎川柳同好会

黒川紫香氏から
受賞・句文集発刊を記念して
金一封拝受いたしました

川 柳 塔 社

仮名遣い古いが母の生きた文

おさがりでいいと嬉しいことを言う

いたずらな風に古傷さわられる

古着縫う母を信じる糸切齒

古傷がときどき酒を飲みたがる

寒に耐え苦に重みの梅の花

蛇だつて古い殻なら脱ぎ捨てて

古い道たどつて春を摘んでくる

孫抱くと古い話がしたくなる

ナウイ花明日の朝は古くなる

村八分古い掟がぬけだせぬ

古い話がつても好きな綿菓子屋

使い古した鍋がなんでも知っている

顔を見て古い借金思い出し

古時計一番正しく鳴っている

古井戸が好きで蛙のまま果てる

火葬場までの古い景色も春になる

落ちつきを何処かで見せる古い川

煮ころがしころころ笑うし母を煮る

美人ママ古い話はしたがらず

旧道を歩くと風がやわらかい

水鏡古い手紙を読み返す

賞味期間とつくに過ぎた菓子貰う

兼題「敵」

西出楓楽選

俄雨敵も迎への傘が来ぬ

敵の眼でわたしを叱る影法師

喝采を敵がするまで弓を射る

敵懐心とつくに忘れた丸い肩

公一

小路

諷云児

悦一郎

英一

勝美

敏

昭子

吸江

文子

雀踊子

十歩

美代子

天笑

美智子

英子

作二郎

紫香

瑞枝

白浜子

金太

荒介

度

早苗

千代

荒介

勝美

敵らしく手強いほうが面白い

情けある敵の言葉が甘辛い

土壇場で敵を味方にさせた錢

その内に主演を果たす敵役

遠い日の記憶に敵へ砂あらし

腰の低い敵が最も手強いぞ

一人前になった証拠に敵がいる

雪掻きの汗平等に敵味方

錠剤をこっそり敵ものんでいた

敵もさるものと言われるだけは戦おう

棒グラフ敵一人増え二人増え

乾杯へ味方ばかりでない拍手

負けて勝つそんな敵対心という

妻という敵へ策練の終電車

敵の噂を聞かなくなつたラーメン屋

八人目の敵へ差出す靴すべり

ボタンひとつはずして敵と会っている

或る時は敵にもなつてやる自信

罪と罰秘書を敵にはまわせない

贅沢は敵で育つた子もグルメ

敵のない男は信じないことだ

五時から敵も味方もいる呑み屋

人情のあるのが敵に居て困る

敵方に味方に欲しい男いる

敵に塩もろて疑い深くなる

敵の目をこまかす狼煙あげている

抜きあえば相打ちになる敵がある

宿敵の視線は曲がることがない

強敵はゆつたり春を待っている

満津子

みつ子

女

敏

憲太郎

智子

八斗醜

柳伸

藤子

文秋

幸

寿美

歌子

住秋

作二郎

しげお

白洋

小路

幸

英一

重人

狸村

佳秋

眉水

度

螢

白洋

元紀

冬葉

マア言えば敵に育ててもらう僕

敵のない男へアクビ噛み殺す

のんき節断断さしたい敵がいる

良心を敵に回して長い雨

敵にまだ診察券を見せられぬ

美しく敵が見える日勝っている

本当の敵になるのはイエスマン

兼題「譲る」

西田柳宏子選

一本気だけが自慢の親譲り

席譲る少年はずかしそうに立ち

譲られたお守り俺にもきくだろうか

席譲り綺麗な花が一つ咲く

まん中から禿けて行くのも親ゆずり

それなりの主張を持って譲らぬ子

猫舌が譲ってくれた茶碗蒸し

口ポットに席を譲る日きつと来る

おふくろの味もしゃもじも譲ります

先頭を譲ると軽い肩になる

譲るもの譲るとやたら出るあくび

譲り合う席へ他人がきて座り

譲られた席で素直にありがとう

譲る気で息子を叱る老舗の灯

席を譲って命拾うたことがある

子に譲るものは何にもなくなつた

一歩ずつ譲ると空気が丸くなり

子のことになると一歩も譲らない

七癖の中の三つは親譲り

人間国宝後継もなく一人生き

凡九郎

柳伸

重人

射月芳

昭子

典子

楓楽

選

芳水

女

すずむ

巡歩

耕花

女

千秀

諷云児

千代

諷云児

八斗醜

みね

千秀

悦郎

大茂津

螢

昭子

藤子

射月芳

利武

足跡を譲ろう子らも伸びてきた
親鴨が子鴨へ譲る餌をとる
先頭を峠で譲ることにする
譲ってばかりいて定年が来てしま
譲り合って花も蕾を付けている

みの虫の財布を母に譲られて
譲るもの持たぬ夫婦が仲が良い
鍵束をゆずると呆けになるだろ
若白髪と知らずに席を譲られる
京訛り軟い言葉で譲らない

男には生涯譲れぬ線があり
核の無い地球子孫に譲ろうよ
子にゆずる笑顔がいつも美しい
大きな父の帽子を子に譲る

ゆずられた椅子であくびが出て困る
ここまでは譲るそろばん持っている
友情で恋を譲ったバカだった
ルノール展の切符をゆずる春の風

ゆずれない杭が一本打ってある
納得をしてゆずり葉は散ってゆく
譲る気はないが流れに逆らえず

兼題「ゆつくり」 西尾 栗選

橋山へゆつくりと行く手を繋ぐ
ゆつくりとしとくれやすと茶も出さず
水ぬるみゆつくり伸びる猫の髭
暮切れのせりふゆつくり伝えよ
春雷しきりゆつくり帯をとく不倫
天国はいずれゆつくり行けばよい

千代 狸村 岳人 智度 作二郎 みつ子 雀踊子 外吉 二三 金太 三男 月子 岳人 重人 外吉 作二郎 雀踊子 千代 柳宏子 瑞枝 公一 柳伸 千代 早苗 旋風

ゆつくりと地下三尺で考える
峠は見えた何も慌てたことはない
おほる月天気もゆつくり下り坂
落ち着いてゆつくり書けとせかされる
動物園の朝ゆつくりと鳩歩く
母乗せた車ゆつくりゆつくりと
ゆつくりとする日に限り客が来る
ゆつくりと打っているのは錆びた釘
ゆつくりとめしを食べてる世帯主
大阪でゆつくり歩けと言われても
露天風呂ゆつくりつかっている端唄
少年をゆつくり許す春の川
ゆつくりと歩いて蝶に追い越され
ゆつくり来て髭なでている指定席
ゆつくりでいいよと言っておく効き目
ゆつくりと軍事郵便読んでいる
愛一途ゆつくり台詞もえてゆく
春の声ゆつくり伸びてくる日脚
ゆつくりと来るが遅れたことがない
日時計のゆつくり回る二十四時
満ち足りた日はゆつくりと陽が沈む
何時来てもゆつくりできぬ母である
ゆつくりと狼煙があがる風の向き
ゆつくりと答を出して芽がでない
ゆつくりと妻が力をつけてきた
貸して頂けずにとうぞこゆつくり
夕陽がきれいゆつくり渡る歩道橋
弾むもの抱いてゆつくりこはせ止め
ゆつくりと春の話を縁側に

耕花 荒介 勝美 天笑 萬の 千秀 諷云児 岳人 雀踊子 美代子 憲太郎 元紀 紫香 萬的 翠公 岳人 寿子 射月芳 紫香 美緒 正坊 美代子 憲太郎 寿子 藤子 外吉 杜的 小女 鹿

ゆつくりと帷をあげて春の駒
定年がうれしゆつくりゴールイン
断りの返事ゆつくり墨をする
ゆつくりとしとくなはれと放つとかれ
古墳発掘雲もゆつくり動いてる
指くれればゆつくり充てきたらしい
（清記 楓楽）

第2回

時の川柳交歓川柳大会

とき 5月14日(日)午前10時半開場
ところ 神戸市立福祉センター5階
婦人会館

(JR神戸・地下鉄高速神戸駅北へ徒歩5分)

お話 兼題(各題2句)
「種」 寺尾百合子選
「帰る」 石田 明選
「顔(貌)」 小出 智子選
「転ぶ」 山本 樸選
「的」 田頭 良子選
「湧く」 藤本静港子選
「駅」 平山 繁夫選

特別課題(1句)
「裏」 小笠原及城選
会費 一五〇〇円(記念品昼食・発表誌呈)

主催 時の川柳社



毎月25日締切厳守。一人一句、雅号を含めて20字まで。担当・玉置重人

吉川 寿美報

美子

柳柳泉尾
寝返った風の痛さよ土踏ます
自肅元年古いタンスを光らせる
私という妻へ夫からさくら草
遅かりし火照り続きの誤字脱字
新成人青春模様を如何に塗る
親切も時には線を引いておく
幸せを拾い集めた深いしわ
気がつけば女の定年すぎている
凡人で居たい肩書おもしろなり
凡人が怒っているぞ消費税
凡人と凡人夫婦仲が良い
凡人でよかつた苦もなし楽もなし
凡人で各駅停車で来た定年
凡人が高嶺の花に憧れる
結び目がゆるうって何時もこぼれてる
すきま風ないが結露がひどすぎる
老夫婦結ぶは白い絹の糸
結び目を少うしずらして和解除する
縁結び去年と違う人をかき

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

岡美津子

夢はまだ捨てず初心に戻る地獄
夢を盛る器と共に色あせる
落ち葉はらはら一期一会はみんな夢
老いた時田舎で暮らそう二人だけ
凡人で通した人の掌が温い

川柳後楽(前月分)

井上柳五郎報

雨音が病んだ私の胸をつく
雨の日も風の日もよし古いの部屋
水雨降るきびしいさびしい離郷の日
伴奏がずれる私は自由律
人形の紐の長さにある自由
手をつなぐ自由へ他人の眼が刺さり
ご自由に妻の言葉が気にいらぬ
二人三脚自由を縛る紐きつく
もう自由諦めたよう象の芸
鈴ならす遍路の笠に花吹雪
積雪が教えてくれた靴の穴
激動の昭和の暮を痛が閉め
畏れおおくも陛下を新聞受けに投げ
大正のロマン昔の歌に夢を抱き
夢ひとつポッケに入れて君に会う
初夢はでっかい富士を一人占め
搜索に峰の白雪のしかかる
整備新幹線地元の足をもいで決め
北風に向いて淋しきおんな旅

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

シメ子
美津子
美代子
惠美
寿美
健一
番茶
柳五郎
佐加恵
吟平
哲郎
美智子
照路
青銅
桃風
秋月
玉水
金吾
草風
美代子
拓治
文平
たけ志
博友
九坡
番水報
呼風
友夫
帆雀
多可志

コレステが妻の目方を軽くさせ
手土産が足らぬか軽くあしらわれ
軽々と抱いた日遠し子が背く
わが寿命わからん方がやはりいい
燃え尽きる寿命の中で戦する
じわじわと寿命を削る癌の鬼
古希過ぎたおれの寿命もここらまで
寒さ知る古傷がまたうずき出す
寒風に昭和の半旗そつと揚げ
寒の水呑んで五体を浄化する
不運な時は神も仏も信じちやう
神参り厄年の分多くなる
絵馬吊つてもう合格の顔でいる
居心地が良くて貧乏神にげぬ

城北川柳会

神夏磯典子報

七草の薨に陛下の訃報聞く
衣裳展花嫁衣裳に触れてみる
複雑な思いで座る嫁の席
札のしわ祖父の苦勞を物語り
手も出ないミンクの感触試着だけ
顔見世の棧敷は花が咲いたよう
蜜柑むき過ぎ行く歳をいとおしむ
初詣で夢一ぱいの孫と行く
物言わぬ夫とたわむれ忙中閑
狸寝が寝先席であぐらかく
時のけずみが花芯に触れて火傷する
ざんげ録触れると過去の音がする
バスタオルで走れば電話ベルが止み
花びらに触れて破戒の踏絵ふむ
投げ出したペンを又取る締切日
妥協した涙を捨てて風の街

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

美子
弘子
三千代
満洲子
あさこ
敦子
伴子
途子
シマ子
敏
白水
はつ子
美南子
トミ子
淑子
靖子
良子
洋子
和子

洋平
喬水
俊路
旋風
山人
砂山花
粗粒
秀和
新風
艶子
一歩
由多香
圭一郎
よし子
午郎
きみ子
陽
トキワ
ふみ
寿美礼
千恵子
登美子
達子
静子
静歩
公一
文子
白峰

痛む足座る大師の足を撫で
自肅しおせちに重い祝い箸
営業用のえくぼにちよいと騙される

撞く鐘の余韻に新田分かたれて
星空に賽銭投げて初詣で
責任論の中で昭和の幕下りる

母に礼始めて言えた式の朝
人生の余白と共に万歩計
永平寺座禅の僧ははたち頃

目立つこと無く四世代生きて春
発想をつとくと炬燵に吸いとられ
久世柳クラブ

落葉ささ十色の顔で散ってゆき
百姓で真面目な与作嫁が来ず
薬害が気になる程に妻は飲み

嘘一つその又嘘がうそを産み
今ならばきつと優しく出来たのに
染めてゆく時雨を雪が早う追う

内職の人の気知らぬ長電話
ポーナスも出ればチラシの数も増え
美味いとは二杯目の粥やつと言ひ

万札を崩したとたん足がはえ
クリスマスツリー小児科医に飾られる
忘年会下手なカラオケ離さない

減塩という愛情にせめられる
重宝を消しゴム恥の痕かくし
ジャンボ機を支える車輪の中のゴム

悲喜交々ポスト人生吞み込んで
だあまつて喜怒哀楽を呑むポスト
大会に重要ポスト風邪を引き

ポストまで孫の使いが高つくき

八重子

秀夫

満津子

きくゑ

輝子

温子

ただし

典子

右近

テルミ

吟平報

凡人に育ち積木の城に住み
陰口を言わず世間を広く住み
陰口にその人が来る摩訶不思議

陰口は気にはならない苦勞人
陰口を言うてる人も言われてる
陰口を背に流して生きる寡婦

もろもろの願ひ渦巻く初詣
灰色の雲かきわけて初日の出
川柳東大阪

先生が優しく語る赤いペン
ポールベン社長のサインゆるがない
セールの心がペンをさしたすタイミン

ひも付きの心が寒いポールベン
芋版の賀状親子のアイデア
京に来て芋棒湯豆腐酒の友

やむ妻に初めてつくる芋の粥
肉ジャガを温めなおす靴の音
コンテスト落すに惜しい娘に迷う

惜しまれて退く花道があたたかい
急がねば情けを探る霧深の文
心急ぐままとしたたむ暮の文

何急ぐ師走の街の杵の音
酒女惜しい男が奈落まで
それ急げ伝令がきた蟻の列

檜山へ冷たい風が急きたてる
誕生日と重なる祝いのクリスマス
寺はもう寝静まっているクリスマス

終電へまだケーキ売るクリスマス
堺川柳会
河内

ぜいたくな物は嫌いな妻の指
指先の焦りに負けがこんでくる

山人

静香

千代女

藤江

知代子

伊久栄

伊女

賛平

愛論報

庸佑

喜風

そして秋逃げる貴女を追いかける
叱られる子へ逃げ道となつてやる
幻の行方に石を積んでいる

おしゃもじを譲つてからはボケ始め
しあわせを逃がさぬ様に味噌をとく
守れない指切りだとは子に言えず

逃げ腰の子の肩先を押してやる
子や孫に譲る自然はこわすまい
十本の指と相談して決める

譲られてこんなに手間のかかる猫
父さんとした指切りは忘れぬ
ゆつくりと地球を回らす花時計

指切りをしてから指が重くなる
三叉路に行方惑わす風が吹く

佳句地10選 (前月号から)

江原とみお選

吹く風に噂話が立ち止まる 智加恵
一枚のシヨールで残り火を庇う 幸

指先に昔があつて食い違い 正朗
振り出しへ戻れば温い風に遇い 晃授

風向きを見て白旗を揚げておく 越子
爪を切る 孤独が音もなく弾く 河芳

みぞおちのあたりで運が消化せぬ 瑞枝
冬の陽の弱くて解けぬわだかまり 治子

安い物たんを抱えて母帰る 月子
定年に悔い一つないかたつむり 小路

東雲

文香

春香

蕁梢

楓

小雪

かりん

天笑

柳宏子

庸佑

頂留子

ゆつくりと渡る吊り橋揺れてくる
 太陽に十指かさせば皆光り
 色鉛筆の中に逃げこむ雪女
 風の町風の行方は風に聞く
 綾とりに要らない指はついてない
 席譲るこの娘の親をふと思つ
 子にみんな譲れば邪魔にされるだけ
 ゆつくりと年をとつてる鏡かな
 マヒの児がゆつくり千羽鶴を折る
 からませた指の温さを信じよう
 シルバーの席譲られてすこし照れ
 裸一貫築いた城を子に譲る
 芝居絵の写楽の指は皆曲り
 土壇場で行方くらますあかんたれ
 禅譲のレールに乗っている毛並み
 行方の知れぬ矢は友達胸にある
 印一つ押したおかげで逃げ切れず

尼崎おはま川柳会

春城武庫坊報

美緒 紀美女 狂虎 素灯 耕花 妻子 曲ん手 豊子 萬恵 理恵 志華子 金三郎 甘平 道女 たつお 真柳 十四郎 美智子 昌子 弘治 保蔵 夢之助 すみ 敏之 佳秋 義嗣 寅之助 向西 六浦

何時になく私を縛る寒の月
 日めくりをちぎり忘れて職がない
 檢察が核心をつくりクルート
 結論をじらして見せる年の功
 結論を知っているのは閻魔様
 結論は噂で終つた回り椅子
 結論が出ないうちから柳が出る
 尼崎いくしま川柳会 春城
 笑い袋が凍ると鬼が笑い出す
 二月堂の粉を溶びて春を呼ぶ
 好奇心火遊びをした赤い毯
 科白なく空しくあがる冬火花
 やわらかい微笑に火種包み込む
 目玉焼にも火加減がある今朝の出来
 火に弱いおもちやで子供遊ばせる
 大団地夜は漁火の如く映え
 火渡りの素足が神の声を聞く
 再会を信じて種火埋めておく
 訳あって散らねばならぬ火の椿
 残り火が時々顔を出す余生
 ベチカの火もえてた僕の少年期
 二人居ていつ暮れたやら足袋を履く
 火を守る村が岬の奥にある
 掴み損ねた運を他人に拾われる
 階段で情を拾つたお婆ちゃん
 割れた皿拾う私の今拾う
 生き甲斐の杖が拾つた音景色
 古墳発掘歴史の謎が拾われる
 ときめきを拾う温室蘭ばかり
 冬波のはさまで一つ貝拾う
 日だまりで幸せ拾うひとりごと

歌子 定人 貞吉 澄子 武庫坊 紫香 年代表 武庫坊 春子 美智子 園歩 杜的 白漢子 一堯 天樹 曲ん手 久美代 みち子 和友 伊三郎 作二郎 佳秋 め女 定人 文夫 萬的 紫香 かね子 はつ絵

足跡を拾うと寒い風に会う
 言い渡むことのみを聞く冬の橋
 道はたて自転車三台まだ喋る
 千代紙の紫で折る母の雛
 好物を残した老母が気にかかる
 一びきの秋刀魚を猫と食うひとり
 改札機すこしひるんでから抜ける
 火の輪くぐつた女にこわいものはない
 佐川川柳会 赤川
 石女の心にひとつ種宿る
 平成へ昭和の種が目覚まし
 スピードにスリルを賭ける青春譜
 種もみの逸話を今に千枚田
 温室に春を知らない花の種
 スピードに三途の川が見えてくる
 サーフで波のスリルと沖へ出る
 プロレスのリングサイドにあるスリル
 サークスにスリル求める人の列
 根性が見事咲かせたこぼれ種
 連勝をはばむスリルのチャンスマン
 それぞれの種に書かれた父のメモ
 偶然の出会い噂の種となり
 静岡市川柳塔同好会 永倉
 味噌汁に仕合せを知る凡夫婦
 追伸に決断迫る女文字
 仲人の口はいずれも良い話
 倦怠期を変えなくても気付かはず
 気付けなくても三猿決めて円く住み
 足音に気付け急いで結んだ口の紐
 口止めをされて結んだ口の紐
 一人居を起こす寂しい隙間風

歌子 静夢 保蔵 いわゑ 正一 河芳子 菊野報 幸泉 功 千恵子 節子 和興 憲一 恒一郎 一郎 千鳥 天花 トヨ子 菊野 僕川報 弧秀 晃授 猛士 金吾 芳男 正雄 たき

師の朱筆手本に運ぶ老いの筆
独り居てひとり答える冬の雲
聞く耳は持たない父の話好き
お喋りを強い夫の目が叱る

アメリカの豆で日本の鬼払う

お似合いと勝手に決めた話し振り

気に入らぬ風も流して柳の芽

他人の目気になる色を着る旅に

平成を乗り切る策を練っている

四季のうた唄い続けて森暮れる

春もよい意表を突いた雪どさり

義理の酒提げて重たい靴を履く

胸の中まで計りましようとレントゲン

飛んでいる女に天気予報など

古希過ぎて見直す色に朱がある

ピラカンサの朱を分け老いの部屋飾る

昭和史の名残を舞ってぼたん雪

水炊きが待つっているから巢に帰る

川柳塔唐津支部

生活の知恵がビデオで秘蔵され

御隠居が丸く納める痴話喧嘩

よい暮しさせて貰った栗合箸

あせてはならぬ地金か顔を出す

時代劇吉宗公のきれにはれ

黒白をつけず巷で雨に逢う

ネオン海上野西郷どんまぶしから

松飾りはずしと昭和の御代惜しむ

川柳塔あおり

波多野五楽庵報

厨房の朝は素顔の妻がいる

結婚は君の素顔とするのです

二次会で妻の仮面をぬぎすてる

こふゆ 敏子 幸子 美代子 正己 巴子 たけよ 悦子 妻子 元江 理恵 朝代 智泉 玉恵 宮子 みづえ 辰江 耕花 正敏報 四郎 高明 朴竜 虹汀 旭恒 幸夫 正敏 一光 實人

ほんとうの素足を知っている田んぼ
夜の蝶素顔を殺す紅を塗る
こそばゆい砂が流れる足の裏
シャワー室出れば素敵な風に逢い
私生活意外な素顔持つ夫婦
日曜の素顔が立つ朝の市
悲しみの涙素顔を写し出す
なにもかもむかし跳になつてみる
湯上りの下駄の感触古里めく
誕生日素足に浮ぶ母の顔
くつ下の絹に素足は首つたけ
打吹川柳会 江原とみお報

島 彩人 五楽庵 井蛙 つる 花進 葉 昭治 巳代吉 和香子 巡歩 紫映 雄々 紫泉 雀踊子 たつみ 寿美子 早苗 妻子 典子 善政 温子 白峰 芳朗 柳風 宗光 邦俊

法相が飾る錦は汚れてた
愛すれば答えてくれる土が好き
便利さにおぼれて汗を忘れかけ
辞世の句などはまだまだ考えず
何もかも無口になった冬の彩
かけるうの様な内閣改造か
失敗も経験として苦にもせず
元旦の雑煮一つで事足る
手を合わす第六感も湧え渡る
うそつかぬ宣誓その後ウソがばれ
長いながい橋の向うのほんこつや
川柳塔きやらぼく 政岡日枝子報

負けないでいつかいつかと豆を煮る
苦い木へいつかは実る甘い柿
いつか身になる本だからつんでいる
赤いバラいつか裏切るときがくる
迷路からいつかはさきと抜けられる
いつか又逢えるハンカチ振りつづけ
彼と来たいつかの道はダムに消え
野分けていつかの径に陽があたる
この庭にいつかは立てる鯉のぼり
いつか散る花に命をすくわれる
若いとていつかつかいかい樹に育ち
一日一ついつかは実る種をまく
地球からいつかこぼれる人間
いつか朝羊一万五百がき
許されるならばいつかの絵を捜す
はとポッポいつかピースと鳴かせよう
いつからか花びらほどの不良癖
いつかかる別れのために買うテープ
ホテルの椅子でいつか我が子もこんな日が

日 節子 弘朗 仙岳 小鹿 佳代 高代 節枝 日出子 小生 夕子 朗子 日枝子 品子 富美子 玲子 智加恵 荒介 千春 八重子 亜弥 花子 正子 千代 恵子 瑞枝

サークル棟樑 藤田 泰子報

愛の賛歌バレンタインのチョコに添え

夕やけの記憶へ唄う赤とんぼ

風呂の中又聞こえてるうなり節

流れにはいつも逆らうめだかでず

マイク手に少し音痴も歌手気どり

歌声が遠く遠くさびしかり

たのしくてめだかの群を逃げだせぬ

誰もしも自分の歌を持つている

川柳ささやま 遠山 可住報

過去伏せて蝶は白紙で舞い通す

喪が明けて寡婦新しい地図を描く

満開の梅に手がぬれ花鉢

梅酒なら少しと妻が猪口を出す

梅の香を届けるペンへ夜が更ける

孫の舞い泣きたい程に手を叩き

新しい年に持ち越す長い恋

振袖の中で二十歳の夢が舞い

新調の晴着いそいそ娘に着せる

梅一個食べて中毒よせつけぬ

平成の梅が届いたにぎりめし

古里の梅が届いたにぎりめし

平成と今日新しい印を彫る

梅干しが程良く漬かり亡母を恋う

炬燵から枯葉の舞を見る孤独

新年の餅も晦日も同じ餅

新年の画布へ構図を練っている

新しい晴着へ孫の鼻をかむ

さりげなく梅一輪を押して恋

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

初恋も嗚呼おおらかに齡をと

上げ底の下にかくした下心

そのうちに無断で人を好きになり

おおらかで恋人のような掘炬燵

上げ底の話もゆつくり聞いあげ

あっぱれな上げ底ですなりクルー

おおらかに余生を渡る橋がある

上げ底は要らない砂の山を盛る

減反の裏で喜ぶ野菜種

落葉かく先祖の墓の身だしなみ

リクルート妻が無断で買いました

おおらかにトンビ舞わせている地球

八尾市民川柳会 飯田 悦郎報

白星に差入れが来たチャンコ鍋

春よ来い鍋に少しあきて来た

ゆきひらのお粥で祖母は満ち足りる

母と子の鍋に消えない窓明り

生煮えをつづいている焦り

單身赴任ひとり似合う小鍋買う

蔭のある二人の鍋は喋らない

倦怠期無事乗り越えた鍋の色

言い訳を鍋一ぱいに聞かされる

血の流れ細い先までたぐる粟

細いうねじ抱いてやりたい夢二の絵

細く見える彩と柄とを選っている

細い月雑踏の町で笑ってる

飽きっぽい彼は細身で長身で

細大根にとても悲しい訳がある

バイトの日母さん眉を細くひく

大物になれそうにない細い首

かつ子 手を握りそれから欲が太り出す

恵美子 イソップの欲張り犬にならぬよう

はるみ 乗り換える保険に欲がさらけ出す

世似 欲みん捨てるとのん気節が出る

聖子 欲は無邪気な鋭角に攻め出る

歳栄 裏切ってみよう少し欲が出る

民子 欲みたす派手なまき餌もリクルート

鈴江 一番高く積木を積んだのは無欲

三和 義理の花受けて飛び立つハネムーン

悦良 旅なれた人が贈って来たみやげ

清泉 贈るもの何もないから詩をあげる

白江 還暦へ孫がえらんだ赤いシャツ

恒明 贈答のキヤッチボールと知りつつむ

憲太郎 まごころを贈る献血車に並ぶ

恒明 老妻へ贈る感謝を口にせず

夕花 考えたあげく祝いは金に決め

欣之 握手して花束贈るフィナーレ

信治 瓜に茄子教育ママの祈る夢

甘平 夢捨ててから年月長過ぎる

としを 倉跡で夢ふくらんでくる高安城

美幸 夢多き時代は夢の間に去りぬ

宏子 崖を背にした夢が崩れだす

三男 石段の数だけ夢を追っている

和子 夢の果て白い墓標のまま広野

良伸 古い夢つなぐと憎いおとこ達

十歩 昭和史の完結編が見られます

雅士 目一杯愛受け継いで子が育ち

翠公 四捨五入まだまだ運が残ってた

曲ん手 愛を呼ぶ心に愛がいりませ

限りなく愛を溜めてる片想い

頂留子

朝子

柳伸

白度

一高

柳宏子

白洋

てる子

山久

美代子

とみを

年人

春堂

シマ子

くに子

喜風

勝美

美津留

しんじ

湖風

重人

律子

外吉

美津留

天津留

重人

凡九郎

希久志

新婚は愛の存在疑わず

弁解が上手で失敗また一つ

鼓動高まる愛がほとばしる

激動に赤い血燃えた昭和史よ

誰れ死ねど電車は動く民の足

アフリカの愛瘦せた乳房をふくませる

故郷へ心が動く風景画

七草が明けて平成動き出し

溺愛の息子は嫁の肩をもち

薬指何や愛がある証

朝焼ける靴に不穩の音がする

顔は火照る足から冷える縄のれん

ライバルは私を待たず先を行く

王様も次の幕では小作人

真剣へ目玉をむいた座頭市

人間が動いて月が落ちつかぬ

のど仏静かに動く意を決す

嫁ぐ日にチョッピリ分った親の愛

人の世や王位を捨てた恋もあり

責任を鋭く突いていた外電

高槻川柳サークル卯の花 河瀬芳子報

スタートに立つとみんなが強くみえ

スタートの位置は一緒であった苦

スタートはみんな勝ってる顔に見え

スタートに立ったつもりで考える

靴の紐直しスタート台に立ち

大器晩成スタートの端に居る

スタートは軍歌だったと思ふ過去

すじみちの说得へ胃カメラ飲むときめ

すじみちを通して白い眼で見られ

すじみちを説けば横向くイヤリング

しげお

柳弘

胡蝶

司

一步

金太

鉄心

醉舟

伸行

淳水

洛醉

亮太

雅巢

我勝

本蔭棒

笑風

与呂志

河南子

敏

比呂志

陽露子

栄子

武茂

正恣

如洲

伊三郎

貞夫

花代子

り代子

佐代子

すじみちを知った男の影法師

すじみちのわからぬ金は秘書へ行く

すじみちのそれた話でおもしろい

すじみちを曲げず歩いた亡父が好き

すじみちのどこどこに誤字がある

すじみちを弁え姑に折れておく

公園を他所者として通り抜け

公園を白砂青松影ひそめ

公園でひと息入る方歩計

公園で犬も老いたり馴染み顔

公園に志村喬はもう居ない

起承転結公園で逢えばいつも転

初詣り孫もよいしよと苔の坂

満員バスニンニクの息 美人ギャル

スピードを少し落して母達者

挨拶もときれときれの寒い朝

諦めを重ねて老いの着ぶくれる

御心を崩御の後で知る迂闊

平成元年みかん並べただけのこと

鳥かこの中に希望はあるだろうか

支那栗を買った女の千鳥足

冬の旅夫婦無言で通じ合い

ワンピースを習った祖父の年賀状

気分転換 爪を染めてる冬のうつ

聞き慣れぬ敬語で遠い大時計

平成元年銀座四丁目の人時計

先ざきを思いつめてるただひとり

成長にとまどっている子の晴着

靴紐を結ぶ八人目の敵へ

静江

恵美子

スミ子

節子

しげお

諷云児

白漢子

行平

圭坊

百合子

よ志子

一郎

正坊

和友

稲子

栄

暢子

泰弘

メ女

尚山

真笑

京童

年代

房子

とおる

豊子

越子

春風

美智子

英子

良い話ばかりを聞いたイヤリング

米研いで水の冷たさ知らされる

ティーカップぬくめて好きな人待つ

川柳塔まつえ二月例会 恒松 叮紅報

戦争の悪夢わすれぬ古日記

倦怠期甘い言葉のない日記

時々は符号も入る日記帳

古日記記憶に残る赤い線

日記から亡父の秘めごと転げ出る

大変なことが綴ってある日記

日記には自作自演のドラマあり

私も日記も春を待っている

日記帳妻にも言えぬ秘密あり

四十年日記に編んだ耐えの日々

日記帳とどこどこに涙あと

疑問符の残してあった古日記

灯を消して今日の日記を振り返り

淋しくて下手な芝居をする女

口下手を慎み深いと褒められる

下手ですと素直にいえる人が好き

口下手のコップはいつも乾いている

口下手な嘘されど時には許される

下手な字が墨をすっているよりどころ

下手な字に情がこもっている便り

口下手な父の台詞がいと嬉し

下手だけと孫の絵私を慰める

子の下手な言い訳も聞く母の胸

傷つけてしまった下手なアドバイス

根回しの下手な男でひとり者

下手なガイド長い車の旅でした

輝夫

杜的

紫香

雄々

秀子

一進

雪子

代仕男

馨子

満江

寿美子

翠星

芳枝

美三男

美朗

正朗

貢範

博子

登志子

操子

たつみ

雪美

小生

愚童

律子

ちかし

静恵

小鹿

蒼流

下手な歌聞くより飲んだ方がまし
 下手な字に慈愛のこもる母の文
 元号が変り寒波も動き出す
 反核の声なら乗せて来い寒波
 家族みな心一つになる寒波
 寒波の日亡母の湯豆腐思い出す
 血圧は寒波の怖さ読んでいる
 湯豆腐へ夫婦の意見が合う寒波
 気まぐれな寒波がおどす乱気流
 寒波来る島の帰りが早くなる
 立春と云うに寒波はたたら踏む
 旧暦を忘れず寒波やってくる
 寒波乗り越え生活のペダル踏む
 湯の煙天城峠に残る唄
 湯気の向うでライバル笑ってる
 台所湯気で眼鏡を鼻にかけ
 湯気の中よもや不倫と思われず
 露天風呂湯気の向うの白い肌
 温泉の湯気しあわせな顔二つ
 飲むほどに湯気に臆る父の唄
 味噌汁の湯気を忘れた倦怠期
 義理チョコへ少し迷っているリボン
 孫二十歳リボンの似合う娘に育ち
 体裁でないのりボンが好きやねん
 かたくなな女心にりボンかけ
 想い出だけ秘めてりボンの色もあせ
 黒枠のりボンほほえみなど要らぬ
 あのりボン貰ってからが疑惑めく
 川柳塔鹿野みか月句会 土橋
 修羅抜けた瞳に隙も無駄もない

静翁 清志 昭二 妻久 山久 久枝 芳子 鳳人 友子 浜南 ノ子 米子 竹雪 長三 鶴丸 静江 巡歩 幸子 舞吉 多賀子 与根一 まさし 君江 日出子 煩惱児 きみえ 文子 叮紅 螢報 由多香

そんな気にさせた貴方の罪重い
 男なら黙って耐える偏の海
 夜が明けてみたら何でもない木の葉
 冬の子が窓に張り絵をしています
 日留りの優しさに脱ぐ冬の足袋
 農を継ぐ男に婚が遠ざかる
 戸の陰で直にスタート出来る位置
 生き恥をこぼり包む冬の景
 気が利いて間が抜けている葱坊主
 演壇に立つて五センチ背が伸びる
 陰に咲く花の匂いにひり返る
 戸の陰で今日の涙は拭いておく
 幻を斬った戦さの青春譜
 幻のいつか世に出て花と咲く
 幻の人の隣に寝ています
 税金の心配いらぬ無一文
 真実を握ったメモが喋らない
 年金で冬の深さは埋まらない
 冬仕度出来ましたかと風が問い
 冬ごもり農婦は趣味の夢を抱く
 ゆんばりと炬燵で春の指を折り
 遠くから眺めるだけの恋もある
 ナイスプレー遠くではじく球の音
 遠くから喋ってるから悪口だ
 遠い道のりを春へむかってゆく
 母一人残して冬の靴をはく
 白無垢や父をどうとう泣かせたな
 北海道に判こ貰いに行ってくる
 松葉蟹ますます遠い縁となり
 ほほを打つ風の噂に耐えて冬
 こころときめく薔薇一輪の真紅

よし子 雅女 静生 花子 公乃 日枝子 荒介 三代 喜与志 八重子 智恵子 汲香 和子 としお くに子 隆風 武子 房子 けんじ 美っ千 富恵 盛桜 小鹿 かつ乃 諷人 はるお 芙美 みさ子 螢

京都塔の会 松川 杜的報
 七五三母も少うし派手を買っ
 願い事咄に言えぬ流れ星
 八起目に何を掴んだ影法師
 うなずいて貰える海に訴える
 息の合った夫婦と思う別れぎわ
 真打にまだまだと知る嘶の間
 間のびした会話ほのぼの老夫婦
 暖かい部屋が目盛りをたしかめる
 体重計の目盛り確かに寝正月
 幸せは目盛りくずさぬ妻がいる
 間を置いて先輩助言してくれる
 方向転換百足一瞬思案する
 水道の目盛りが同居してあがる
 いそいと祖母が出掛ける初弘法
 デジタルに馴れて目盛りを読み損ね
 間の抜けた人のことばがあたたかい
 体重計目盛り停らぬうちに降り
 柳芽ぶいて春の訣れも近くなる
 里帰り嫁いそいと仕度する
 間において温い返事を用意する
 お誘いの電話いそいと紅をぬる
 生きぬくか六つ子の目盛りまぶしくて
 いそいと早く帰れば妻は留守
 お見合の無口へ仲間が持てず
 杉織のコートに残る亡夫の香が
 体温計目盛りが上って風邪と知る
 いそいと歩けば月もついて来る
 西宮北口川柳会 松本 一郎報
 即席のラーメン少しゴージャスに
 其の上の欲は言わない共白髪

白季 達子 ただし はつ絵 水客 飛鳥 孝江 美穂 美枝子 英子 紫香 武庫坊 白漢子 正坊 年代 京童 河芳子 圭坊 求芽 よ志子 和友 諷云児 榮 花代子 杜的 年代 笑女

有為転変ビルを見上げてゐる瓦
今の世に不服ありそう鬼瓦
エスカレーターを走って登る忙しき
発車まで間がありコーヒ混んでゐる
寒空に意地を見せる鬼瓦
義理チヨコの数が机の順にある
三世代仲良く住もつ瓦屋根
筋書きの通りにならぬ猿芝居
雪の瓦が貝殻節を遠く聞く
突然に離婚したいと妻が言つ
九分九厘根拠し出来て筋を書く
筋書きを気儘に変えて一人旅
はなやかなこたつ掛買う古いひとり
筋書きの伏せ字に愛を忍ばせる
老夫婦言わず語らず寄り添つて
松屋町もつ雪洞に灯がとほる
ラーメンのシエアに挑む三分間
お茶お菓子揃へこたつに一人きり
文鎮の重さへ軽いかるい筆
貧乏神宿がえしてもついでくる
母さんの足に甘えてゐるこたつ
筋書きになつた風の子守唄
筋書きなど無い方がよい夫婦仲
ありのまま話しゆつくり風呂呂に入る
日曜日こどもが親を起こして
一枚の瓦にこめる般若経
モナリザに似つたかぬ妻の薄笑い
こたつとんの伏せが目立ち春そこに
偏屈な鬼で涙を流せたがる
瓦せんべ土産に楠公さんをなつかしむ
筋書きが狂うと女にひげが生え

いゝゝゝ
萬的
美智子
白漢子
英子
佳秋
江美
京童
武庫坊
風云児
紀雄
芳子
春子
芳子
きよ子
圭坊
はつ絵
しげお
保藏
宣子
メ女
紫春
静子
伊三郎
トミエ
正津
よし津
嘉矩
千世子
正一

こたつから手が届く中で生きてゐる
相続税に溜息してる鬼瓦
新風の花嫁を待つ鬼瓦
それ以上言わぬ夫婦で仲がよい
頑固さの中にも筋書き通つて
チャンネルは光ケンジの孫に負け
カラフルな瓦ここから建売地
冬の雨坂にラーメン屋が灯る
水引きの黒を買ひ足す春の鬱
火の雨の歴史くぐつて来た瓦
移り香へチャルメラの音が遠ざかる
掘りコタツ堅い話は抜きにする
筋書きのないドラマです二DK
筋書きは無用もぐらの叩き方
花便り待たずに友が散り急ぎ
猿芝居筋書き狂うリクルート
妻の筋書き通りはこんで平和なり
いけないと言われて尚もやりたがり
風船につられて空の青さ知る
週末のスリル切符を二枚買つ
早起きの雀が好き鬼瓦
新家庭瓦を赤に塗り替へる
雨風に負けない意地がある瓦
子の遊び秘密の場所が一つあり
一言がこんなに重くのしかかる
顔洗う猫の手つきの三歳児
サンクスを手つけて自由を手に入れる
猛勉強せねば不安の消費税
筋書きを忘れて語尾を濁しとく
油絵の裸婦がじつとこちらみる
財テクの筋書き妻のままならず

勝代
光歩
園的
杜的
春蘭
一郎
柳影
作二郎
定人
天樹
三笑子
実
みつ子
森生
みね
蜜拙
山久
ノブ
高子
俊子
千秀
芳仙
保州
一進
房前
御前
信義
文夫
猿杏
陽露子
曲ん手

筋書きが出来た魚は背開きに
筋書きの通りに運ばぬ民主主義
筋書き通りきちんと離婚するスター
若草の静かに燃ゆる冬の炎
筋書きのない日の鬱よぼんのくぼ
飯粒を拾つて食べる聯がある
筋書きの中に入れてとくかくし味
篤託になり甘党にコース変え
入試落ちるニュートンのせいにする
別べつなこと考えていて夫婦
川柳化粧槽
植村客遊子報
髪型を変えても気付かぬのが夫
お年玉孫には孫の当てがあり
鳥の目のまるさに迷いふつ切れる
初雪に出かけた嘘を抑えられ
間魔にもお世辞は言わぬ亡母である
道楽をしたなと解る踊り見せ
口げんか夫婦は明日を信じてる
武器となる女の涙に騙される
女社長野望にもえるイヤリング
飲む程に窓際族の意気がかり
煩惱を洗い浄めと除夜の鐘
不足言い喧嘩しても新春が来る
正月に犬まで連れて里帰る
首却て湯の温もりよ倅思つ
忘却が救つて呉れる神の加護
ひたすらに生きたあかしの句が残る
山茶花の紅へ寒さをふと忘れ
年頭の誓いも消える小正月
過去未来老いはまどわず今に生き
うやむやに出来ない性質で又ふられ

荒介
勝美
善太郎
六郎太
敬
蛭
ただし
まさ久
枯梢
紫香
岳詩
秋月
葉香
李白
紅李
大鷹
礎石
三青
悲子
鈴代
悟虹
里兆
遊
はつ子
瑞穂
遊峰
遊光
サワ子
永楽
客遊子

二の舞いはさせたくないが見てやる
トツから二番を見れば悪いもの
聖職を二の次にして嫁の世話

英雄も二枚の舌で身を庇う
輝やきの向こうが見えるまでは生き
美しい背なだ汚れをまだ知らぬ
増えてくる罪が重くて背を丸め

川柳高知

川竹

松風報

帰り道まだ不本意な多数決

茶飲み友出来て姑の口がへり

ただ今へ空気動かぬ母の留守

巳の年の息子しっかり銭を貯め

せめてもの救いライバルより若い

ふしくれた祖母の暮らしに唄がある

当りくじ貰い二泊の京の旅

抽選日一字違いでフライパン

根まわしが抽選券でくる歳暮

税金をたつぷりふくむ特級酒

酒税だけなら番付にのる自信

税税と引かれた税が戻る暮れ

脱税で追われてみたい小商売

税金に今日はふれない年忘れ

年金の余生を税に見放され

贈与税払うに山を一つ売り

税金の戻りに同人費を払う

川柳塔いずも祝賀句会

吉岡きみえ報

誕生日子備費でちよつと派手にする

還暦に予算多めの医薬品

過疎暮るる予算のメドもつかぬまま

予算などあつて無いよな梯子酒

また予算大きく狂う父の酒

克子 隆積 守

繁子 久子 恭子 緑良

康子 菊野

春枝

幸泉

俊子

憲一

竹萌

節子

和功

千恵子

和求

和興

朱坊

松風

佳風

流石

芳郎

まこと

のり子

巡歩

へそくりも予算に入れて三連休
予算枠義理の重さが溢れだす
予算から大きく揺れる金屏風
家計簿に消費税とは予算外
一億の予算に悩む村おこし
健康児ずらりわが家は火の車
小走りの母は元氣な朝の笛
健康な姑の指図こたつから
検診でみつけた私の健康度
健康な顔が揃った鍋の湯気
健康で卒寿迎えた母の初春
還暦の健康気づかう母米寿
健康を支えてくれる母の味
健康が取柄で尽くす妻のみち
一本の帯が事件のなぞをとく
帯解いてやつと我が家で茶をすする
帯揚げが櫛になつて出る余興
夢編んであなたに上げる春の帯
帯に合う着物が無いと愚痴られる
式すんで一服すれば帯祝
父さんの帯で背負うた子守唄
ウインドの帯に見とれている母娘
初泊り結べぬ帯に手を借りる
岩田帯母の自覚も締めなおす
兵児帯でくつろぐ茶の間古がぬくい
黒帯をぬぎし少年寒稽古
帯といて女気ままな風に酔う
帯といて主婦に戻つた安堵感
若き日を語つて帯は年とらず
帯といて急いで女話しだす
夫に手を借りてうれしい帯結ぶ

正朗 みよ女 主詩朗 弁次郎 裕

明朗 律 草丘 茂美 寿美 桂子

妙子

久代

鐘童

善

れいじ

まさえ

芳風

愚童

篤子

武衛

きみえ

勝子

ヤス子

みえ

為一郎

房子

クニ子

久栄

一葉

バンザイをさせて子供の帯を締め
帯するりほだいて余韻まだのこり
喪が明けた今年よいことある予感
今年こそ何もしないで寝ていたい
レンゲ畑今年限りかビルが建つ
期待した椅子が回つてきた今年
物忘れ気にかかります去年今年
今年こそ兎小屋からぬけ出そう
今年こそ兎小屋のペンを買おう
柳友と語る今年のペンを
今年こそきつと嫁きます遅れずに
カレンダーの美女に今年も見下ろされ
今年こそ逃がしてならぬ青い鳥
今年から夫婦に針のない時計
今年播く昭和最後の種を抱く
海猫の声を今年も波で聞く
今年こそ当てて見たいな宝くじ
梵鐘の余韻今年へ幸運ぶ
父となる今年へ強く羽づくろい
今年立つ雛掌の中で飛ぶ稽古
平成の一步は弔旗から明ける
バカ捻子を去年も捲いてさて今年
期待した夢がはじけるシャボン玉
進学の期待を絵馬に願をかけ
期待した程でなかつた稲の出来
艶福の相など余り期待せず
期待した花の命は短かすぎ
期待して行けば番茶と駄菓子だけ
脇役に甘んじ明日へもつ期待
熟通い親の期待が大き過ぎ
ふるさとの親は静かに期待する
負け馬に期待はずれの紙吹雪

文子 芳子 竹夫 好美 三代 芳枝 しま子 雪子 治 春雄 智子 美佐子 美磯 富恵 喜栄子 千草 水煙 和子 由紀子 青湖 幸一 昭二 嘉寿恵 多よし 多賀子 幽秀 桜水 軒太楼 萬吉 元之介 孝太郎

期待した晴着嬉しい染め上り
七転び遠磨の意地に期待する
接点がずれて期待はうすくなる
親と子の期待歯車かみ合わず
わたくしの背で期待がふくらんだ
期待はずれの答を雨が連れて来る
初春の期待に弾むネックレス
満盃に予算総理のお膝元

翠洋会

中西兼治郎報

知恵子
満江
勝水
馨子
義良
叮紅
代仕男

日曜日家族で想うマイク持ち
からっぽの頭になつてゐる想い
雑草の女にもある身の堅さ
ライバルの栄転祝う身の椅子
夜警打つ拍子木堅い音響き
お堅いと聞いてた人の夜の顔
融通のきかぬ男にまかす鍵
美しい堅さ祝いの饗節
窓際であるじ待ってる冷えた椅子
冷えるのも楽し熱燭待っている
冷えた日はうどんの味が解らない
夜桜の冷えも忘れて野球拳
雑踏に親子が流れる肩車
水に流す筈の言葉がまだ残り
人生を流れるままの幸に生き
勝手な耳悪い事なら聞き流す
激流を試練とおもう男坂
南区が消えても消えぬ南の灯
不渡りへ行けば貼紙して消える
一枚の消えがきて消えたわだかまり
心の傷消えず彼岸に夢を追う
消えそうなき夜で生きている暮婦の日々

凡子
雀踊子
真柳
甘平
喜風
恒明
重人
美幸
信博
しんじ
悦郎
東雲
曲ん手
千万子
道子
眉水
柳伸
勝美
覚然坊
ダン吉
真砂
志げ子

定年を延ばして欲しい靴光る
耳して家守るほかに職もなし
この職に惚れて生涯支えられ
ベテランと言われて職は唯一つ
退職日靴を丁寧に磨きお
農家では職を離れる事が無い
南大阪川柳会
父の樹の高さを見上げてばかり
敬うてる先生日本の旗嫌う
敬って申さん無理な願いごと
最敬礼敬っているわけでなし
敬いて打つ拍子木の音の澄む
空想のある日私はリッチマン
空想の世界に逃げている時間
すばらしい空想くちびるなめている
空想の中の私は勇ましい
空想は自由私独身よ
空想を一生抱えているバズル
快適な住まいで欠伸ばかりする
人間の欲に限りのない住まい
定年の原点祖父の墓がある
激動の昭和がしまっている住まい
月も友十七階のマイホーム
豪勢な住居を冷えた風が抜け
平成という地に住んで陽が当たる
聞き流す筈の告げ口耳の底
価値観の違いつげ口受け流す
つげ口をなぜ聞きたがるイアリング
お喋りを本人よりも先に聞き
失敗を本人よりも先に聞き
告げ口を聞き分けている両の耳

和江
利子
柳香
たみ
健太郎
寿美
慶三
頂留子
千梢
しんじ
重人
雀踊子
久子
和子
シメ子
藤子
庸佑
冬葉
善太郎
善信
柳宏子
岩信
恒明
柳伸
トミ子
シマ子
三恵子
公一

忘れろと言う方が無理きのこ雲
点ばかり追って子供にそむかれる
点と線結べば孫のつまみ食い
難点は金がないのと弱いのと
点心に旬の物あり春日和
一点を疎かにした悔いしきり
サスベンス黙ってみてた置き時計
過密都市公園へ来て深呼吸
公園はひとりになりに行くところ
公園に待つてくれる鳩がいる
ひとりだけ点をかせいだ帰り道
妥協点下げると冬を越しやすし
あの点が空中戦の敵となる
捜査網この一点に絞ら込む
一発は焦点はずしで撃つてみる
公園で手をつなぐこと覚える子
自分の齢を忘れてしまふので困る
俺の子でいい点がない通信簿
備忘録どこへ置いたかわからない

南海川柳会

飯田悦郎報

鬼遊
いつを
みつ子
光子
登志実
綾子
東雲
楓雲
春子
佳秋
良江
為子
文子
君子
すすむ
英一
恭昌
絹子
兼治郎

聴障川柳
てれる子を上座に就職祝い酒
好景気職安の窓静かなり
勲章をあげたい母の手内職
釣書は職が一番モノを言う
自営持つ妻は退職歓迎す
仁術も算術と変る医職かな
女四十職場帰りのエアロピクス
職を持つ強み食後のたばこの輪

豊作報
豊作
文古
三香
みつる
進一
美乃留
八恵子
承平

中川滋雀報
父の樹の高さを見上げてばかり
敬うてる先生日本の旗嫌う
敬って申さん無理な願いごと
最敬礼敬っているわけでなし
敬いて打つ拍子木の音の澄む
空想のある日私はリッチマン
空想の世界に逃げている時間
すばらしい空想くちびるなめている
空想の中の私は勇ましい
空想は自由私独身よ
空想を一生抱えているバズル
快適な住まいで欠伸ばかりする
人間の欲に限りのない住まい
定年の原点祖父の墓がある
激動の昭和がしまっている住まい
月も友十七階のマイホーム
豪勢な住居を冷えた風が抜け
平成という地に住んで陽が当たる
聞き流す筈の告げ口耳の底
価値観の違いつげ口受け流す
つげ口をなぜ聞きたがるイアリング
お喋りを本人よりも先に聞き
失敗を本人よりも先に聞き
告げ口を聞き分けている両の耳

和江
利子
柳香
たみ
健太郎
寿美
慶三
頂留子
千梢
しんじ
重人
雀踊子
久子
和子
シメ子
藤子
庸佑
冬葉
善太郎
善信
柳宏子
岩信
恒明
柳伸
トミ子
シマ子
三恵子
公一

迷路から抜けて仏の目と出会い
用意万端いつもどこかが抜けている

抜けるには遅すぎました悪の淵
目から鼻へ抜ける男に友がない

二次会を抜ける急用こしらえる
倉吉川柳会

父になる空どこまでも清く澄み
渡辺

夢がある空に大声夫婦愛
青句報

伴せな奴だろ空を青く描く
とめ子

先輩が大臣級で俺土方
小生

先輩の顔だ一度は立てておく
天雀

大好きな彼が空から見ています
碧水

戦争も平和も一つ空仰ぐ
康子

地図帖にのらない過疎の道を行く
千代子

先輩に歩調合わせて従ってゆく
よしえ

草木でも楽しい空気吸っている
和枝

何やかとつづく思ってくされ縁
寿満湖

いい便り雀が窓に待っている
秋人

許す気になれば青空目にしみる
秋草

世界地図ヲ連ほんまにでつかいな
喜美子

死ぬまでに捨てねばならぬ便り待つ
満春

パイパスが俺の地図には載ってない
雄々

年金をはずんで世界地図を買う
かつみ

先輩を笥達が突き上げる
康志

南から若いツバメの便り来る
さつき

絵葉書に旅に出ようとして書いている
京子

官邸はリクルート町一丁目
次男

この空の下のことかひとごころし
完司

顔上げてごらん無限の空がある
秋女

どんぐりの溜まり場に先輩がいた
とみお

つくづくと皇后陛下も歳だなあ
石花菜

滋雀

智子

章久

勝美

文秋

とめ子

小生

天雀

碧水

康子

千代子

よしえ

和枝

寿満湖

秋人

秋草

はるお

喜美子

満春

雄々

かつみ

康志

さつき

京子

次男

完司

秋女

とみお

雛の目に果てない青い空がある
シャボン玉いつかは見たい北の空
両手に花その道の先輩
駒つなぎ川柳会
一泊の昔話が眠らせず
蚤の市古い昔に値をつける
雑踏で儲け話を聞きわけける
聞きわけない顔は抽象画の女
聞きわけの悪い万札ある財布
終点で抱いた花束もあます
終点の屋台に冬の灯が点る
ちぐはぐな答え尺取虫狂う
耽溺の昔をみそぐ神の道
昔むかしを語る老婆の目がやさし
聞きわけの無いのが芯を持っている
背伸びしたのを終点で恥じている
終点に来たらゆつくり諦める
ちぐはぐに出て逢う場所は決めてある
ちぐはぐの親子でタカラばかり踏む
影法師が哀しいほどに聞きわけける
終点に天狗の鼻が落ちている
米を売る米屋がパンを食べている
天皇：とだけで直立したむかし
自問自答聞きわけ悪いわたしにて
ちぐはぐは返事九官鳥が焦れ
昔から虎が愛嬌の道修町
金儲け本当の嘘も聞きわけける
ききわけのよい国民となめられる
終点へさんげの数をいくつ積む
ちぐはぐを我慢している共稼ぎ
ちぐはぐの靴を残して法事終え

御前

独歩

苦句

凡子

千代三

射月芳

萬公

国の公

素灯

善信

白兔

憲太郎

史好

冬葉

浩一郎

智子

文秋

甘平

幸度

壯之助

潔

楓楽

重人

章久

東雲

美津枝

美乙女

幸治

君が代は昔の夢を離さない
聞きわけの良い子になった水枕
聞きわけた苦の女が持つ火種
終点で男静かに鎧脱ぐ
もうすぐの終点へする身づくろい
ちぐはぐに咲いても花は愛される
ちぐはぐの思いに沈む恋と金
昔の字書いに孫から諭される
聞きわけのない子やっぱあんたの子
自分を殺した聞きわけを悔いている
終点で父が大きな欠伸する
ちぐはぐへ幹事とりが気をつかい
二人三脚ちぐはぐだから面白い
終点の星とえにしが断ち切れぬ
幸せもシーソーゲームの浮き沈み
道草が好き聞きわけのない財布
十銭のコヒー心プラした頃

悟郎

章

柳右子

比沙胡

新造

正一

曲ん手

喜代治

柳宏子

恒明

雀踊子

庸佑

雅風

翠公

鬼遊

柳伸

小路

富柳会

池

鍋囲む同じ気持の湯気の中
鍋底に女の愚痴がよく溜る
片手鍋だけでこと足る老夫婦
白鳥の池に平和な波思つ
荒波にもまれて男の顔になる
石投げて波紋の外へさつと逃げ
一服も惜しい夜なべの手内職
空晴れて岸打つ波の静けさや
ライバルと持ち込んだ鍋の鯛の骨
新築の家に持ち込む手内職
内職の稼ぎ按摩に揉みとられ
泣くことがあって大きくなる愛よ

美房

曲ん手

文次

維久子

莊次

智久

花子

静枝

昭水

豊中もくせい川柳会

田中正坊報

年ごとに乏しくなつた知恵袋

いい音の土鈴に神さま信じたい

春着縫う母のハサミの鈴が鳴る

母さんも僕もおんなじ鈴の音

がま口の鈴が鳴らないピンチの日

合格の祈願と鈴は知っている

隠し持つ鈴が饒舌で困る

鈴音がしそつ旧街道の松並木

鈴ふつて神様こちら向かせる気

ふだらくや罪一つ消す杖の鈴

工事中あちこち掘つて年度末

怪我しない程度に掘つた落とす穴

ここ掘れワンワンばあちゃんのかくし金

舗装した道を今年も掘りかえす

掘り起こす鉄の先から春匂う

たそがれに望み捨てない映画みる

陽が沈む映画のラスト見るように

時々映画梯子した新世界

マンガ映画の約束をする春休み

鰯を焼き故里通わせる

盗られてもよい自転車借りて行く

独りポツンと画廊の冷えに立っていた

スタートでつまずき秀才無口なり

こだまするエールの声の披露宴

寒天の村近くなり草匂う

パチンコの虜になつた俄か雨

落ちそうな風情でマダム隊がない

両親が平伏しての見合い席

花近し花屋で花の種子を買つ

力にはなれず握手をして別れ

にた川柳会

西村

早苗報

博史

眉水

きく子

よく子

とく子

白漢子

薫風

杜的

登志実

武庫坊

住秋

富云児

富子

紫香

メ女

つえ子

落児

圭坊

寿美子

洋子

明光

萬村

花村

典子

登代子

房子

隆

福一

作二郎

正坊

トンドさん四五軒がくるあぜつたい

カゼひいて温もる酒で酔っちゃった

大鍋がまさかの時に威力見せ

干支の絵馬買うて大社の三ヶ日

小春日和勝負どころは二月頃

待ち呆け雨も要らぬに降ってくる

うっかりと寝言で洩らす不倫妻

手を抜いた部分台風あばき出す

日の丸も君が代も有り祝賀会

年明けて町の八百屋が動き出す

毒舌が勝者のゆとり聞き流す

ほめられて善人の面はせせない

おおらかな神にも余る願ひごと

後始末いやでも頼む枕銭

妻でない女から貰うルーブタイ

腹心の一人上手に酔っている

幸せは今日も達者と忙しき

平和だな海の青さは変らない

誕生日庭の山茶花切ってくる

方言で故郷がわかる土産店

面白くなって来たぞりクルト

梅ぼしの一つ一つは亡母の色

幸せに馴れて西陽に気が付かぬ

どう見ても才知にたけた奴に見え

出す事を止めたとたんに来た賀状

決心がにぶる陰口聞いてから

鈴振って運は神さまにあずけ

川柳後案

井上柳五郎報

ちづ

弘幸

雪代

一歩

巡郎

忠子

由郎

夢酔

裕

宗光

花子

紫泉

秀子

哲三

多賀子

メ女

重一

雪子

寿美子

鉄花人

晴月

雀踊子

雄々

弘朗

愚童

舞吉

早苗

照路

知恵だけは有っても金にゆきづまり

入れ知恵の孫の尻尾が出つ放し

確定申告総身の知恵を出し尽し

階段に同行二人の杖がある

階段を上るまっ赤な炎を抱いて

階段の隅に幸せ住むという

階段へ愛の手が寄る車椅子

昏が合いそうになる満員車

減びては昏寒し老い独り

昏が昨日の嘘を知っている

昏の企み知つてくすり指

胃がんには鉄腕アトムもかなわない

また選挙違反せよとの恩赦かな

なぞの手が痒いところにやんわりと

歯痒いのあの入いつも待たす人

リハビリの階段子が待つ妻が待つ

歯痒いがハッキリ負けを自覚する

しもやけが痒い明治のままの母

川柳塔とつとり

岩原

喬水報

洋平

草風

義親

美智子

美代子

金吾

柳五郎

哲郎

青銅

博友

桃風

秋月

佐加恵

拓治

健一

吟平

鮫虎狼

たけ志

番茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

茶

出稼ぎのふるさと雪が待っている
 中流のくらしだんだん腹が出る
 打たれてもいいから頭出してみる
 春がゆくのを追いかけて旅に出る
 重責を全うせよとおだてられ
 妻老いて愛の重心子に移し
 初孫の重さみんなに回されて

喬水 喬水
 由多香 由多香
 多可志 多可志
 粗粒 粗粒
 呼風 呼風
 和和 和和

昭和から重い荷物も引継がれ
 成功の陰に苦勞の妻がいる
 春を踏む子の成長を遠く見る
 長生きと成人病が背くらべ
 大成の夢誘惑の風に乗る
 成長の早さ背丈も親を越し
 単身で赴任せよとは真つ平だ

圭一郎 圭一郎
 砂山花 砂山花
 山人 山人
 友夫 友夫
 帆雀 帆雀
 一枝 一枝
 旋風 旋風

平凡に生きよう妻と酌み交し
 平凡に生きて自叙伝まだ書けぬ
 平手打ちくわした方が愛してる
 新風 俊路
 艶子 艶子
 各地柳壇賞の授賞は、四月本社句会で
 (川柳塔社) 行います。

秀句

赤川菊野

子を五人産んでひとりの米を研ぐ

評 五人の子がありながら、一緒に暮らす子が誰もいない。人間の切なさ、母としての哀しさを嘆いているように思われるが、この句の底流には、ひとり暮らしを楽しんでいる風情が感じられる。人生いろいろ、子どもたちの同居の誘いを軽くいなして、気楽なひとり暮らしを満喫しながら趣味を楽しむ適当に忙しい日を送る傍ら、子や孫に頼られる田辺聖子の小説の中の老ヒロインのような、したたかな明るさが漂っている。

(玉置 重人)

佳句 (11句)

父として白いページを子に遺す 深日白光子
 ぬむり葉が効かないうちに木をゆする 八木 千代
 子を産まぬ乳房未完のまま閉じる 島村美津子
 病院の雨はいのちを考える 大路 美幸
 丁寧に折っているのは騙し舟 小出 智子
 本当の友は言葉飾らない 川島颯云児
 柝の音が冴える人生ふた幕目 正本 水客
 生き方を変えてみたい日のゴミ袋 林 はつ絵
 小言聞く尻の方から抜けてゆく 土居 耕花
 負けそうになると女を主張する 吉川 寿美
 良い事の外は聞かない老いの耳 藤村 女

4 月 各 地 句 会 案 内

	日 / 時 及 び 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	2日(日)午後1時から ライター・落書き・らーめん・駱駝	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2-9-2 河内天笑
川柳塔 まつえ	8日(土)午後1時半から 億・草・流れる	慈雲寺番神堂 松江市和多見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川柳塔 わかやま	9日(日)午後1時から 視界・潮・思案	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
八尾市民 川柳会	9日(日)午前10時集合 幻・城・のろし(狼火)・雑感	高安城～信貴山城を歩く句会 近鉄山本駅内信貴山口集合 〒581 八尾市弓削町南2-141 飯田悦郎
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から 缶・庭・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 句会費 300円 投句料 62円切手4枚
尼崎 いくしま	14日(金)午後1時から 記念・義理・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料60円切手3枚
川柳 ねやがわ	16日(日)午後1時から 弁当・役所・回答・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時から 米・空気・高い・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曾根下車東南徒歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南大阪 川柳会	19日(水)午後6時から 別人・目覚める・塩分・連休	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪生野区生野西1-5-2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
富柳会	20日(木)午後1時から 縫い包・温かい・濡衣	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木) 正午から 期待・弱み・スランプ・自由吟	高槻市民会館301号室 阪急高槻徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島風云児 句会費 500円 投句料 200円(郵券可) 各題2句
南海 川柳会	21日(金)午後6時から 落葉・新芽・坂道・性質	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳 東大阪	22日(土)午後6時から 歌手・伸びる・窓・カード	東大阪市社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5-6-23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川柳会	24日(月)午後6時から 醒める・成り行き・強気・財産	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒545 大阪阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円 (郵券可)、各題3句以内

原稿送り先 (締切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地藏堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

悼 追 子 操 橋 高
会 句 月 4 社 本

日時 四月七日(金) 午後六時
会場 メンスファッションセンター3階

東区内本町1-1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(2番出口)交差点西南角

おはなし

兼題 「出費」

「出会い」

「流れる」

「猫」

西田 柳 宏子

高須賀 金太選

藤田 泰子選

宮園 射月芳選

西尾 栞選

席題 二題 当日発表 各題三句以内厳守
会費 五百円

★投句は柳箋(4cm×19cm)に一葉一句。
各葉ごとに裏面に必ず氏名明記。
投句料 300円(60円切手5枚)同封のこと。

川 柳 塔 社

5月の兼題

「ランプ」 「儀」 「礼」 「動」 「く」 「面」

『夜市川柳』募集

第11回 「手」 土居 耕花 選

3句・締切 4月末日

第12回 「乳房」 橘 高 薫 風 選

締切 5月末日

投句先 〒593 堺市堀上緑町2-19-2

河内天笑方

堺 川 柳 会

● 募 集 ●

六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞 選

水煙抄(10句) 黒川 紫香 選

愛染帖(3句) 橘 高 薫 風 選

茴香の花(3句・女性) 小出 智子 選

「雨」 山川 克子 選

「ホテル」 両川 洋々 選

「近い」 岩本 雀踊子 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞 選

水煙抄(10句) 黒川 紫香 選

愛染帖(3句) 橘 高 薫 風 選

茴香の花(3句・女性) 小出 智子 選

「砂」 山口 高明 選

「風鈴」 丸山 よし津 選

「蹴る」 吉岡 美房 選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友
に限らず、どなたでも投句できます。

[5月の本社句会は8日(月)]

定価 五百円(送料50円)

半年分 三千二百円(送料共)

一年分 六千三百円(送料共)

一九八九年三月二十五日印刷

一九八九年四月一日発行

編集兼 西尾 栞

印刷所 藤原 童心 社

〒545 大阪市阿倍野区三木町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話(三六九)一六九一四番

振替口座大阪8-1-3336八番

II 編集後記 II

☆三月に入って四日間、日川協の事務局へ何句の校正に詰める。一萬六千句の作品の選者も大変だが、校正も手間暇を掛けての作業で骨が折れる。その間カルチャアの教室、川柳塔のレイアウトと休む日がない。

☆四日は日川協の常任理事会のあと、木津川計氏主宰の「上方芸能」誌、百舌記念パーティーに西尾某主幹直原玉青画伯らと出席、番傘からも磯野いきむ主幹、亀山恭太幹事長山本翠公編集長らが見えていた。五百名を越す上方の芸能と文化人の顔が揃って盛大だった。

☆木津川計氏は、NHKラジオの放送記念日の特別番組で対談をして頂いたが、川柳に理解が深く、常々、路郎・水府両先生、それに私の句まで取り上げて紹介して下さい。立命館大学の教授でもあり、一般教養課程の講義で「人の世や嗚呼にはじまる広辞苑」

の句を例に話をされたことがあり、それを聴講した学生さんが川柳をなさっている母上にその句を知っているかと聞かれたところ、それは毎月寝屋川句会に出席されている方だからご本人をよく存じ上げていると答えられたそう。雑誌を発行し続ける苦労は並大抵ではないが、そういう方は歳以上に若々しい。日本の文化が画一化する時代に、上方の個性を守ることにはだんだんと難しくなっている。なお一層の「上方芸能」誌の発展を願った。

☆翌五日は黒川葉香副主幹の尼崎市文化功労賞の受賞と句文集「むらさき」の発刊記念句集であった。二百六十名の出席者で活気があったが、裏方さんたちの目に見えぬ努力は大変だったろう。特に大きな会に馴れぬ人たちが一心に自分の役割りを果たすひたむきさは美しく、心を打たれた。気持ちの良い大会だった。

☆七月九日の西尾某主幹の叙勲記念大会の次第を別項

に発表したのが、大方のご支援をお願いする。(薫) ▼のつけから尾籠な話で恐縮だが、家のトイレの扉裏に一枚の家訓が貼つてある。「なまけるな／おこるな／いばるな／あせるな／くさるな／おこるな」と、るな六箇条とも言える教えである。終りに、右条々自戒自守とあって公照の陰刻が捺してある。用を足すときは正面にあるものだから嫌でも平明簡潔な方がいい。まことに平明簡潔ながら、どの一句もたやすく行うことはできない。

▼「なまけるな」とは、私のために特別注文して作られたことばのようであるが、毎日トイレで激発され、手を洗った水と一緒に流す、完全に忘れてしまうので六箇条から外すわけにいかない。どうやらわが先祖は南方系のように、その面では純粋性を保っているようだ。おこるな「今の世の中でおこらぬのは、生きることを拒絶されたようで、政治が国民に望む本音のよう

でいただけぬ。いばるな」これはどうやら守れそうに思うのは、いばるほどの地位名誉を持ってないからということで、他人様の目には結構いばつて見えるかも知れない。「あせるな」そう長生きをすることは思っていないが、今まで生きて来てわかつていることだから鶏が天翔することもないだろう。「くさるな」今の内閣に対してのこと。「おこるな」これはおおよそ勝手違いに思えてならぬがどうか。(き)

★「忙中閑」としゅれこみ二月下旬の三日間を奄美大島への旅ですごした。ツアーをもうしこんだ時、旅行社の係員が「何も見るところはありません。食事やホテルもあまり期待しないでください」と、まるでそっけない応待であった。★昨年十二月、大阪・奄美間に日本エアシステムのジェット機が就航、わずか一時間半の空の旅。昭和天皇の大喪をはさんだ中途半端な時期とあって、一行12名の

こじんまりしたグループで行動をともし、佐渡島につぐ日本第二の島の一市三町三村、全周六〇〇キロをバスで走破した。

★南州謫居跡のほか、名所・旧跡らしいものは何もなかったが、空青く、海碧く、気澄み、ハイビスカス、ブーゲンビリア、パイヤ、ヤシ、マングロップ、ソテツ等々、おもしろい垂熱帯植物がすばらしかった。

★さて、「文房四宝」の続編。これをつかう「文人」とは何か。俳人江國滋氏の著作を引用すると、今はなき画家早川幾忠は、その自伝のなかで「詩をつくる、文をつくる、書がかける、絵がかける、その五つがそろわれること、この五つがそろった人」とのべている。中国には「三絶」ということばがあり、書・画・詩の三つに長じていることを一流画家の資格としている。なんとかして私も文人の道はくれになりたいが、その道はけわしい。(正)

川柳カレンダー・全国川柳(誌上)大会

名誉会長 坂本 一胡 (元NHK会長)

会長 佐藤 正敏 (川柳研究社顧問)

※渡邊 蓮夫 (毎日新聞川柳全国版選者)

※野村 圭佑 (川柳きやり吟社主幹)

※尾藤 三柳 (読売新聞時事川柳選者)

※磯野いさむ (番傘川柳本社主幹)

選 ※西尾 栞 (川柳塔社主幹)

※去来川巨城 (ふあうすと川柳社主幹)

※宮崎 慶子 (川柳研究社幹事)

(順不同)

【投句方法】 投句料無料。雑詠。ハガキに三句。

○雅号・住所氏名・性別記入・一人一枚に限る。

【締め切り】 平成元年六月末日

【発表】 平成元年十一月十五日「川柳カレンダー」紙上。

【表彰】

A 上位入賞者には①表彰状②入賞の盾③選者揮毫色紙

④主催者記念品が贈られます。

B その他入選者には主催者記念品が贈られます。

【投句先】 〒1194-1001 東京都町田市金井町四二四

日本伝統美保存会文化部

「川柳カレンダー」全国川柳(誌上)大会事務局

ボリュームたっぷり スタミナ満点!!

豚饅・焼売・焼餃子



なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ

TEL641-0551